

吉 永 遺 跡

(V地区)

2003

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター

よし なが 遺 跡
(V地区)

2003

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター



序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域社会の創造に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い、地下に埋もれた歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、当県では、関係機関との調整を図りながら、必要な範囲について事前に発掘調査を行い、その成果を記録として留め、郷土を築いてきた先人の足跡を後世に残すこととしております。

本書は、豊浦郡豊浦町大字吉永地区の県営ほ場整備事業に先立ち、同地区内に所在する吉永遺跡(V地区)について財団法人山口県教育財団が山口県教育委員会及び山口県農林部からの委託を受けて実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、弥生時代から近世にかけて営まれた集落の跡を発見するとともに、弥生時代前期を中心とした数多くの遺物が出土し、当時の人々の生活文化の実態を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

本書が、文化財保護に関する理解を深め、教育並びに学術研究の資料として活用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

終わりに、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人 山口県教育財団
理事長 牛見 正彦

例言

- 1 本書は、山口県豊浦郡豊浦町大字吉永に所在する吉永遺跡（V地区）の発掘調査報告書である。1997年度調査（I・II地区）、1998年度調査（III地区）、2001年度調査（IV地区）に続く調査であることから、地区名をV地区とした。
- 2 調査は、県営ほ場整備事業に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県教育委員会並びに山口県農林部の委託を受け実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県教育財団	山口県埋蔵文化財センター
調査担当	指導主事	向上 昭彦
	指導主事	藤田 英恵
	指導主事	堀田 浩一
	指導主事	松浦 孝和
	指導主事	上土井 宏典
	文化財専門員	谷口 哲一（山口県教育庁文化財保護課）
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口県農林部農村整備課、豊田農林事務所、豊浦町農林水産課、豊浦町教育委員会ならびに地元関係各位の協力・援助を得た。
- 5 石器・石製品については、山口県立博物館専門学芸員 亀谷 敦 氏に表面観察による石材鑑定を依頼した。
- 6 第1図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「川棚温泉」を、第2図は豊田農林事務所提供の地図を、ともに複製使用したものである。
- 7 挿図中の座標は国土座標（第3座標系）をもとにした。また、方位は国土座標（第3座標系）の北、標高は海拔標高で示した。
- 8 土色の表記はMunsell方式による。
（農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』）
- 9 図版中の遺物番号は、挿図の遺物番号と対応する。
- 10 本書で使用した遺構略号は次の通りである。なお、略号以下の遺構番号のうち、最初の1桁は地区番号を表す。

SB	：堅穴住居跡・掘立柱建物跡	SD	：溝	SK	：土坑	SX	：用途不明遺構
SP	：柱穴	TR	：トレンチ				
- 11 本書の作成および執筆は、向上・藤田・堀田・松浦・上土井・谷口が分担して行い、編集は向上が行った。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯と概要	3
III 調査の成果	11
1 遺構	11
2 遺物	45
IV まとめ	84

図版目次

図版1 調査区遠景(南東から)	図版26 溝出土遺物01
図版2 中ノ浜遺跡・高野遺跡を臨む	図版27 溝出土遺物02
図版3 調査区の様子(1)	図版28 溝出土遺物03
図版4 調査区の様子(2)	図版29 溝出土遺物04
図版5 竪穴住居跡	図版30 溝出土遺物05
図版6 掘立柱建物跡	図版31 土坑出土遺物(1)
図版7 溝(1)	図版32 土坑出土遺物(2)
図版8 溝(2)	図版33 土坑出土遺物(3)
図版9 土坑(1)	図版34 土坑出土遺物(4)
図版10 土坑(2)	図版35 土坑出土遺物(5)
図版11 土坑(3)	図版36 土坑出土遺物(6)
図版12 土坑(4)	図版37 土坑出土遺物(7)
図版13 土坑(5)、埋喪遺構、柱穴	図版38 土坑出土遺物(8)
図版14 竪穴住居跡出土遺物(1)	図版39 土坑出土遺物(9)
図版15 竪穴住居跡出土遺物(2)、柱穴出土遺物	図版40 埋喪遺構出土遺物、包含層出土遺物、土製品
図版16 溝出土遺物(1)	図版41 石器・石製品(1)
図版17 溝出土遺物(2)	図版42 石器・石製品(2)
図版18 溝出土遺物(3)	図版43 石器・石製品(3)
図版19 溝出土遺物(4)	図版44 石器・石製品(4)
図版20 溝出土遺物(5)	図版45 石器・石製品(5)
図版21 溝出土遺物(6)	図版46 石器・石製品(6)
図版22 溝出土遺物(7)	
図版23 溝出土遺物(8)	
図版24 溝出土遺物(9)	
図版25 溝出土遺物(0)	

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の主な遺跡	2	第35図	溝出土土器実測図②	49
第2図	調査区設定図	5	第36図	溝出土土器実測図③	50
第3図	遺構分布図(1)	6	第37図	溝出土土器実測図(4)	51
第4図	遺構分布図(2)	7・8	第38図	溝出土土器実測図(5)	52
第5図	遺構分布図(3)	9	第39図	溝出土土器実測図(6)	53
第6図	遺構分布図(4)	10	第40図	溝出土土器実測図(7)	54
第7図	竪穴住居跡実測図(1)	11	第41図	溝出土土器実測図(8)	56
第8図	竪穴住居跡実測図(2)	12	第42図	溝出土土器実測図(9)	57
第9図	掘立柱建物跡実測図(1)	14	第43図	溝出土土器実測図00	58
第10図	掘立柱建物跡実測図(2)	15	第44図	溝出土土器実測図01	59
第11図	掘立柱建物跡実測図(3)	16	第45図	溝出土土器実測図02	60
第12図	掘立柱建物跡実測図(4)	17	第46図	編みかご状の痕跡のある土器	60
第13図	掘立柱建物跡実測図(5)	18	第47図	土坑出土土器実測図(1)	61
第14図	掘立柱建物跡実測図(6)	19	第48図	土坑出土土器実測図(2)	62
第15図	掘立柱建物跡実測図(7)	20	第49図	土坑出土土器実測図(3)	63
第16図	溝実測図(1)	23・24	第50図	土坑出土土器実測図(4)	64
第17図	溝実測図(2)	25	第51図	土坑出土土器実測図(5)	65
第18図	溝実測図(3)	26	第52図	土坑出土土器実測図(6)	66
第19図	溝実測図(4)	27・28	第53図	土坑出土土器実測図(7)	67
第20図	溝実測図(5)	29・30	第54図	土坑出土土器実測図(8)	68
第21図	溝実測図(6)	31・32	第55図	土坑出土土器実測図(9)	70
第22図	溝実測図(7)	33・34	第56図	土坑出土土器実測図00	71
第23図	溝実測図(8)	35	第57図	土坑出土土器実測図01	72
第24図	溝実測図(9)	36	第58図	埋藏遺構出土土器実測図	73
第25図	土坑実測図(1)	38	第59図	包含層出土土器実測図	73
第26図	土坑実測図(2)	39	第60図	土製品実測図	74
第27図	土坑実測図(3)	40	第61図	陶埴実測図	75
第28図	土坑実測図(4)	41	第62図	石器・石製品実測図(1)	78
第29図	土坑実測図(5)	42	第63図	石器・石製品実測図(2)	79
第30図	埋藏遺構実測図	43	第64図	石器・石製品実測図(3)	80
第31図	柱穴実測図	44	第65図	石器・石製品実測図(4)	81
第32図	竪穴住居跡出土土器実測図	46	第66図	石器・石製品実測図(5)	82
第33図	柱穴出土土器実測図	47	第67図	石器・石製品実測図(6)	83
第34図	溝出土土器実測図(1)	47	第68図	溝位置関係図	84

表目次

第1表	掘立柱建物跡一覧表	21	第2表	石器一覧表	77
-----	-----------	----	-----	-------	----

I 遺跡の位置と環境

吉永遺跡（V地区）は、豊浦郡豊浦町大字吉永に所在する、弥生時代から近世にかけての集落遺跡である。

豊浦町は、本州の最西端に位置する。西は響灘に面し、北は狗留孫山（616.3m）、東は鬼ヶ城山（619.6m）など、標高300m級の豊浦山地の山々に囲まれる。これらに源流をもつ川棚川・吉永川・黒井川の3つの小河川が響灘に向かって西流しており、その流域には花崗岩丘陵の間に発達した洪積台地と谷底平野、三角州、湾頭を広く閉塞して発達した砂丘性の砂堆地から構成される豊浦低地が広がる。本遺跡は吉永川の左岸、大門丘陵辺縁の洪積台地上にある。

気候は、冬季に北西の季節風の影響を受けるが、響灘沿岸を北上する対馬海流の影響により年間を通じて温暖である。また、大陸や朝鮮半島、九州と近接しているため、気候的・地理的条件に恵まれており、人々にとって住みやすい風土であったことをうかがわせる。

吉永遺跡の周辺では数多くの遺跡の存在が知られている。以下、この地域の遺跡の概観について触れてみたい。

豊浦町は、弥生時代における大陸文化受容の玄関口であり、文化の先進地域あるいは文化の交流地域として多くの集落が形成されていった。弥生時代前期の遺跡としては、埋葬跡である中ノ浜遺跡、多くの土坑群が発見された大門遺跡、大規模な集落跡であった高野遺跡などがある。中ノ浜遺跡は県内における最古かつ最大規模の集団埋葬遺跡であり、埋葬習俗、社会構成、弥生人の地域性などをうかがい知ることができる。また、昨年度調査が行われた吉永遺跡（IV地区）では、環壕の可能性がある溝が発見された。弥生時代前期末の山の神遺跡では鉄製鋤が発見されており、分析の結果、中国の山東半島から長江流域の鉄鉱石を原料に、その産出地もしくは朝鮮半島で製造されたものと推定されている。

弥生時代中期には、城山遺跡と向日山遺跡など、いわゆる高地性の遺跡が増えてくる。城山遺跡では、標高200m近い高所で堅穴住居跡と貯蔵用堅穴が確認された。また城山遺跡の北西に隣接する向日山遺跡でも、周辺水田との比高35mの高台から堅穴住居跡と土坑が発見されている。特に、浅い皿状土坑は烽火場の可能性も考えられ、有事の際に城山との連絡をとっていたと想像されている。

弥生時代後期の遺跡としては、船頭遺跡などがある。船頭遺跡は、集落の中央部を排水を目的とした溝が縦走しており、その中から多量の破棄された土器が出土している。この土器は県西部における弥生時代後期の土器編年の基準を示している。弥生時代終末期から古墳時代初項にかけては、吉永遺跡（Ⅲ地区）が最も繁栄した時期である。遺構・遺物は質量ともに高野遺跡を上回っており、この地域の拠点集落であったと考えられる。

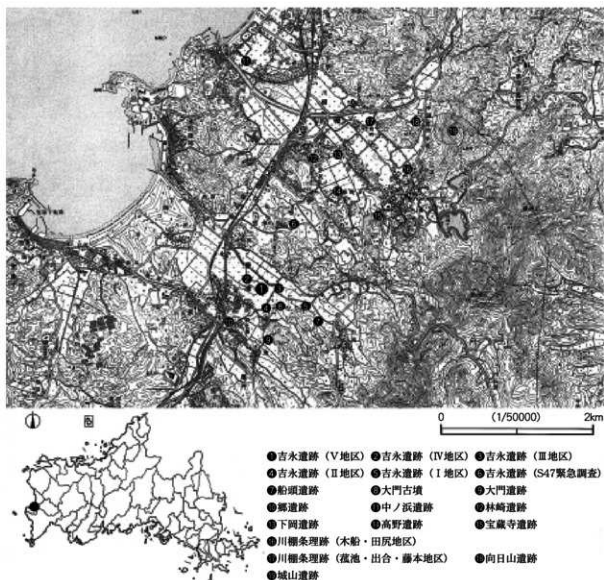
古墳時代後期の遺跡として、大門古墳などの沖積低地型の古墳や、響灘に面する黒井平野丘陵の大迫古墳群、陶質土器や鉄鎧を副葬する心光寺古墳群、90基以上の円墳が群集する甲山古墳群などの海洋指向型の古墳群の存在が知られている。大門古墳は、響灘沿岸最北の前方後円墳で、円筒埴輪を立て巡らした県下でも数少ない古墳の一つである。墳丘長36m、横穴式石室を持ち、大迫古墳群や甲山古墳群などとともに、横穴式石室の時期的変遷を知ることのできる古墳でもある。

古代には律令制がしかかれ、税制の基盤として条里制とよばれる農地区画制度が施行された。県内各地で条里制跡が認められているが、豊浦町域は長門国豊浦郡に属し、川棚桑里跡（菰池地区・出合地区・藤本地区）からは条里制の坪境とみられる溝が検出されている。奈良時代の建物跡や土器が吉永遺跡や高野遺跡から、また、平安時代の土坑が下岡遺跡で確認されている。

中世の遺跡としては、船頭遺跡、高野遺跡などがある。船頭遺跡の集落は、15～16世紀前半のもので、掘立柱建物跡などが多数検出されている。建物は溝で区画された敷地内にあり、母屋や付属棟から構成されており、中世の村落の構造を知る重要な遺跡となっている。

近世の遺跡が少ない中で、吉永遺跡（IV地区）で見つかった屋敷跡（庭園跡）は貴重である。県内では庭園の発掘例は少なく、近世庭園の構造や様式などを知る重要な資料といえる。

以上、吉永遺跡周辺の遺跡について概観してきた。響灘沿岸のこの一帯は、弥生時代～古墳時代を中心に当時の人々の生活文化の実態を知るための数多くの遺構や遺物が出土している。今後の発掘成果と併せて、さらに、この地域一帯の様子が明らかになることを期待したい。



第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

Ⅱ 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

山口県教育委員会では農業基盤整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、関係機関と事前協議を行い、現状保存が困難な遺跡については、記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施している。近年、豊浦町吉永地区でも、ほ場整備に伴う発掘調査が行われてきた。1997（平成9）年度の吉永遺跡（Ⅰ・Ⅱ地区）発掘調査を皮切りに、これまで29,400㎡が山口県教育財団および豊浦町教育委員会によって調査されている。

吉永遺跡（Ⅲ－西地区）の西に隣接するV地区でも、県営ほ場整備豊浦第2地区（第5－3換地区）の対象地となったため、山口県教育委員会は山口県農林部農村整備課と協議を行い、事業の計画に合わせて、当該地域の中で遺構の埋存の可能性の高い地区について、2000（平成12）年に試掘による事前調査を行った。この結果、多数のトレンチで遺構が確認されたため、現状保存が困難な15,000㎡の範囲を対象に発掘調査を行うこととなった。調査は、山口県農林部、及び文化庁の国庫補助を受けた山口県教育委員会から、調査を委託された財団法人山口県教育財団の山口県埋蔵文化財センターが実施することになった。

2 調査の概要

平成14年4月10日、発掘調査を始めるに当たって、豊浦町農林水産課農村整備係、豊田農林事務所との綿密な打ち合わせを行うと共に、豊浦町教育委員会・豊浦町土地改良区、また近隣の幼稚園・小学校・中学校・警察署・消防署・自治会等に安全確保のための協力と理解を要請した。

今回は発掘調査対象地区が5ヶ所に分散しているため、調査区を①地区～⑤地区に区分した（第2図）。4月26日に事務所を設置し、5月7日、②地区から重機による表土除去を開始した。客土や包含層が厚く堆積していることや、調査面積が広いこともあって各地区の表土除去は5月22日まで続けられた。

重機による表土除去と並行して、5月13日から作業員を動員しての本格的な遺構の検出作業を進めた。特に、最も面積の広い③地区低位側の遺構検出は、礫を除去しながら進めていかね



重機による表土除去



遺構の掘り込み

ばならなかったため、予想以上の時間と労力を要した。その間、調査員による平板実測も並行して行った。また、調査区の防災及び排水対策も行い、6月10日からは、測量の基盤となる標準座標杭を設置した。

遺構検出により、多数の柱穴や土坑、調査区の東部および北部に延びる溝、竪穴住居跡等の遺構があることを確認した。このような状況をふまえ、計画的・効果的に調査する必要から調査方法や掘り込みの順序の検討を行った。

掘り込み作業は、6月12日に②地区の溝と③地区の高位面（東側）から開始した。包含層に広く覆われている部分もあり、土層の堆積状況と遺構の切り合い等を確認するため、遺構の掘り込みに入る前にトレンチ調査を実施した。続いて①地区の遺構掘り込みは、溝を中心に8月1日より開始した。土坑や溝の中には、多量の遺物を含むものや切り合い関係のあるものが多く、慎重に作業を進めていった。また、深くなった土坑や溝の掘り込みは天候に左右されることが多く、防水・排水作業に多くの時間を費やすこととなった。そのため、10月上旬まで①・②・③地区の掘り込みは続いた。

10月9日からは⑤地区の遺構掘り込みを開始し、続いて10月23日からは④地区の遺構検出を開始した。④地区は非常に水はげが悪く作業が困難であったことに加え、遺構が確認できなかったことから土層確認を中心とする調査を行った。

また、小学生や大学生の発掘体験、地元公民館による遺跡見学、博物館学実習生の発掘実習などを受け入れ、地域の郷土学習の場として活用してもらった。

11月28日に、ヘリコプター(実機)を使用して遺跡の空中撮影・空中写真測量を行った。11月23日には、発掘調査の成果を広く公開すべく現地説明会を開催した。当日は天候もよく、地元の人たちを中心に約150名の来訪者があり、溝・竪穴住居跡・大型掘立柱建物跡等の遺構や出土した遺物を見学してもらった。

12月6日、すべての遺構掘り込み作業が終了した。その後、12月12日まで調査員による遺構実測を続け、翌日12月13日、吉永遺跡の現地での調査はすべて終了した。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元と実測及び写真撮影を行い、この報告書を刊行するに至った。



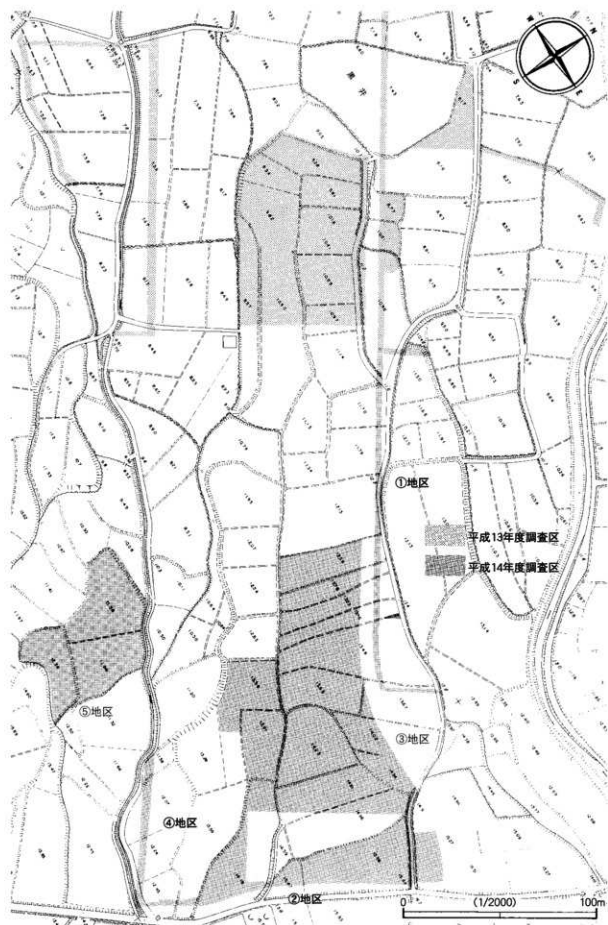
平板実測



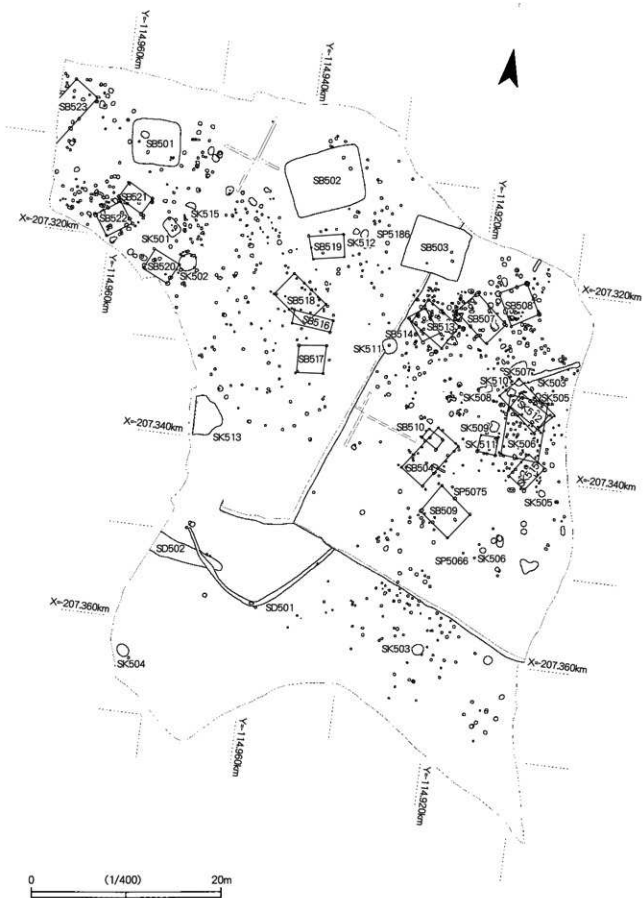
発掘体験学習



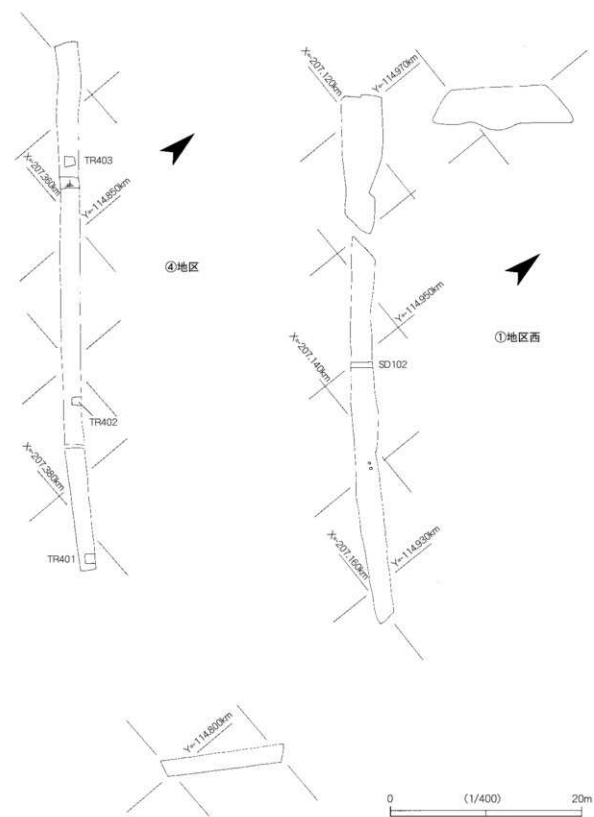
現地説明会



第2図 調査区設定図



第3図 遺構分布図(1)



第6図 遺構分布図(4)

Ⅲ 調査の成果

1 遺構

今年度の調査区は15,000㎡に及ぶが、現道や水路によって分断されているため、便宜上①地区～⑥地区に分けて調査を進めた。発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡35棟、溝28条、土坑267基、埋藏遺構2基、柱穴約3,000個である。

①・②・③地区は標高11～15mの洪積台地上に位置しており、弥生時代～近世の遺構が多数検出された。特に③地区高位面（東側）は台地の頂央部であるにもかかわらず削平を免れており、遺構が密集している。⑤地区は①～③地区とは別の台地の辺縁部にあたるが遺構の残存状況はよく、弥生時代～中世の遺構を確認した。④地区では遺構は検出されなかった。

(1) 竪穴住居跡（第7・8図、図版5）

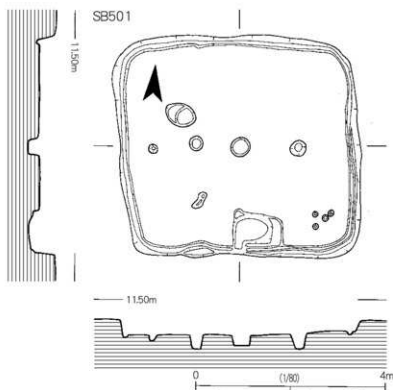
竪穴住居跡は3軒とも⑤地区で検出された。小川に面した調査区北辺に沿ってほぼ等間隔に並び、平面形は長方形で、屋内周溝を有し、床面の南辺中央に土坑が掘り込まれている点共通している。軸方位は概ね東西方向であるが、SB502については若干異なる。ともに弥生時代終末～古墳時代初頭の建物跡であることから、原地形に制約された結果であろう。一部は後世の削平を受けているものの残存壁高は30cm以上あり、遺存状況は良好といえる。

SB501（第7図、図版5）3軒のうち西側に位置する住居跡である。平面形は正方形に近く、長軸5.08m、短軸4.74m、残存壁高33cmの規模をもつ。主柱穴は2本で、粘質砂質土が堆積していた。また、柱穴間には、直径38cm、

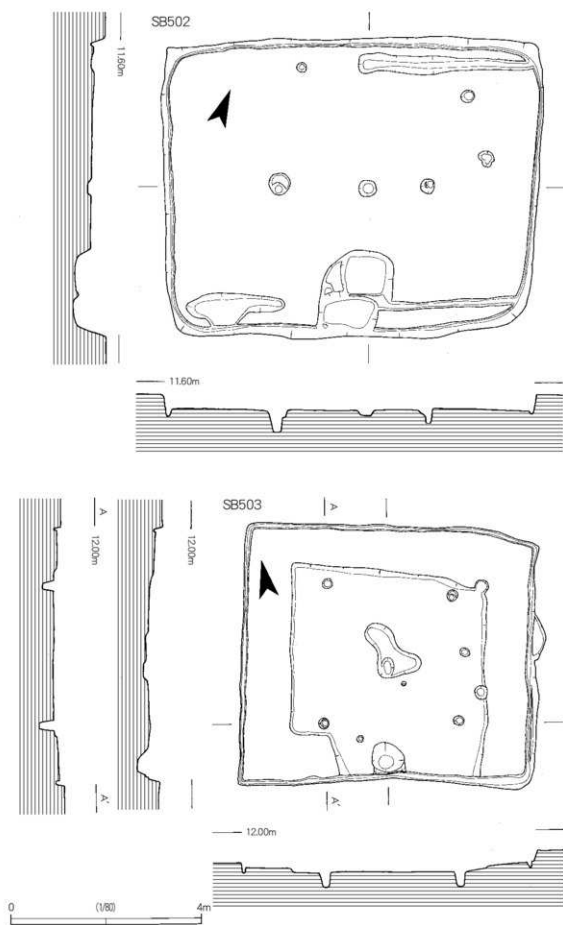
深さ26cmの柱穴状の掘り込みがある。周溝は、幅14～30cm、床面からの深さ4～7cm。南辺中央の土坑は長方形で、長軸104cm、短軸96cm、床面からの深さ25cm。埋土は上層が黒色粘質土、下層がにぶい黄褐色粘質土で、他の2軒と異なり焼土や炭は見られない。遺物は細片の土師器が多く、復元できるものはなかった。

SB502（第8図、図版5）

3軒のうち中央に位置する住居跡である。長軸7.86m、短軸6.30m、残存壁高34cmで、今回検出した竪穴住居の中では



第7図 竪穴住居跡実測図(1)



第8図 竪穴住居跡実測図(2)

最大規模である。主柱穴は2本、壁下を、幅14～34cm、床面からの深さ3～15cmの屋内周溝が巡る。南辺中央の土坑は不整な長方形で、長軸182cm、短軸150cm、床面からの深さ36cmである。この土坑と周溝南東隅を結ぶように、幅14～20cm、深さ13cmの溝が、周溝南辺と平行に走っている。その西側延長線上には、長軸206cm、短軸68cm、深さ7cmの溝状土坑も見られる。また周溝の北東隅からも、幅20～40cm、深さ2～15cmの溝が周溝と平行に延びる。間仕切りあるいは増築の可能性も考えられるが、壁面との間隔はわずか10～20cmにすぎず、無理があろう。埋土上層は黒色粘質土、中層は黄褐色粘質砂質土を含む暗褐色粘質土。下層の極暗褐色粘質土には多量の焼土が混入していた。床面直上では炭化した建築材が検出され、放射状にならぶそれは、焼け落ちた屋根を想像させる。壁面も焼成を受けており、焼土を含む層は壁際に厚みを増している。住居廃棄の際に意図的に火を放った焼失家屋と推測される。出土遺物には土師器丸底壺(1)、椀形高坏(2)、高坏(3)がある。

S B 503 (第8図、図版5) 3軒のうち東側に位置する住居跡である。後世の水田化の際に西半を削平されている。長軸6.30m、短軸5.58m、残存壁高44cmの規模をもつ。他の住居跡の主柱穴は2本であるのに対し、この住居跡は4本の主柱穴を有する。また南辺の一部を除いて、幅84～100cm、高さ4～9cmのベッド状遺構が設けられている点もほかの住居とは異なっている。屋内周溝は幅7～30cm、床面からの深さ2～10cm。南辺中央の土坑は直径68cm、床面からの深さ44cmの円形で、土器が投棄されていた。また、床面中央には長軸124cm、短軸92cm、深さ4～9cmの不整形土坑がある。埋土中に石礫が多く含まれており、壁面が幾分赤変していたが屋内炉と断定するには不十分である。埋土は、上層が黒色粘質土、下層が暗褐色粘質土である。壁際や床面に焼土や炭が多く見られ、S B 502と同様の焼失家屋であると考えられる。土師器丸底壺(8)、壺(13)、甕(4～7)、鉢(11・12)、椀形高坏(9)、高坏(10・14～16)など、出土した遺物は3軒の駆穴住居の中では最も多い。

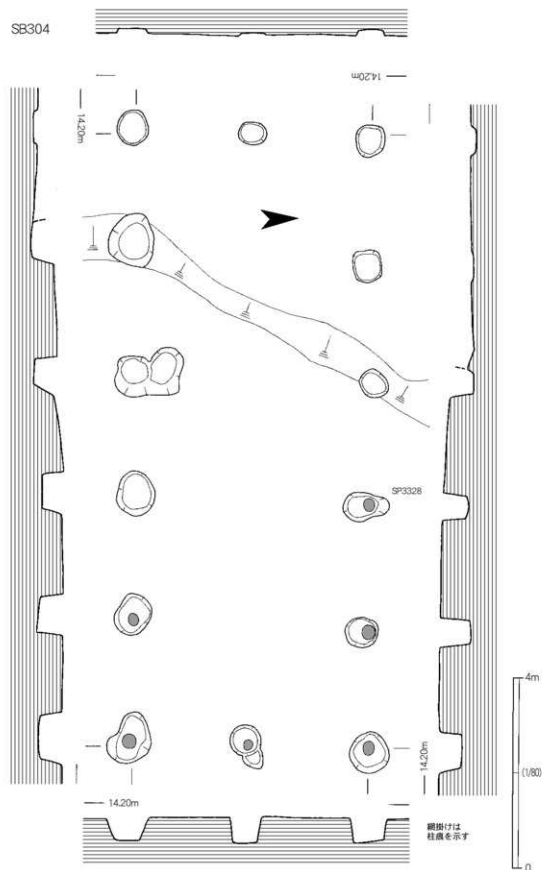
(2) 掘立柱建物跡

調査区内から多数の柱穴が検出され、35棟の掘立柱建物を復元した(第1表)。S B 201の1棟以外は、全て③地区と⑤地区に存在している。③地区で確認された建物跡は14棟で、調査区南半に集中する。東西または南北に棟を揃えて配置された、一連のものと思われる建物跡も確認した。これらは桁行3間以上、梁行2間以上の規模のものが多く、中には桁行5間(13.1m)におよぶ大型建物跡もある。⑤地区で確認された建物は20棟だが、調査区北半は柱穴が密集しており、さらに建物を復元できる可能性が高い。時期が確定できた建物跡は全て中世のものである。棟方向は南北方向から西へ50～60°振るものもしくはそれと垂直なものが多いが、ほぼ南北方向に棟を揃えたものもみられる。時期が確定しない建物跡も、棟方位が同じものは同時期の遺構と考えて差し支えないであろう。規模は梁行1間の小規模なものがほとんどである。

なお、柱穴に限らず大半の遺構には弥生土器片の流入がみられるため、弥生土器のみが出土した建物跡については、敢えて時期を確定しないことにする。

S B 304 (第9図、図版17) ③地区のほぼ中央に位置する5間×2間の建物である。棟方向はN 89°W。建物の規模は桁行長13.1m、梁行長5.1mで、検出した建物中最大である。柱穴の規模は、長径56～112cm、残存する深さは4～66cmで、建物東辺の柱穴には柱痕の認められるものもあるが、大半は柱痕が確認できない。東辺から3列目の中央にも柱穴があり、2間×2間の建物が並立していた

SB304

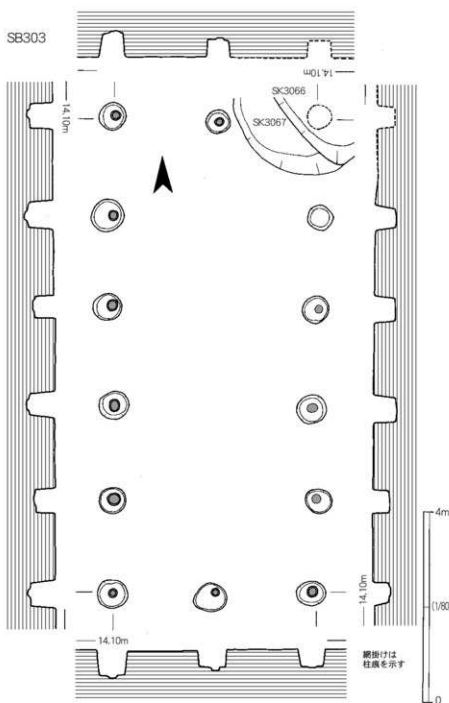


第9図 掘立柱建物跡実測図(1)

可能性も考えたが、もう一方の建物の柱穴が欠如しているため、単独の建物と判断した。S P 3238から須恵器片(19)が出土しており8世紀前半に比定される。

S B 303 (第10図、図版18) S B 304の南東に位置する5間×2間の建物である。棟方向はN01°W。建物の規模は桁行長10.1m、梁行長4.2mである。ほとんどの柱穴に柱痕が認められた。北東隅の柱穴が土坑S K 3066(弥生時代)を切っていたのは時期的にみて明らかだが、表面検出や土層観察では確認できなかった。柱穴の規模は、長径52~64cm、残存する深さは36~62cmである。時期は8世紀半に比定される。

S B 309 (第11図) S B 303の東に位置する3間×2間の建物である。棟方向はN02°W。建物の

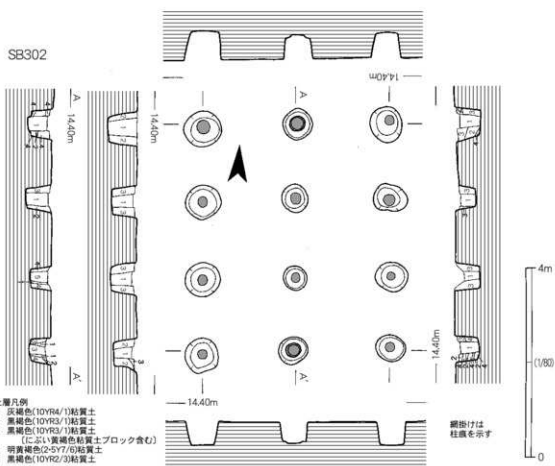
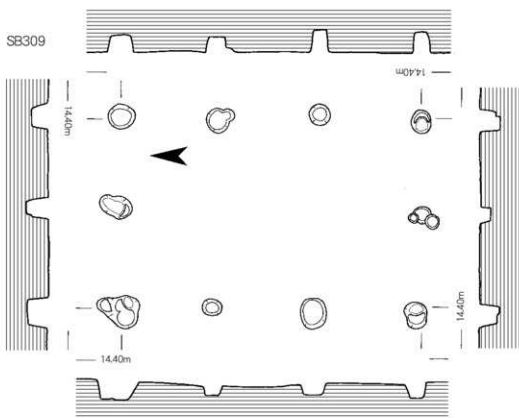


第10図 掘立柱建物跡実測図(2)

規模は桁行長6.4m、梁行長4.2mである。時期は確定していないがS B 304と同時期と考えられる。

S B 302 (第11図、図版19) S B 309の南に位置する3間×2間の総柱建物である。棟方向はN03°Wで、東辺、西辺がS B 309とほぼ揃う。建物の規模は桁行長4.9m、梁行長4.0mである。柱穴の規模は、長径52~80cm、残存する深さは40~64cmで、全ての柱穴に明確な柱痕が認められた。時期は確定していないがS B 304と同時期と考えられる。

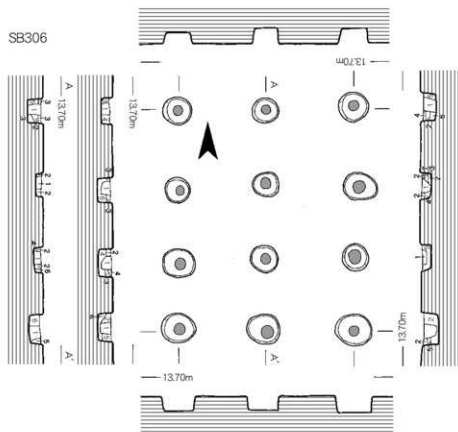
S B 306 (第12図、図版20) S B 304の南西に位置する3間×2間の総柱建物である。棟方向はN02°W。建物の規模は桁行長4.6m、梁行長3.7mである。柱



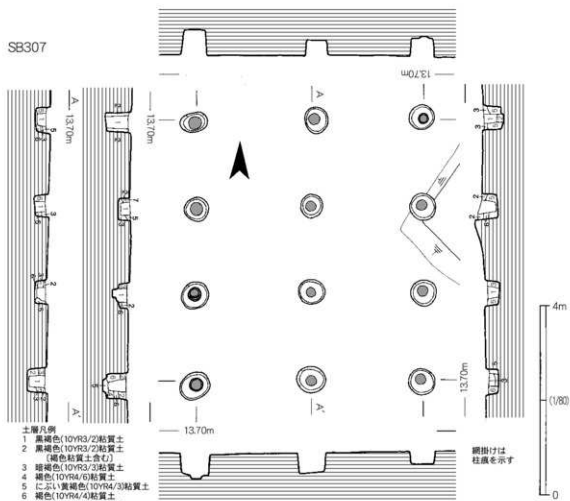
- 土層凡例
- 1 灰褐色(10YR6/1)粘質土
 - 2 黒褐色(10YR3/1)粘質土
 - 3 黒褐色(10YR3/1)粘質土
(正ぶい黄褐色粘質土ブロック含む)
 - 4 明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土
 - 5 黒褐色(10YR2/3)粘質土

第11図 掘立柱建物跡実測図(3)

SB306

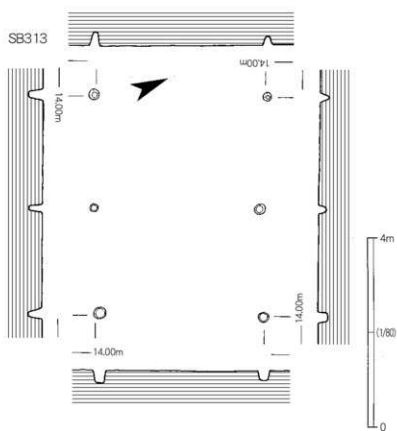
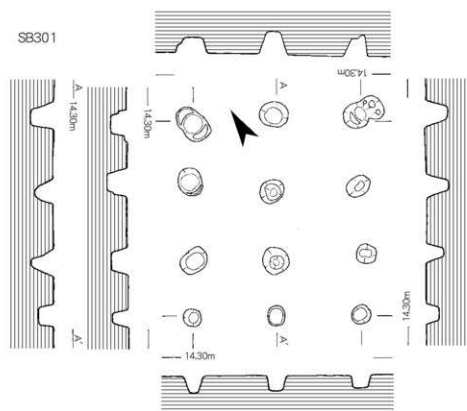


SB307



- 土層凡例
- 1 黄褐色(10YR3/2)粘質土
 - 2 黄褐色(10YR3/2)粘質土
(褐色粘質土含む)
 - 3 緑褐色(10YR3/2)粘質土
 - 4 褐色(10YR4/6)粘質土
 - 5 C上1 黄褐色(10YR4/3)粘質土
 - 6 褐色(10YR4/6)粘質土
 - 7 黄褐色(10YR5/6)粘質土

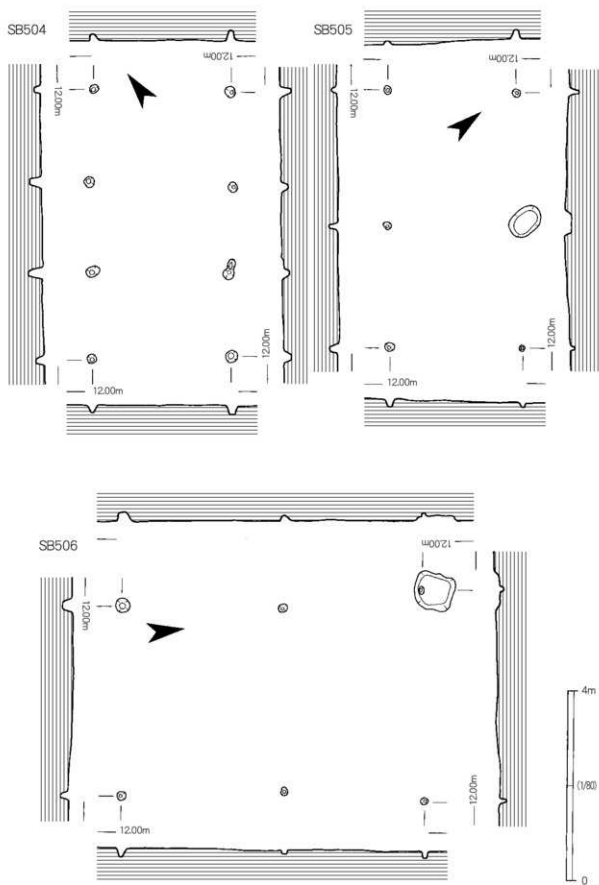
第12図 掘立柱建物跡実測図(4)



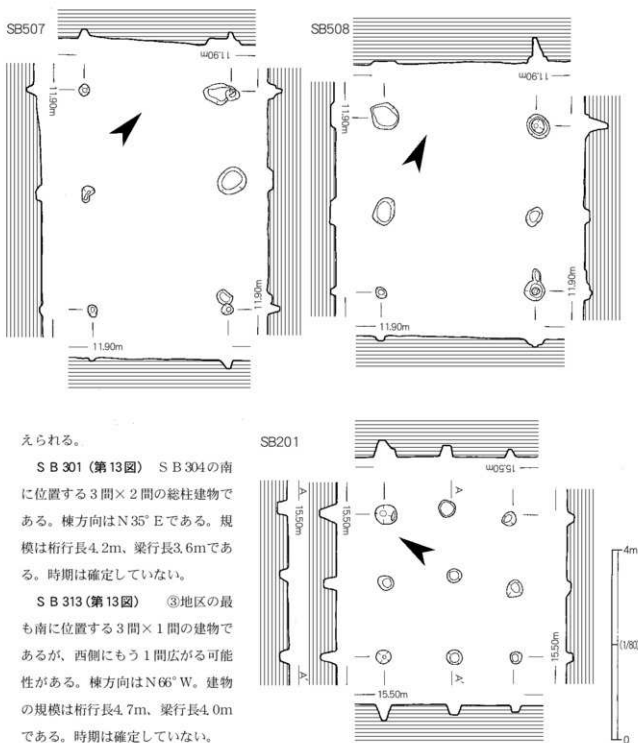
穴の規模は、長径52～78cm、残存する深さは16～36cmで、全ての柱穴に柱痕が認められた。時期は確定していないがS B 304と同時期と考えられる。

S B 307 (第12図、図版21) S B 306の南に位置する3間×2間の総柱建物である。棟方向はN 03° W。建物の規模は桁行長5.6m、梁行長4.8mである。柱穴の規模は、長径48～64cm、残存する深さは26～54cmで、全ての柱穴で柱痕が認められた。時期は確定していないがS B 304と同時期と考

第13図 掘立柱建物跡実測図(5)



第14図 掘立柱建物跡実測図(6)



第15図 掘立柱建物跡実測図(7)

えられる。

S B 301 (第13図) S B 304の南に位置する3間×2間の総柱建物である。棟方向はN 35° Eである。規模は桁行長4.2m、梁行長3.6mである。時期は確定していない。

S B 313 (第13図) ③地区の最も南に位置する3間×1間の建物であるが、西側にもう1間広がる可能性がある。棟方向はN 66° W。建物の規模は桁行長4.7m、梁行長4.0mである。時期は確定していない。

S B 504 (第14図) ⑤地区の南に位置する3間×1間の建物である。

棟方向はN 34° Eである。建物の規模は桁行長5.8m、梁行長3.0mである。時期は13～14世紀と考えられる。

S B 505 (第14図) 2間×1間の建物である。棟方向はN 52° Wである。建物の規模は桁行長5.5m、梁行長2.8mである。時期は13～14世紀と考えられる。

S B 506 (第14図) 2間×1間の建物である。棟方向はN 02° Eである。建物の規模は桁行長6.7m、梁行長4.0mで⑤地区では最大の規模を持つ。時期は13～14世紀と考えられる。

S B 507 (第15図) S B 508の南隣に位置する2間×1間の建物である。棟方向はN48°Wである。建物の規模は桁行長4.7m、梁行長2.9mである。時期は13～14世紀と考えられる。

S B 508 (第15図) ⑤地区の最も北に位置する2間×1間の建物である。棟方向はN21°Wである。建物の規模は桁行長3.8m、梁行長3.3mである。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

S B 201 (第15図) 2間×2間の総柱建物である。棟方向はN54°Eである。建物の規模は桁行長3.0m、梁行長2.8mで②地区唯一の建物跡である。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第1表 掘立柱建物跡一覧表

番号	規模 (間)	棟方向	柱間		出土遺物	時期
			桁行	梁行		
			建物の南西隅から(m)	建物の南西隅から(m)		
SB001	2×2	N54°E	3.0(1.5-1.5)	2.8(1.3-1.5)		
SB001	3×2	N35°E	4.2(1.2-1.7-1.3)	3.6(1.8-1.8)	弥生土器	
SB002	3×2	N03°W	4.9(1.6-1.7-1.6)	4.0(2.0-2.0)	弥生土器、土師器、須恵器	
SB003	5×2	N01°W	10.1(2.0-2.0-2.1-1.9-2.1)	4.2(2.2-2.0)	弥生土器、土師器、須恵器	8世紀
SB004	5×2	N89°W	13.1(2.4-2.9-2.5-2.7-2.6)	5.1(2.6-2.5)	弥生土器、土師器、須恵器、小型石斧	8世紀
SB005	3×2	N01°W	5.1(1.9-1.8-1.4)	3.5(1.6-1.9)		
SB006	3×2	N02°W	4.6(1.4-1.5-1.7)	3.7(1.9-1.8)	弥生土器	
SB007	3×2	N03°W	5.6(1.9-1.9-1.8)	4.8(2.5-2.3)	弥生土器、須恵器	古代
SB008	3×2	N89°E	6.3(1.8-2.4-2.1)	3.7(2.0-1.7)	弥生土器、焼土	
SB009	3×2	N02°W	6.4(2.2-2.2-2.2)	4.2(2.2-2.0)	弥生土器、焼土	
SB010	3×2	N02°W	4.9(1.7-1.5-1.7)	3.4(1.7-1.7)	須恵器、磨製石斧	
SB011	2×1	N72°W	7.3(3.8-3.5)	6.2		
SB012	3×3	N02°E	8.8(2.3-4.0-2.5)	7.3(2.2-3.0-2.1)	弥生土器	
SB013	2×1	N66°W	4.7(2.4-2.3)	4.0	弥生土器	
SB014	1×1	N17°E	4.5	4.2		
SB004	3×1	N34°E	5.8(1.9-1.9-2.0)	3.0	土師器(皿)	13～14世紀か
SB005	2×1	N52°W	5.5(2.9-2.6)	2.8	土師器	13～14世紀か
SB006	2×1	N02°E	6.7(3.4-3.3)	4.0	土師器	13～14世紀か
SB007	2×1	N48°W	4.7(2.3-2.4)	2.9	土師器	13～14世紀か
SB008	2×1	N21°W	3.8(1.7-2.1)	3.3		
SB009	2×1	N50°W	4.0(1.6-2.4)	3.4	土師器	13～14世紀か
SB010	1×1	N60°W	2.0	1.0	土師器	13～14世紀か
SB011	1×1	N06°E	2.0	1.8	土師器	13～14世紀か
SB012	2×1	N62°W	4.0(2.0-2.0)	2.0		
SB013	2×1	N56°W	4.2(2.1-2.1)	3.0		
SB014	1×1	N38°W	3.0	3.0		
SB015	1×1	N37°E	3.0	2.2	弥生土器	
SB016	1×1	N80°W	4.0	1.4	弥生土器	
SB017	1×1	N01°E	3.0	3.0	弥生土器	
SB018	2×1	N51°W	4.6(2.4-2.2)	3.0		
SB019	1×1	N80°E	3.6	2.6		
SB020	1×1	N64°W	3.0	2.4		
SB021	1×1	N64°W	2.8	2.0	弥生土器	
SB022	2×1	N57°E	3.0(1.4-1.6)	2.6		
SB023	1×1?	N33°E	3.0	2.8	弥生土器	

(3) 溝 (第16～24図、図版7・8)

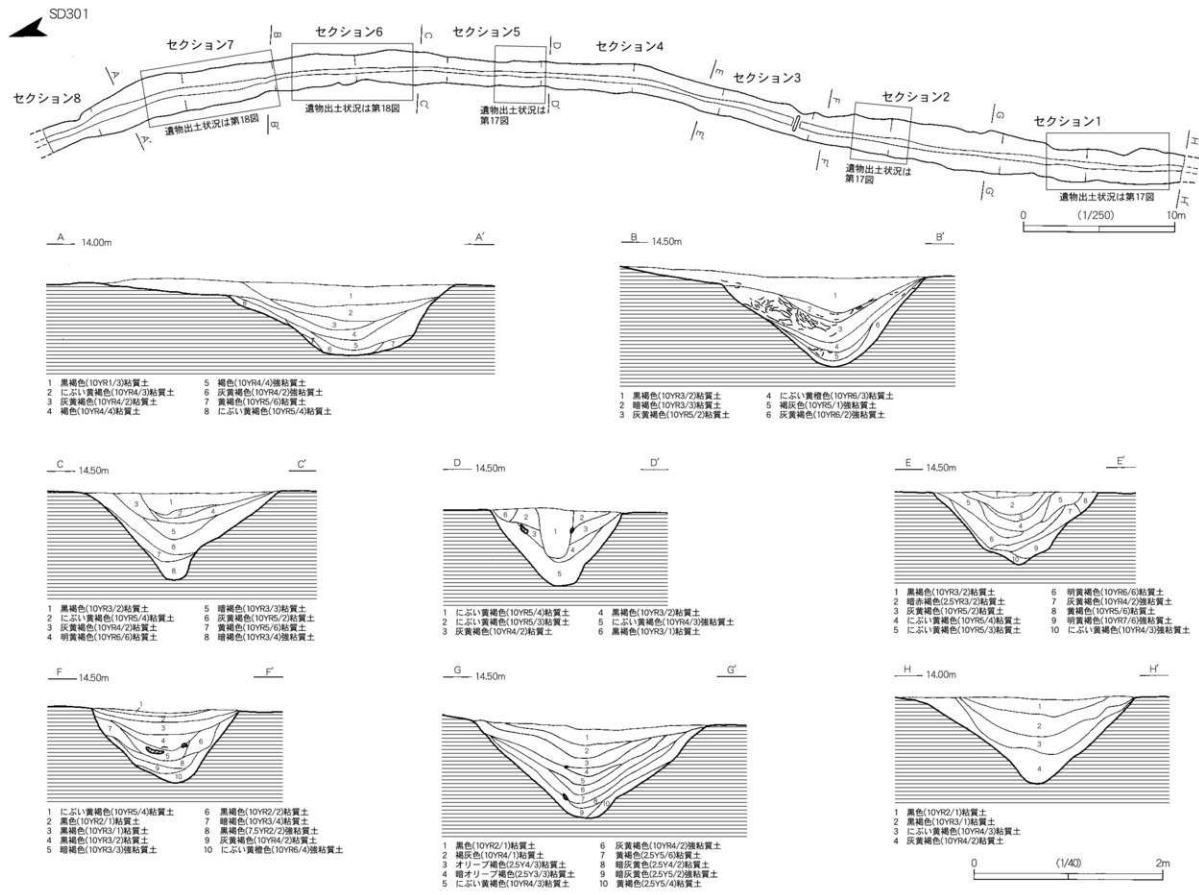
溝は①地区で2条、②地区で7条、③地区で16条、⑤地区で3条、合計28条が確認された。特に、SD301を始めとする大規模な溝が複数検出されており、吉永地区における集落のあり方を考える上で貴重な資料になると思われる。

SD301 (第16～18図、図版7) ③地区東部に位置する。台地を横断するように南北へ延びるが、中央部はやや東へ張り出して緩やかな弧を描いている。両端はいずれも調査区外に延びており全容は把握できないが、その規模や形状から環壕の一部と考えてよからう。検出長は約85m、幅は141～300cm、現存する深さは75～100cm。底面の標高は溝の中央付近が最も高く、両端に向けて次第に低くなっており、その差は95cmにおよぶ。断面形は、中央部から南側ではV字形を呈するが、北側では緩やかなU字形をなしている。8ヶ所で土層を観察したが明確な共通性はなく、溝全体で堆積が一律に進行したとは考えにくい。特に、セクション7・8の中層では火熱を受けた痕跡が認められ、土坑などの切り合いを確認したが、土色に明確な差異はなかった。堆積途中の窪んだ状態で火を焚いたものと考えられている。出土遺物は、上層では周辺からの流れ込みも含め細片が多かったが、中層から下層にかけては壺(25～43)、甕(56～91)、鉢(44～47)、コップ形土器(48)、蓋(49～55)、ミニチュア土器(92～104)、陶埴(270・271)、石鎌(371)、磨製石鎌(328～330)など、完形の土器を含む多量の遺物が出土した。各層の遺物の時期差はあまりなく、SD301は比較的短期間のうちに機能を持ったと考えられる。

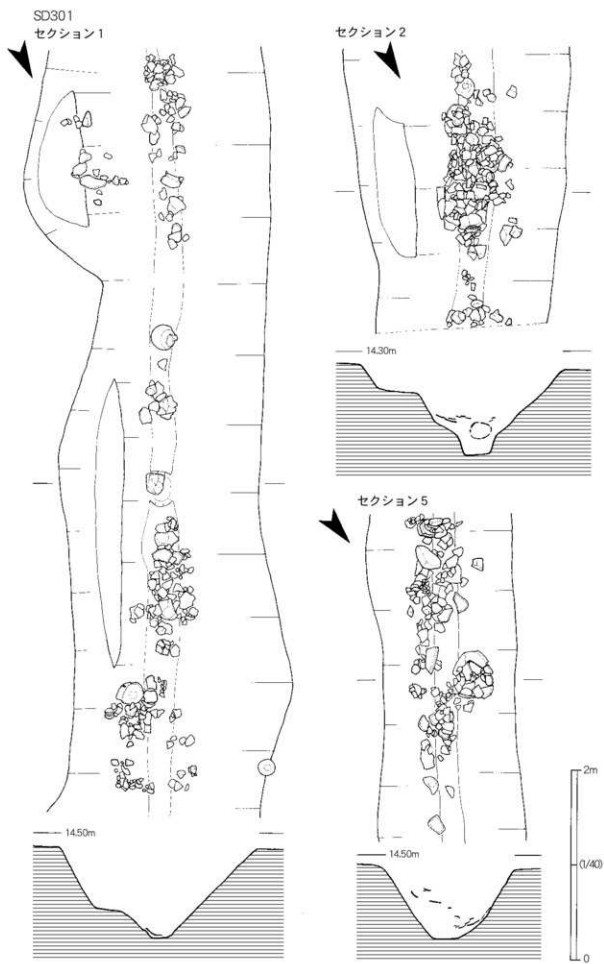
SD314 (第19～22図、図版8) ③地区北縁に位置する、東西方向に延びる溝である。両端は調査区外におよぶが、仮設道路を隔てたSD101と同一遺構であることは明らかである。さらにその東側でSD301と合流する可能性も高い。検出長は53m、幅は8～10mで、現存する深さは102～147cm。底面の標高差は105cmであり東から西に向かって下る。断面形はかなり緩やかなU字形で、人工的な堀込みか否かは疑問が残る。埋土は大きく分けて3層からなる。I層は黒褐色系の粘質土、II層は暗褐色系の粘質土、III層は灰黄褐色系の強粘質土であり、西端付近のみ最下層に砂礫層が認められた。また、溝西部のII層中層では、多量の焼土塊の投棄が確認された。SD301と同様、上層の遺物は細片が多く、II層では壺(106～112・123～136・139)、甕(153・154・158～160)、ミニチュア土器(113～122・155～157)、陶埴(272)、石鎌(370・372・373・375)など、完形品を含む多量の遺物がII層全体から満遍なく出土している。III層は遺物を含まない。各層の遺物に時期差があまりないこともSD301と共通しており、SD314も比較的短い期間しか利用されなかったと考えられる。なお、III層は無遺物層であるため、トレンチ部分を除き掘り込みはII層までに敷いて留めている。したがって第19～22図の溝下層は、II層直下までのものであることを断っておきたい。

SD101 (第19図) 最深部は調査区外にあるため、確認できたのは上層のみである。埋土の堆積状況も基本的にSD314と同じである。埋土中には多量の遺物が含まれ、石剣(400)、大型石鎌(377)なども出土したが、溝の辺縁部であるためにまとまった形の土器の出土は少ない。

SD201 (第23図、図版8) ②地区を南北に縦断するように位置する溝である。西側のSD301とほぼ平行であるが、北端部で西へ向けて屈曲しており、SD301と合流する可能性もある。検出長は56m、現存する深さは、55～123cm。底面の標高は14.46m±0.22mで、凸凹はあるがほぼ平坦とい

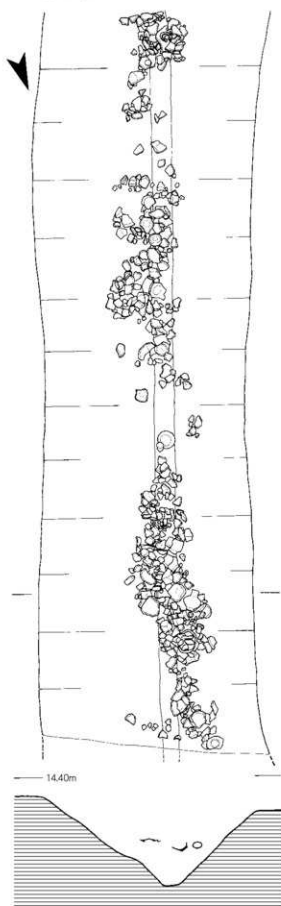


第16図 溝実測図(1)

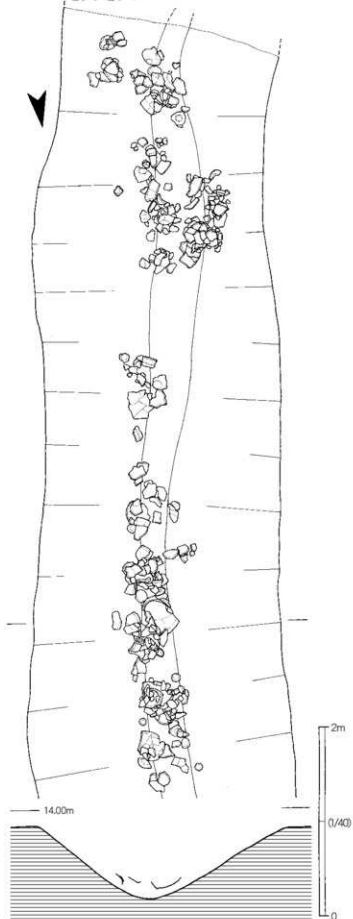


第17図 溝実測図(2)

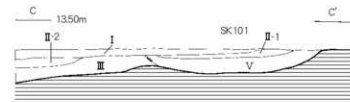
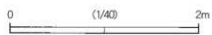
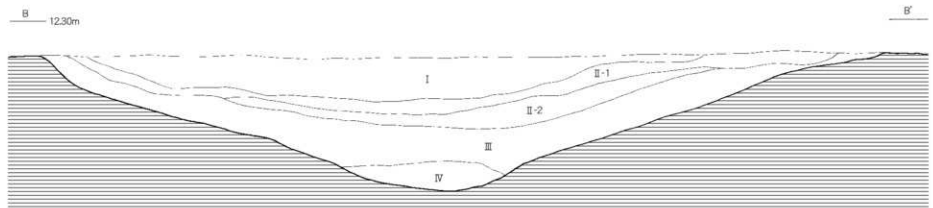
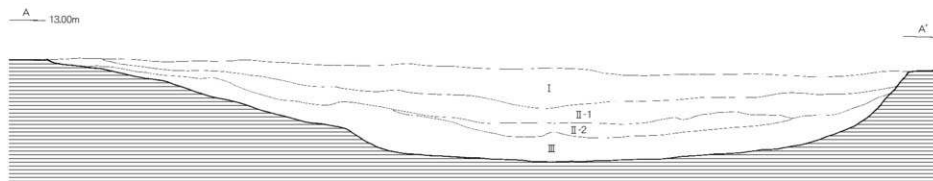
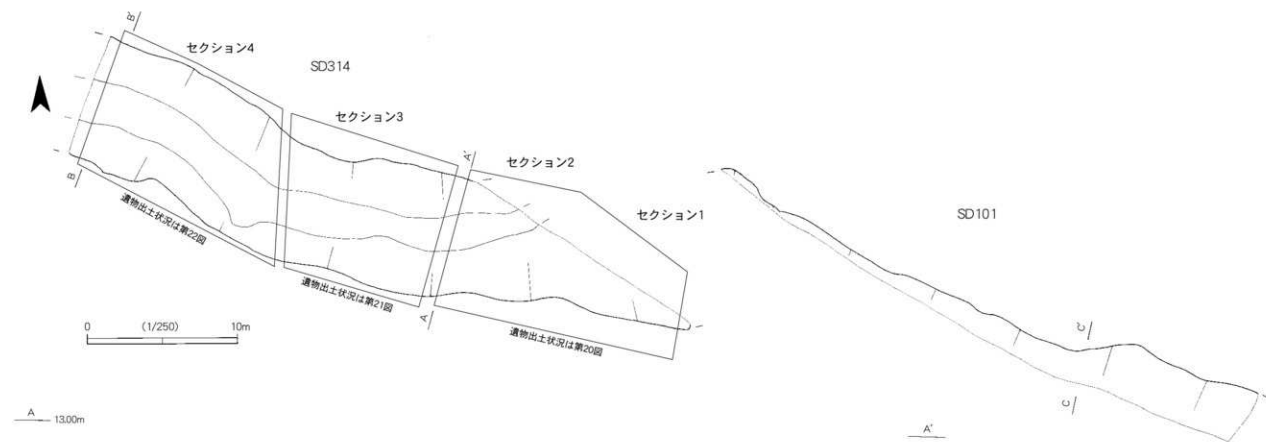
SD301
セクション6



セクション7



第18図 溝実測図(3)



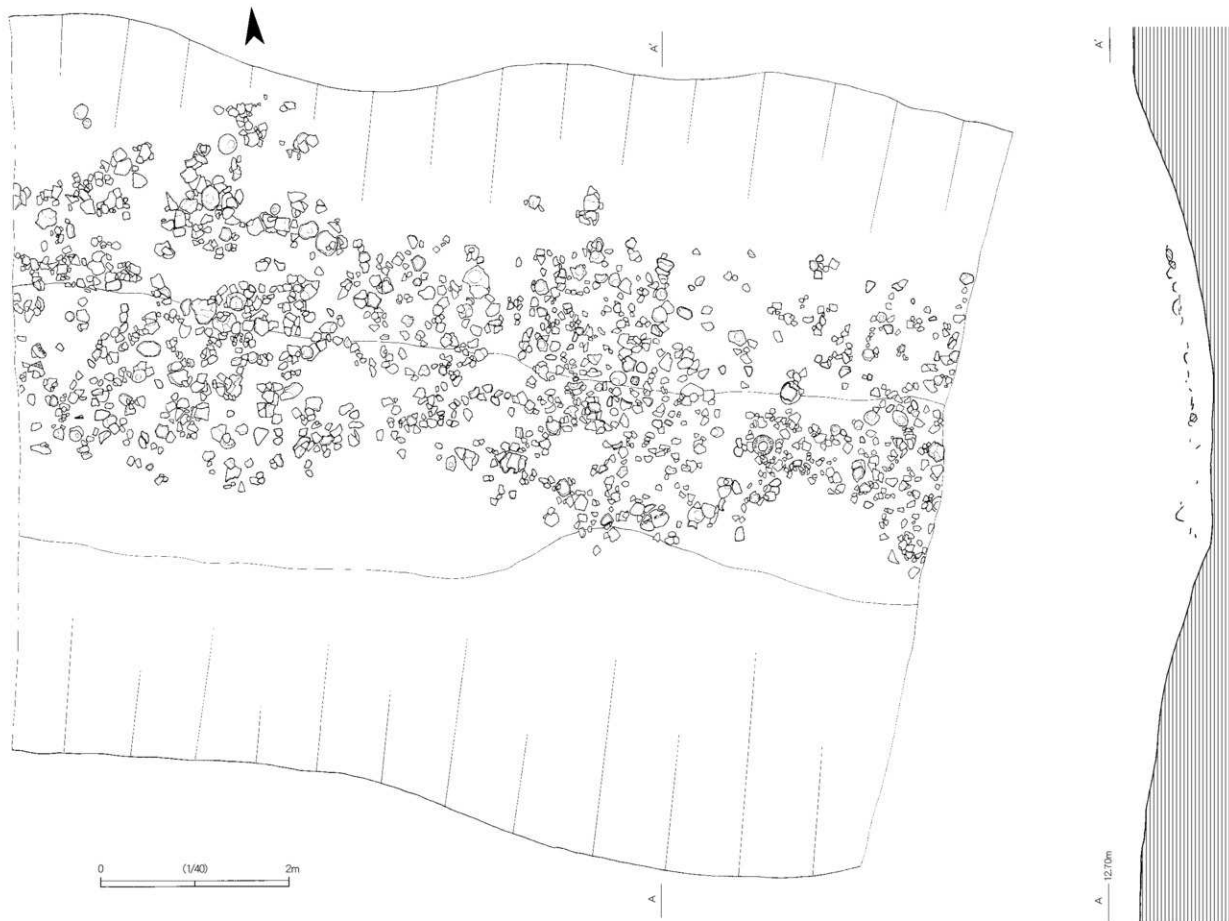
- 土層凡例
- I 黄褐色10YR2/1粘質土
 - II-1 暗褐色10YR3/2粘質土
 - II-2 褐色10YR4/4粘質土
 - III 上より黄褐色10YR5/4粘質砂質土
 - IV 暗灰色2.5Y4/2粘質土(石、礫を多量に含む)
 - V 黒褐色10YR2/2粘質土

第19図 溝実測図(4)



第20回 溝実測図(5)

SD314 セクション3



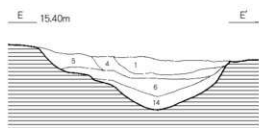
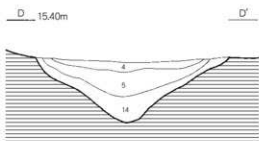
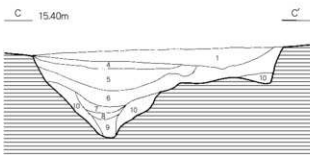
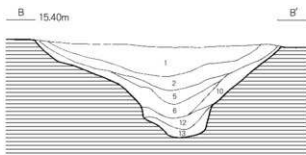
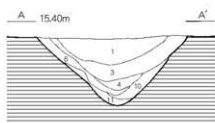
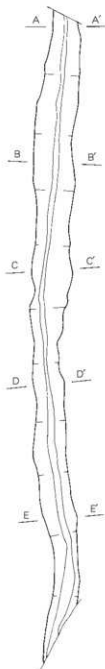
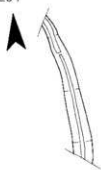
第21図 溝実測図(6)

SD314 セクション4



第22図 溝実測図(7)

SD201

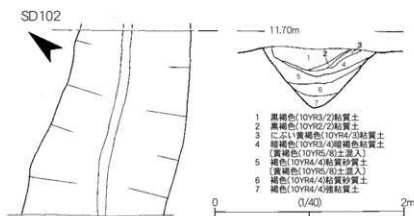


土層凡例

- | | |
|-------------------------------|---------------------|
| 1 栗色10VR2/1粘質土 | 9 におい黄褐色10VR5/3粘質土 |
| 2 黄褐色10VR2/2粘質土〔2~10cm位の礫含む〕 | 10 灰黄褐色10VR5/2粘質土 |
| 3 黄褐色10VR3/2粘質土〔10~30cm位の礫含む〕 | 11 におい黄褐色10VR5/4粘質土 |
| 4 におい黄褐色10VR4/3粘質土 | 12 暗灰黄色2.5VS/2凝結質土 |
| 5 黄褐色10VR5/6粘質土 | 13 (オリーブ)褐色粘質土(含む) |
| 6 灰黄色10VR4/2粘質土 | 14 灰黄色2.5VS/2凝結質土 |
| 7 黄褐色2.5VS/1凝結質土 | |
| 8 暗灰黄色2.5VS/2凝結質土 | |

第23図 溝実測図(8)

える。断面形は、基本的にV字形を呈するが、南半部では、壁面の傾斜が緩くなっている。埋土の堆積状況は各セクションで部分的に異なるものの、溝全体にわたって堆積が一樣に進行したと考える。出土遺物は非常に少なく、北半の中層に多量の石礫が含まれてい



第24図 溝実測図(9)

たのが特徴的である。SD 301とほぼ同時期の遺構と思われるが、その時期や用途についてはさらに検討する余地がある。

SD 102 (第24図) ①地区の西部で調査区を横断するように位置し、両端は調査区外に延びる。位置的に、吉永遺跡IV地区のSD 01と同一の遺構である可能性が高い。主軸方位はN 58° Eで、検出長2m、幅124～148cm、現状での深さ82cm。断面形はV字形を呈し、7層の粘質土が堆積していた。出土遺物は弥生土器の細片のみである。

SD 304・305 ③地区中央部のSB 304を挟んで平行に並ぶ溝である。両者の間隔は7.4m。主軸方向がSB 304の棟方向と同じことなどから、SB 304の雨落ち溝と考える。ともに西側は削平されて遺存しない。SD 304は現存長6m、幅60cm、深さは6～10cm。SD 305は現存長7m、幅35～62cm、深さ8～18cmである。底面の標高はともに13.7m±0.10mで、凹凸はあるが特定の傾斜は認められない。断面形は緩やかなU字形をしており、埋土は黒褐色粘質土の単一層である。SD 304の東部から、8世紀のものと思われる須恵器坏(24)が出土した。

SD 309 ③地区中央部北側に位置し、南北に直線状に延びる溝である。北側にはほぼ垂直の位置関係でSD 310が掘り込まれており、方形竪穴住居の屋内周溝である可能性を考えたが、主柱穴が存在しないためそれぞれ単独の遺構であると判断した。現存長4.2m、幅30cm、深さは10～16cmで底面の標高差はない。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。溝にはまり込む状態で弥生土器甕(25)が出土した。

(4) 土坑 (第25～29図、図版9～13)

今回検出した土坑は257基を数える。内訳は①地区4基、②地区40基、③地区208基、⑤地区15基である。他の遺構と同様、③地区高位面に集中している。また、東に隣接する②地区も土坑の密度が高いのも特徴的である。なお、これらの土坑の中には、その形態や遺物の出土状況に明確な特徴を有するものがあつた。その特徴をもとに分類し、それぞれの詳細について述べる。

完形の遺物が出土した土坑 (第25・26図、図版9・10)

ほぼ完形のものや完形に復元できるものも含め、良好な状態で遺物が出土した土坑である。その出土状況から単なる廃棄用途の土坑とは区別して考えた。いずれも弥生時代前期の遺構であるが、規模や形状に共通性はなく、その配置にも規則性は見出せない。

S K 3052 (第25図、図版9) ③地区東部に位置する土坑である。平面プランは円みを帯びた長方形で、長軸106cm(推定)、短軸78cm、深さ65cmを測る。遺物の出土状況からS K 3005を切っていると考えられるが、土層からは確認できなかった。壺(194~200)など、出土遺物は壺に限定されることから、意識的に廃棄あるいは埋納したと思われる。上層の黒褐色粘質細砂層に遺物が集中しており、下層の明黄褐色粘質細砂層には遺物をほとんど含んでいなかった。

S K 3057 (第25図、図版9) ③地区の東部、S K 3052の南約30mに位置する長円形土坑である。長径123cm、短径92cm、深さ57cmと、規模はS K 3052と同等であるが、遺物が下層部に集中している点でS K 3052と異なる。出土遺物は甕(231)を含むものの、232など壺が主体である。

S K 226 (第25図、図版9) ②地区中央部に位置する長円形土坑である。長径134cm、短径108cm、深さ77cm。上層の遺物は流入と思われる磨滅の進んだ土器片が大半で、量も少なかったが、最下層から壺(178)がほぼ完形で出土した。

S K 238 (第25図、図版10) ②地区中央部の東寄りに位置する、長径114cm、短径100cm、深さ97cmの円形土坑である。上層(黒色粘質土)から出土した壺(174)はかなり破砕されていたが、最下層(にぶい黄褐色粘質土)からはほぼ完形の状態で甕(175)が出土した。

S K 223 (第26図、図版9) ②地区北部に位置する長円形土坑である。長径184cm、短径154cm、深さ125cm。最下層から壺(176)と甕(177)が1個体ずつ、投棄された状態で出土した。中層からは石剣(403)も出土している。壁面が内傾して立ち上がった後、中程で外傾する断面形状は、今回検出した土坑ではこれのみである。

S K 3213 (第26図、図版10) ③地区東部に位置する円形土坑である。直径85cm、深さは35cm。出土遺物は甕(220)を含むが、218・219など壺が大半を占める。

S K 506 (第26図、図版10) ⑤地区南東部に位置する円形土坑である。長径90cm、短径78cm、深さ52cmを測るが、断面形状や埋土の状態から、深い土坑(または大型柱穴)との切り合いの可能性が高い。上層の黒褐色粘質土層から甕(241)が出土。

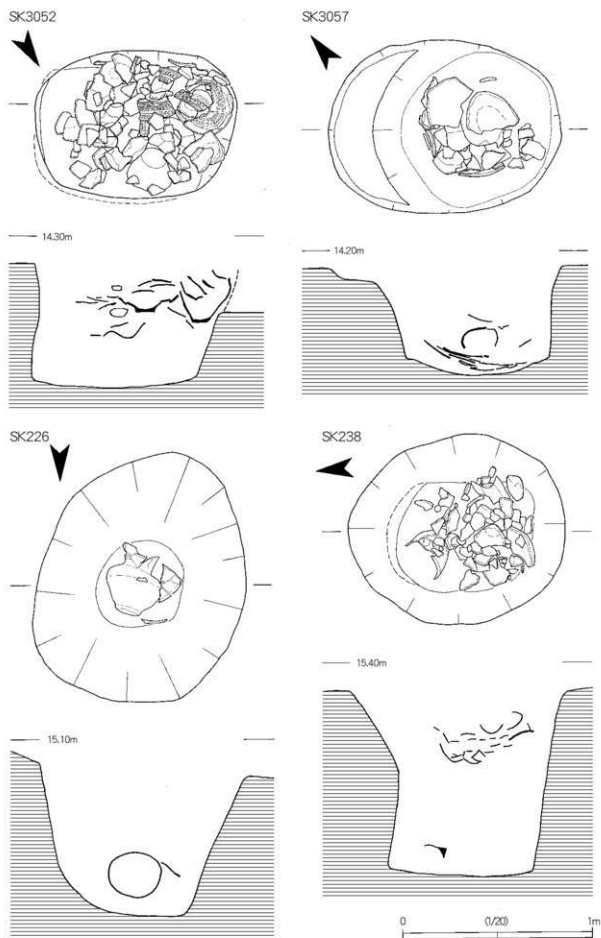
S K 3065 (図版10) ③地区東部位置する方形土坑である。長軸、短軸とも124cm、深さは57cm。規模や形状だけでなく、出土遺物が壺に限定されている点でもS K 3052に類似する。S K 3052は北東へ5m、S K 3057は北へ約2mと近距離にあり、この3者の関係を探るべく付近を精査したが関連する遺構は見つからなかった。出土遺物は壺(209~214)。

底面に柱穴を有する土坑(第27図、図版11)

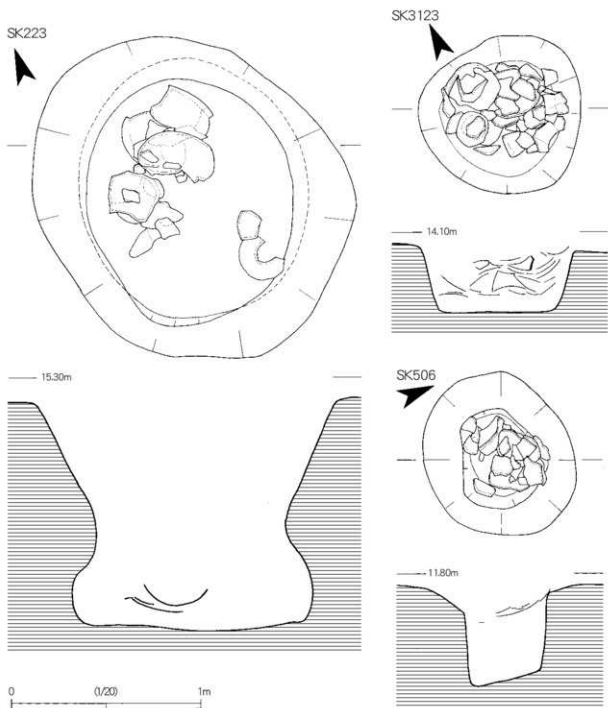
いわゆる貯蔵用堅穴と考えられる土坑である。いずれも弥生時代前期の遺構で、図示したもののほかにS K 3162、S K 511などがある。またS K 3166の底面には柱穴でなく、中央から北東方向へ溝が掘り込まれていた。平面プランは円形がほとんどで、壁面はほぼ垂直である。

S K 3012 (第27図、図版11) ③地区中央部に位置する、長径128cm、短径110cm、底面までの深さ102cm(柱穴部分の深さ13cm)の円形の土坑である。壺(207・208)などの土器が礫とともに投棄された状態で出土した。遺物は上層に集中しており、廃絶後に堆積が進行した状態で廃棄土坑として使用されたと思われる。

S K 3120 (第27図、図版11) ③地区南部に位置する。底面に柱穴を有する土坑の中では唯一の隅



第25图 土坑实测图(1)



第26図 土坑実測図(2)

丸長方形である。長軸135cm、短軸115cm、深さは31cm（柱穴部分11cm）であり、上面の削平を考慮してもやや浅めであるため貯蔵以外の用途も考えられる。土坑の北辺に沿って、ほぼ完形の壺(204)、甕(206)が、横倒しの状態で出土した。

廃棄用と思われる土坑（第28図、図版12）

土器片などの遺物が凝集した状態で出土した土坑である。同様の土坑としてSK3022、SK3066などがある。いずれも弥生時代前期の遺構である。

SK3058（第28図、図版12） ③地区の東部に位置する長円形の土坑である。長径220cm、短径129cm、深さ22cmを測る。壺(203)がほぼ完形であったほかは破砕された土器片が土坑内を満たしている。

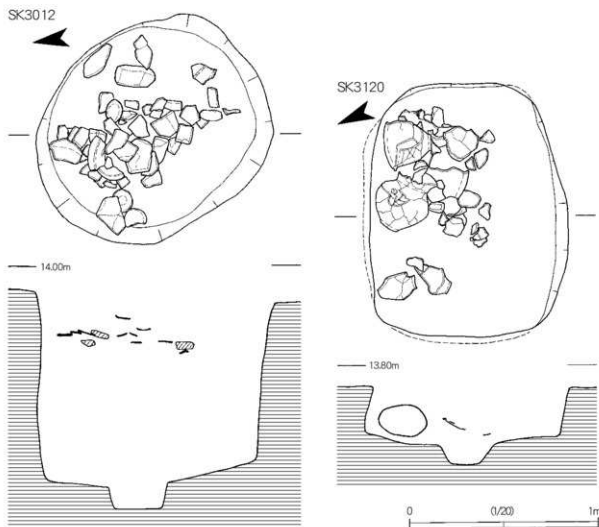
た。土坑北半部は遺物が疎らであり、切り合いの可能性はある。壺(201～202)が出土。

S K 3121 (第28図、図版12) ③地区南東部に位置する長方形の土坑である。長軸215cm、短軸115cm、深さ26cm。埋土のほとんどを焼土塊が占めており、土器焼成などの際に生じた焼土塊を廃棄したと考えられる。甕(233)が出土。同様の土坑には、S K 3047、S K 3062など多数あるが、総じて遺物の出土量は少なく、ほとんどが細片である。

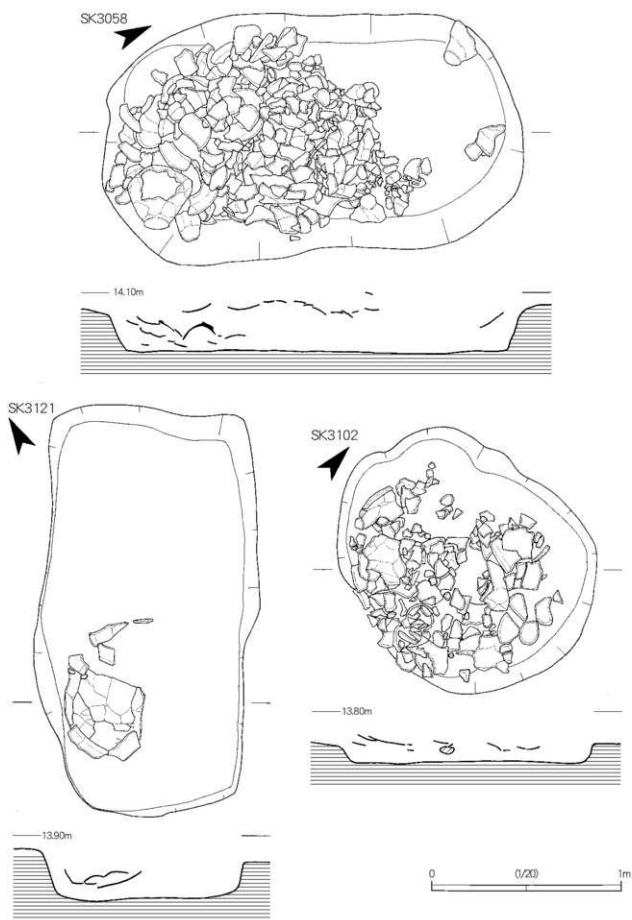
S K 3102 (第28図、図版12) ③地区南部に位置する不整形円形の土坑である。長軸149cm、短軸121cm、深さ10cm。表面検出の時点ですでに遺物が露頭するほど上面を削平されていた。壺(221～224)が出土。

その他の特徴のある土坑(第29図、図版13)

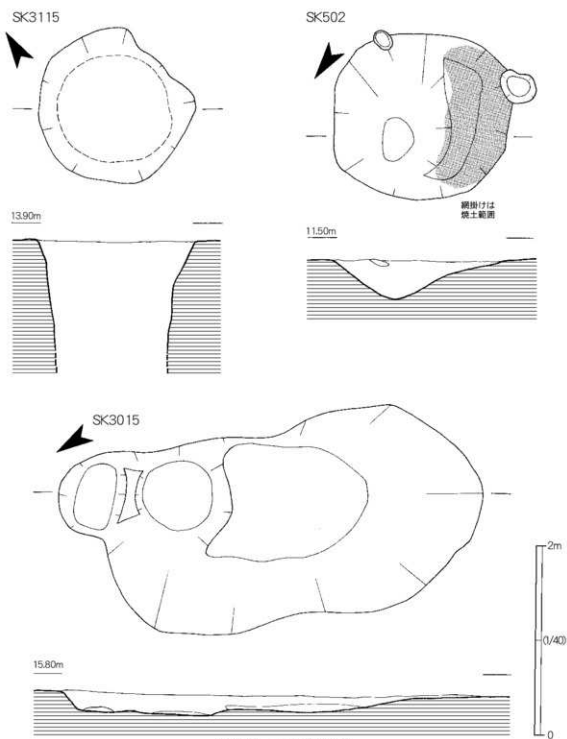
S K 3115 (第29図、図版13) ③地区南部に位置する、長径84cm、短径74cmの円形土坑である。上層は粘性の強い暗褐色系の砂質土が堆積していたが、暗灰黄色シルト層まで掘り込んだ時点で湧水がひどくなったために、掘り込みを中断した。形状や湧水の状況から井戸である可能性が高い。下層で木片が出土したが、井戸側のような板状の木片はなく、素堀であったと考えられる。なお、最上層の埋土は壺と思われる須恵器片を数点含んでいたが、中層以下の遺物はすべて弥生土器であるため、遺



第27図 土坑実測図(3)



第28図 土坑実測図(4)



構の時期は古代以前に遡ることも考えられる。

S K 502 (第29図) ⑤地区中央部に位置する円形の土坑である。長径98cm、短径90cm、深さ20cm。壁面に火熱を受けた痕跡が見られたが、焼土部分が途切れていること、壁面の傾斜が変化していることから別の土坑に切られた可能性が高い。土器焼成坑あるいは炉として使用された可能性が考えられるが、確証に乏しい。

S K 3015 (第29図) ③地区東部に位置する。長軸222cm、短軸96cm、深さ13cmの不整形で浅い皿状土坑である。複数の土坑の切り合いも考えられたが埋土の状況から単独の遺構と判断した。遺物も疎らで用途は限定できない。同様の土坑はS K 3016など複数検出されたほか、近隣の大門遺跡、高野

道跡、吉水道跡（IV地区）の報告にもあり、ある時期に盛行した土坑の形態とも考えられる。

S K 3089 ③地区東部に位置する長円形の土坑である。長径130cm、短径106cm、深さ25cm。土坑の東縁部から壺などの弥生土器とともに石器未製品（367～369・378）がまとまって出土した。その出土状況から埋納された可能性を指摘しておきたい。

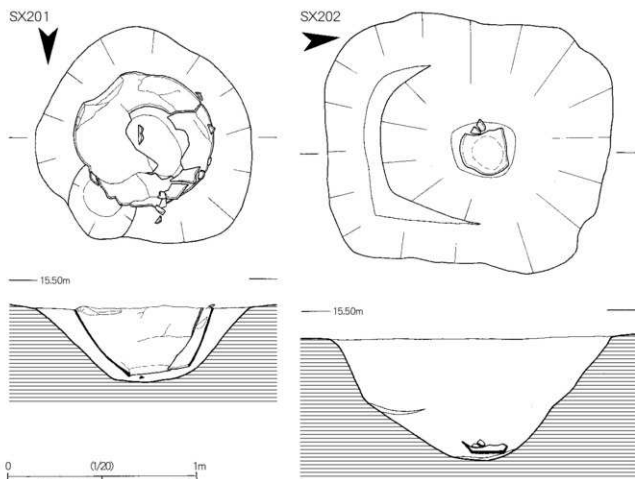
(5) 埋壘遺構（第30図、図版13）

埋壘遺構はいずれも②地区で検出された。近世の遺構と思われるが、建物跡など同時期の遺構は調査区内では確認されていない。

S X 201からは壘の底部を除く上半部、S X 202からは壘の底部が出土したが、これらは1個体として接合することができた。つまりS X 202で壘を一度設置した後、底部を残して上半部のみを新たにS X 201として設置し直したものと考えることができる。おそらく再利用されたものであろう。

S X 201（第30図、図版13） ②地区の中央部南寄りに位置する。掘方は長径122cm、短径108cm、深さ40cmを測る。後世の削平により、口縁部は破砕された状態で胴部内側に埋積していたが、遺存状況はよい。埋土は明黄褐色粘質土が混入するにぶい黄褐色粘質土（壘内部）、裏込めはにぶい黄褐色粘質土である。

S X 202（第30図、図版13） S X 201の南西約3mに位置する。不整長方形の掘方で、長軸150cm、短軸132cm、深さ64cm。特に南半部では壁面の傾斜が変化しており、掘り直しを窺わせる。埋土は灰



第30図 埋壘遺構実測図

黄褐色粘質土に黒色粘質土や明黄褐色粘質土が混ざったほぼ単一の層であり、意図的に埋め直しを行ったと考えられる。

(6) 柱穴 (第31図、図版13)

弥生土器の細片のみが出土する柱穴が多い中で、壺や甕が原形を留めて出土した例も数例あった。実測図を掲載したもののほかにSP5186などがある。なお、これらの柱穴を含む掘立柱建物は復元できなかった。また、⑤地区では中世の土師器片を含む柱穴も複数見ついている。

SP 3202 (第31図、図版13) ③地区北東部に位置する。直径53cm、深さ15cm。

上面は現水田の用水路として攪乱されていたが、その下から弥生土器壺(17)が出土した。本来は完形であったとも考えられ、意図的に埋納された可能性も高い。弥生時代前期に比定される。

SP 3355 (第31図) ③地区中央部東寄りに位置する。長径65cm、短径41cm、深さ10cmの不整な長円形である。弥生土器甕が横倒し且つ上面を削平された状態で出土した。ただし遺物が非常に脆弱であったために、復元および図化はしていない。

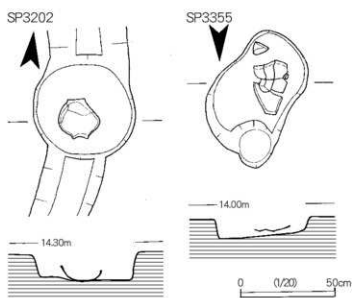
(7) 遺物包含層ほか

遺物包含層 ②地区南西部、③地区南東部、③地区中央部の高位面、③地区北部、③地区西部、⑤地区北東部、⑤地区北辺中央部および⑤地区北西端で遺物包含層が確認された。いずれも20cm未満の薄いものである。

③地区中央部高位面および③地区西部の遺物包含層以外は窪地などに堆積したもので、その下からの遺構は検出されていない。遺物も弥生土器の流入が多数を占める。

③地区中央部高位面の遺物包含層は、弥生時代および古代の遺構を覆うもので、須恵器や土師器が比較的多く出土した。中にはヘラ描き文字を伴う須恵器片(244:器形不明)や都城系土師器高坏(243)などもあり、高階層の存在を示唆する。また、③地区西部の遺物包含層下にも多数の土坑が埋存していた。この遺物包含層は広範囲に広がっていたが、東側ほど薄く、③地区中央部低位面では確認できないことから、水田化の際の削平が相当大規模であったことを窺わせる。

④地区 周辺の調査区より約2m低位にある。幅2mほどの小川に隣接しており、常に湿田の状態であった状況から鑑みて遺構の存在する可能性は低かったが、確認のためにトレンチ調査を行った。若干の遺物が出土したものの、基本的には灰黄色系の砂質土層、礫層など氾濫原の証となる層層が確認されたのみで、遺構は皆無であった。



第31図 柱穴実測図

2 遺物

発掘調査で出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土製品（土製円盤、土埴、土鍾、陶埴など）、石器、土師質土器（埴甕）などである。時期的には弥生時代前期、古墳時代初頭、古代、中世、近世の各時代のものが確認されている。このうち遺物の大半を占めるのが弥生時代前期に属するもので、膨大な量が出土した。そこで今回の報告では、代表的な遺構出土のもの、または特徴的な遺物について抽出し、以下にその概要を述べることにする。

(1) 竪穴住居跡出土遺物（第32図、図版14・15）

S B 502（1～3） 1は土師器の丸底壺である。丸底で、胴部の中央よりやや上位に最大径があり、口縁部はわずかに内傾し端部をつまみあげるように成形する二重口縁である。外面ハケ目調整、内面指押さえとケズリ調整を施す。2は椀形高坏である。坏部は椀形で、脚部に対して小型である。脚部は内湾して広がり、穿孔が4か所にある。坏部は内外とも丁寧なミガキ調整、脚部はハケ目調整を施す。3は高坏で裾部を欠損する。坏部は屈曲により外面に段を有し、大きく外反して口縁部に至り、端部はまるくおさめる。脚筒部は中空であろう。内外に丁寧なミガキ調整を施した精製品である。

S B 503（4～16） 4～7は二重口縁の甕である。口縁端部に至る立ち上がりがあり、直立するもの（4）、外反気味に立ち上がり、端部が肥厚するもの（6）、外反するもの（5・7）がある。8は丸底壺で、球形の胴部に直立する口縁部を持ち、端部は尖り気味である。9は椀形高坏の坏部で、脚部との接合面で剥離している。内外面ともミガキ調整。10は低脚の高坏である。坏部は内湾して口縁端部は尖り気味におわる。脚部はハの字に短く広がり、低い。丁寧なミガキ調整を施す。13は壺である。丸底に近い平底で、胴部はやや上位に最大径がある球形である。頸部から直立気味に立ち上がり、さらに外方に開口する。外面はハケ目調整。内面は横方向のケズリ調整。14～16は高坏。15の坏部は屈曲により段を有し、大きく開く口縁部から端部は尖り気味におわる。脚筒部は中央が膨らみ、中空で、外方に折れて裾部が広がる。坏部は内外とも丁寧なミガキ調整。14・16とも同様な形態の高坏で、16の裾部は15に比較して屈曲がゆるやかであり、4か所に穿孔がある。このほか図化しなかったが、在地系の格子目突帯を胴部に有する壺、タタキ目痕のある甕、布留系の甕なども出土している。

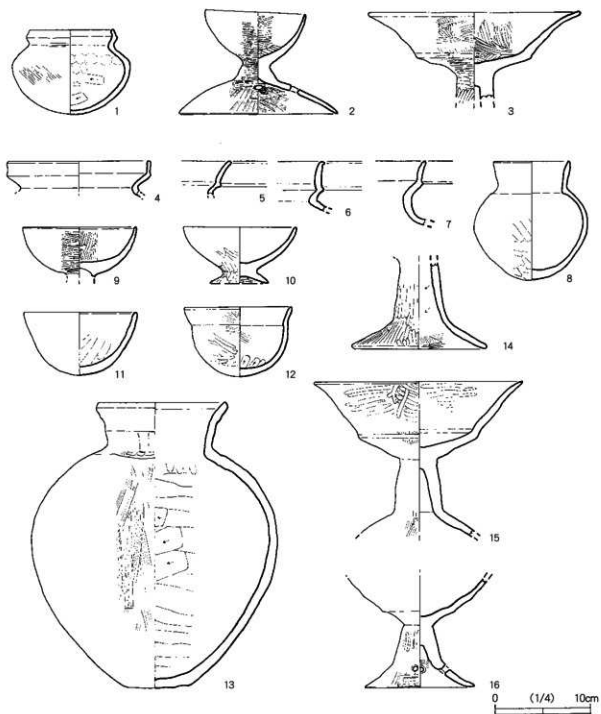
(2) 柱穴出土遺物（第33図、図版15）

17・18は弥生土器の壺。いずれも口縁部を欠損する。17は肩部に段を有し、胴部最大径は中央より上位にくる。18は摩滅して不明瞭ではあるが、肩部に沈線をもつ。胴部は偏球形で最大径が中位にあたる。19は須恵器杯身の底部。高台がハの字にひらく。20は土師器の椀底部。灰褐色系の胎土で、高台は低く、断面が丸みのある三角形である。内面および底面はミガキ調整が施される。21は土師器皿。色調は赤褐色で、底部糸切り。

(3) 溝出土遺物（第34～46図、図版16～30）

S D 101、S D 304、S D 309出土土器（第34図、図版16）

22・23はS D 101から出土した弥生土器の壺である。22は器高9.6cmの小型の壺ながら、肩部にはわずかな段を表現し、胴部の最大径は中位にある。文様は摩滅のため不明。23の壺は、口縁径が胴部径の約半分で、口縁下にハケ目を押圧して段を設けている。肩部の文様帯は羽状文を施す。胴部は球形



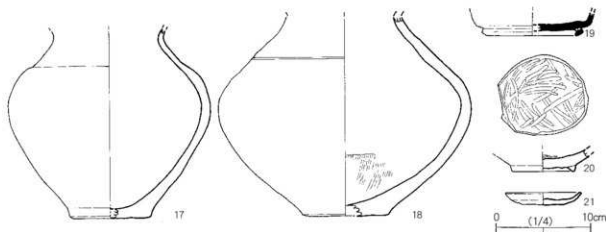
1~3-SB502 4~16-SB503

第32図 竪穴住居跡出土土器実測図

で、最大径は中位に位置する。24はSD 304出土の須恵器杯身。ハの字に開いた高台で、体部は外傾し、口縁端部は尖り気味におわる。25はSD 309出土の弥生土器の甕。平底から体部は外傾して立ち上がり、口縁はくの字に曲がる。口縁下には沈線を施し、外面ハケ目調整。

SD 301出土土器（第35～40図、図版16～24）

26～38は壺である。26は小型ではあるが頸部、肩部の段が明瞭に残り、文様帯は貝殻による羽状文を施す。27～29・32は胴部最大径が胴部の中位またはそれより下位にあり、重心の低いプローションとなる。27・28は不明瞭な段を有し、27は文様帯に貝殻で施文する。28は羽状文。29は摩滅するが

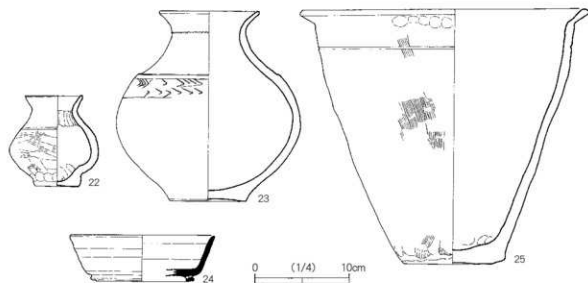


17-SP3202 18-SP5186 19-SP3238 20-SP5075 21-SP5066

第33図 柱穴出土土器実測図

27と同様の文様パターンか。32はハケ目押圧による沈線のみ施文である。33は大きく開く壺の口頸部で、頸部、肩部の段はハケ目を押圧してつくりだしている。文様帯には貝殻による羽状文を施す。34は最大径が上位にある偏球形の胴部で、口径は胴径の約1/2と小さく、頸部から口縁部は大きく屈曲する。文様帯には貝殻による沈線と羽状文を施す。35は最大径が上位にあって大きく張り出した胴部を有する。文様帯は貝殻による沈線と羽状文を施す。30・31は口径と胴部最大径がほぼ同じで、他に比して長胴の印象を持つ壺である。30は頸部に3条の沈線を持つ薄い突帯があり、肩部の段には沈線を引いている。31の段は不明瞭である。文様帯は両者とも沈線、羽状文を施す。36は外反する口縁部で、内面に貼り付け突帯を、外面に低い突帯を設ける。37は肥厚帯のある、朝顔形に広がる口縁部で、内面に断面三角の貼り付け突帯を持つ。外面には段を有する。38は厚手の底部に、最大径が上位にある胴部で、くびれた頸部から朝顔形に開く口縁部を有する。頸部にはハケ目を押圧して段をつくり、肩部の段には沈線が巡る。口縁端部には刻み目を持ち、文様帯には沈線と羽状文を施す。

39は小型の壺である。文様帯には沈線と斜格子文を施す。40は球形の胴部に直立気味の口縁部を有



第34図 溝出土土器実測図(1)

22-23-SD101 24-SD304 25-SD309

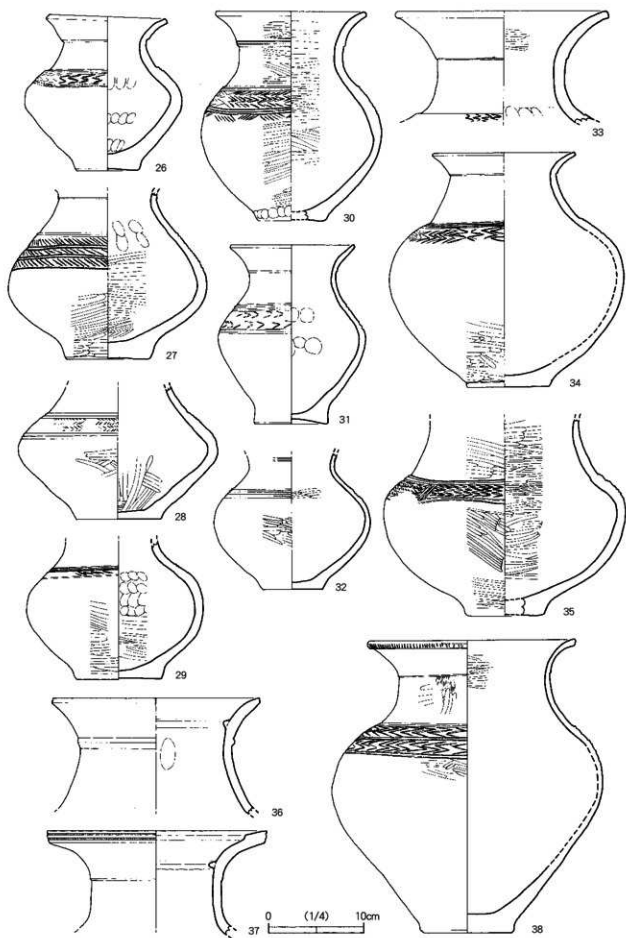
する壺である。41の壺は球形の胴部にくの字に曲がる口縁部で、端部には刻み目を施す。42は小型の無頸壺で、蓋をとめる紐通しの孔が4つある。43は体部が張る小型の鉢で、口径より胴部径がやや広い。44の鉢は上げ底の底部で、口縁端部は平坦におさめる。外面には壺にみられるような規則性のある文様ではなく、重弧文と羽状文を連ねて描いている。45の鉢は器高に対して胴の張るもので、甕の形態に近い。46は大きく開口する鉢であるのに対して、47は体部が外傾し、口縁部は短い。48は筒状の鉢で、把手のないジョッキに似ている。段によって体部に文様帯を設け、沈線と羽状文を巡らす。底部は上げ底である。49～51は笠形の蓋である。平坦な天井部から大きく裾部がひろがる。天井部付近は指押さえ痕が残る。52は円盤形の蓋である。紐通しの孔が両端にそれぞれ2つある。53、54は小型の蓋で、53は円盤の中央につまみがある。紐通しの孔が両側にあわせて4か所ある。55は笠状で小さなつまみがつく。54は蓋を模したミニチュア土器であろう。

56～69、72～79のうち、プロポーションからみて、体部が口縁下で口径近くまで張るもの(56・58・61・62・65・75)、体部が直線的に外傾して立ちあがるもの(59・64)があり、他はその中間形態で体部がわずかに外反して立ち上がるもの3つに分けることができる。さらに口径に対して器高が低く、寸詰まりな印象を受けるもの(62・63・74・77など)から、逆に器高が高く長胴であるもの(56・60・69・72・73)もあり、形態的にバラエティーがある。これらのうち56～65・67・69は口縁下にハケ目を強く押しつけて段をつくりだしている甕である。対して66・68・72・74・76～78は1条の沈線を有する甕である。他は段か沈線か判断がつきにくい。口縁端部に刻み目があるのは、56・58・60・61・63・64・66・68・69・72である。

70・71は甕の口縁部片で、70は段下に穿孔を有する。71は体部が張る甕で、口縁部は横方向に短く曲がる。口縁端部に刻み目があり、口縁下にハケ目を押しつけて沈線のように段を2列つづけている。80は口縁部が通例の甕のように外方に曲がらず、わずかに横へつまみだして端部は平坦にしている。81は口縁部を厚く肥厚させ、体部上半に鈎状の突帯を貼り付けている。なお体部には一部沈線が確認されており、この突帯と沈線がかなりの部分で重複している。これからすると突帯を貼り付ける目印として沈線を引いていた可能性がある。82～84は外傾した体部に短く外反する口縁を有する。80・82～84は、形態的に甕に近いが、段または沈線を有していないことから、鉢の可能性もある。85～88は口縁に粘土紐を貼り付ける擬銅鮮系無文土器である。87は断面四角、89は断面丸形の粘土紐がよくわかる。89～91は甕口縁部片である。89は口縁端部に刻み目があり、沈線を2条施す。90は口縁下に小粘土塊を貼り付けてつまみ状にしている。91の口縁部は水平に短くつまみだすようにつくりだし、2条の沈線間に刺突文を有する。92～105は甕、鉢の小型またはこれらの形を模したミニチュア土器である。94は沈線が3～4条描かれるが、他についてはそのような表現はない。97は2方向につまみを有しており、後述する150に形態が類似する。また98は一見羽釜を連想させる形態であるが、鈎状突帯を持つ81を模したものと考えられる。

SD 314出土土器(第41～46図、図版25～30)

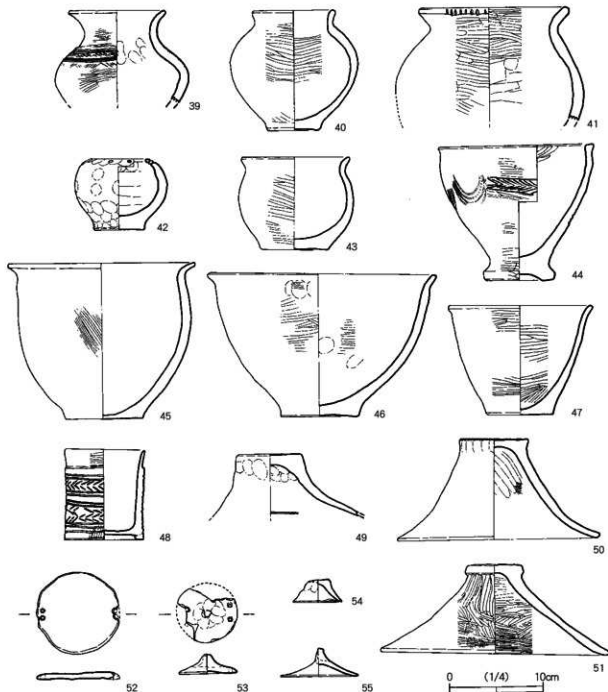
106～112は壺。106～108は胴部最大径が中央よりやや上位に位置する。107は頸部、肩部の段を有する。口径が小さく、文様帯には沈線と垂幕文を施す。108は寸詰まりな印象をあたえる形態で、段は不明瞭である。文様帯は貝殻による沈線と羽状文を施す。109・110は球形の胴部が特徴である。



26~38-SD301

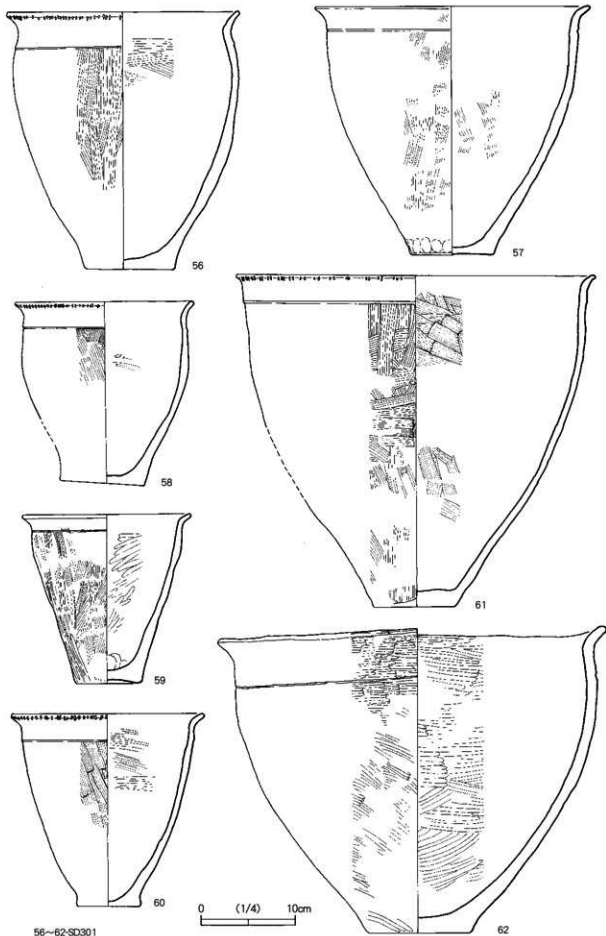
第35图 满出土土器实测图(2)

111は口縁部が大きく外反し、頸部にはハケ目を押圧した沈線状を呈する。文様帯は沈線と羽状文を施す。110は段を設けている。111・112は偏球形の胴部で最大径は中位にあたり、段を有する山形重弧文壺である。111は口縁端部に刻み目を持ち、頸部（2条）と肩部（4～5条）に沈線がある。頸部には鋸歯文または山形重弧文とみられる文様の一部が認められる。112は肩部に3条、底部に1条の沈線がある。両者とも丁寧なミガキ調整を行う。113～122はミニチュア土器または小型の壺である。113～119は張り出した胴部や頸部、肩部の段、文様帯を表現している。120～122はより丁寧なつくりで本来の形態に類似するので、小型の壺とみられる。頸部、肩部に段があり、119は摩滅するが羽

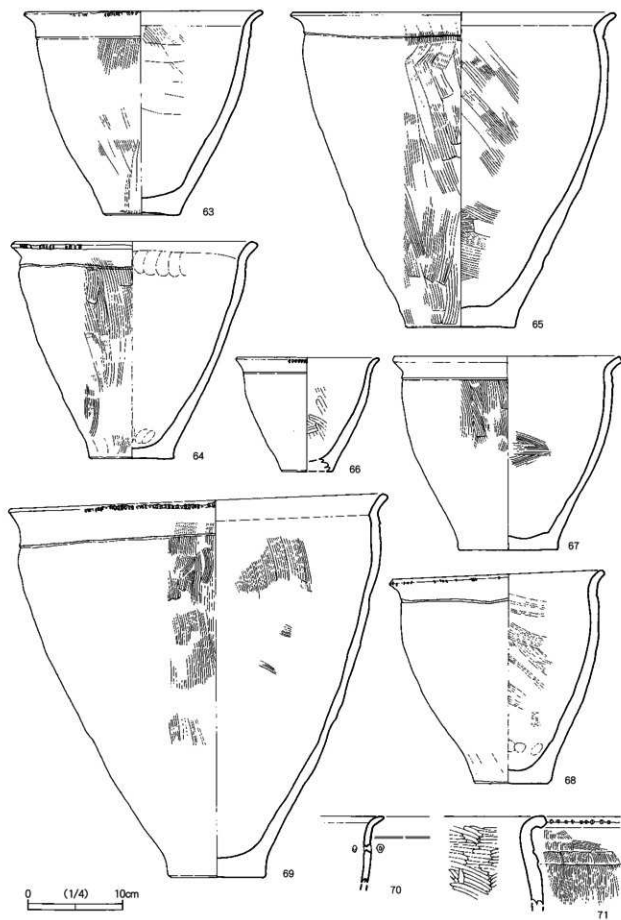


39～55-SD301

第36図 溝出土土器実測図(3)

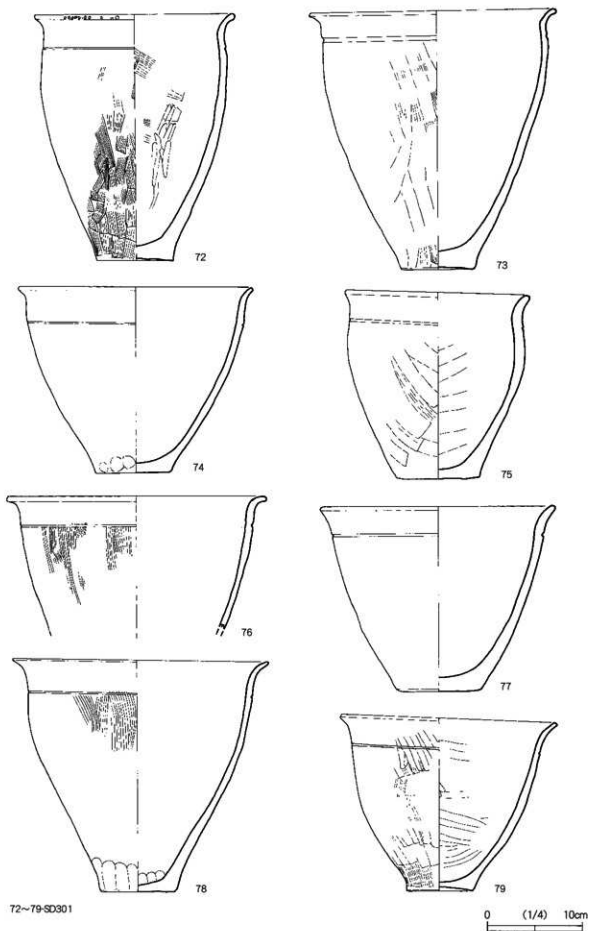


第37图 满出土器实测图(4)

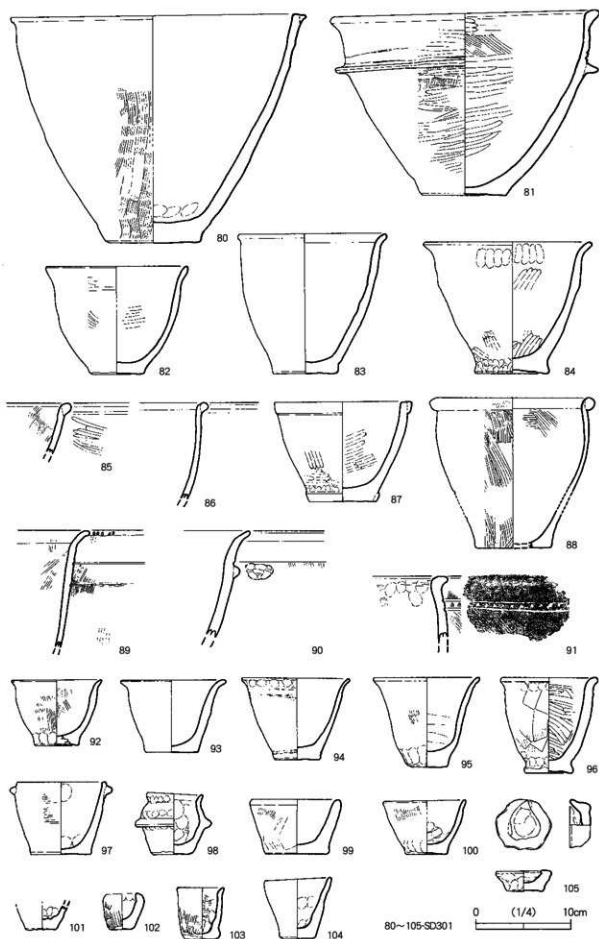


63~71-SD301

第38图 满出土土器实测图(5)



第39图 清出土器实测图(6)



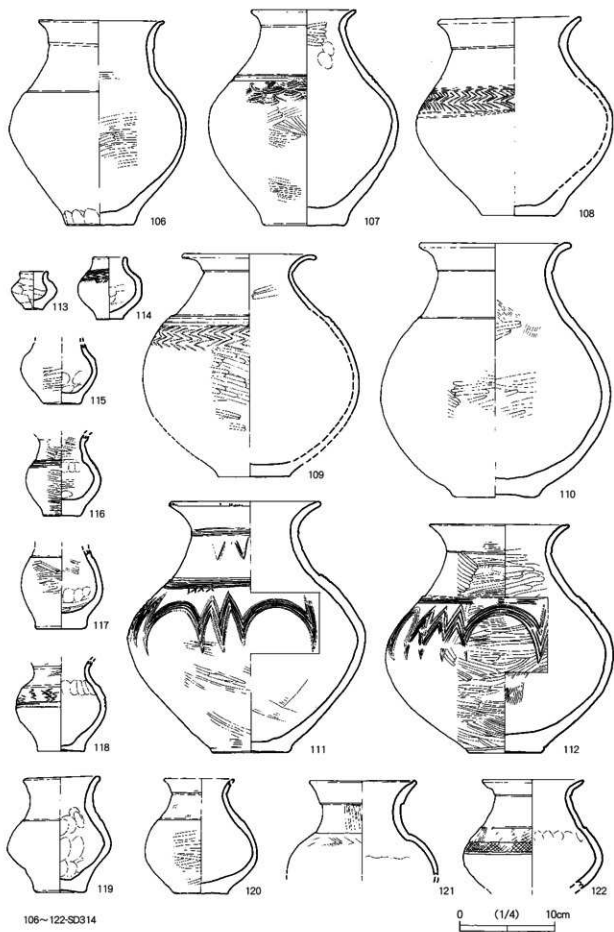
第40图 满出土土器物实测图(7)

状文を、121は羽状文、122は斜格子文を施す。123・124・129・130は小型の壺である。123・124は球形の胴部で、125・126・130は偏球形である。123は沈線と重弧文を施す。段は不明瞭。124は段を有し、文様帯には沈線と羽状文などがある。125は段を有し、文様帯は貝殻による施文。縦方向の沈線で区画され、縦横方向の羽状文が施される。126は胴部最大径が上位にあり、段を有する。頸部に2条の沈線、貝殻施文の文様帯には沈線と羽状文を施す。129は算盤玉に似た胴部で、頸部の内外面にそれぞれ1条の沈線があり、肩部の段は沈線で表現される。貝殻施文の文様帯には沈線、羽状文、重弧文が配される。130は段を有し、文様帯には沈線、羽状文を施す。127・128は壺を模したミニチュア土器とみられる。127は貝殻による羽状文、重弧文を配し、128は沈線と羽状文を施す。131は頸部にハケ目を押圧した段がある壺口縁部。内面には沈線が1条ある。132は131より頸部がくびれる壺口縁部で、内面に肥厚帯と突帯を貼り付ける。端部には刻み目を有する。頸部の段状の突帯にはハケ目押圧の沈線が2条ある。133は大型の無文壺。胴部最大径は上位にあり、頸部、肩部に段がある。134、135は壺文様帯片である。134は沈線と羽状文を配し、その下に山形重弧文を描く。両者とも貝殻施文。135の文様帯は羽状文と木の葉文で構成される。136はく字に曲がる厚手の壺口縁部である。137は笠形の蓋で、裾部を欠損する。天井部は平坦。138は円盤形の蓋で、紐通しの孔が両端に計4個ある。139は大型の無文壺。胴部は大きく張り出し、最大径は上位にある。頸部と肩部に段を有する。

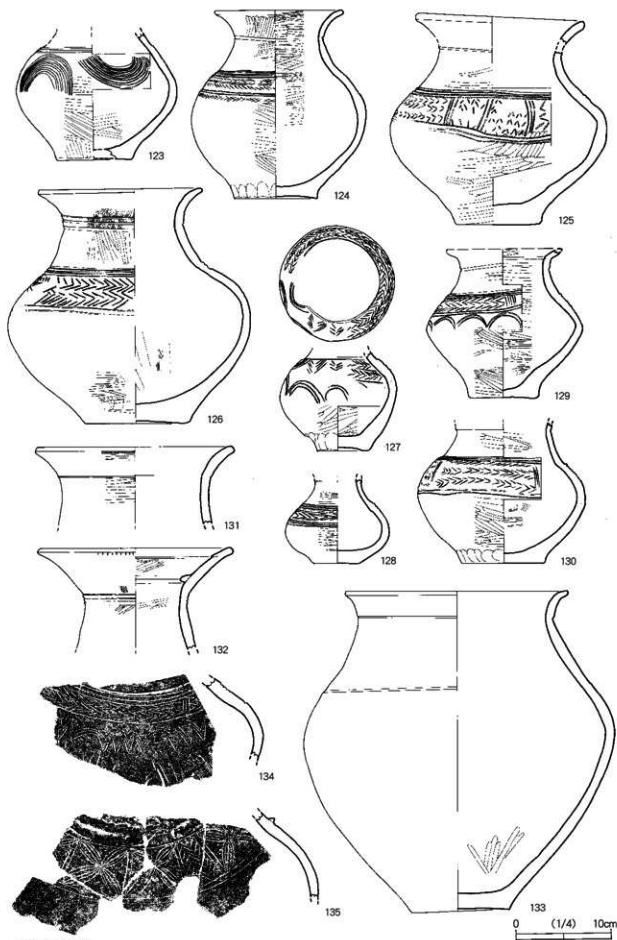
140～145は内湾気味に立ちあがり、短く外方に曲がる口縁部を有する。形態的に小型の甕または鉢とみられる。146は外傾して開口する鉢、148は147の小型化したもので、148、149は甕を模した土器である。150は直立気味に立ちあがる小型の鉢で、口縁部に小突起が3か所あり、2か所は剥落している。151、152は底部から直線的に開口する鉢で、152は底部に3条の沈線を持つ。153は体部上位で張る如意形口縁の甕で、端部に刻み目がある。口縁下には1条の沈線を持つ。対して154は体部が外傾して立ちあがり、口縁下にはハケ目押圧による段を有する。155～157は手捏ねのミニチュア土器である。155は鉢、156は無頸壺、157は壺を模しているとみられる。158～160は甕の口縁部片で、口縁下に粘土塊を貼り付けてつまみとしている。158は端部に刻み目がある。161～163は穿孔を有する底部である。164は底部と体部の境に段差がある。

165～173は粘土紐を貼り付けて口縁部を作り出す甕で、擬朝鮮系無文土器とみられるものである。貼り付けた後の成形で、断面が丸いもの(165・168)、三角のもの(166・167)、押しつぶしたように扁平になるもの(170・171)などがある。また形態から同時期の甕のうち、口縁部が短く曲がるものと区別しにくいもの(172・173)もある。

これらSD314出土の土器群のうち、壺、甕の胴部に編みかご状の痕跡が残るものが確認されたので、ここでまとめて述べる。痕跡が残るのは125・133・139・154である。各土器の形態的特徴は前述しているので、ここでは痕跡の範囲を図に合成し改めて第46図(125・133・139を掲載、154は図版を参照)にまとめた。確認された痕跡は、器壁に幅1cmほど摩滅した部分が帯状につながり、格子模様を呈する。また125ではそれが底部までに巡っていた。おそらく土器全体を編みかごで包んでいたか、または紐で格子に縛っていたものとみられ、器壁に接していた部分が摩滅し痕跡として残ったと考えられる。このような使用法は、壺の各種(有文、無文、大型無文)や甕にみられることから、土器の器種、大きさには無関係に用いられたとみられる。

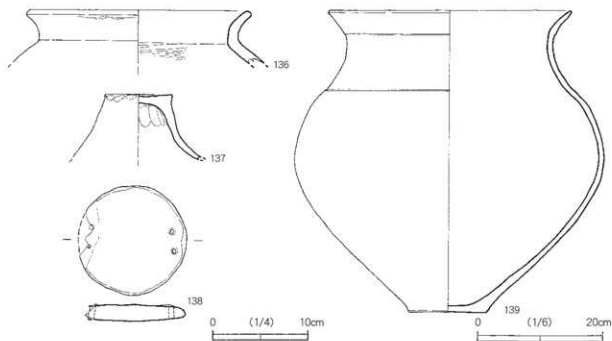


第41图 满出土土器实测图(8)



123~135-SD314

第42図 満出土土器実測図(9)



136～139-SD314

第43図 溝出土土器実測図00

(4) 土坑出土遺物 (第47～57図、図版31～39)

②地区土坑出土土器 (第47～49図、図版31～33)

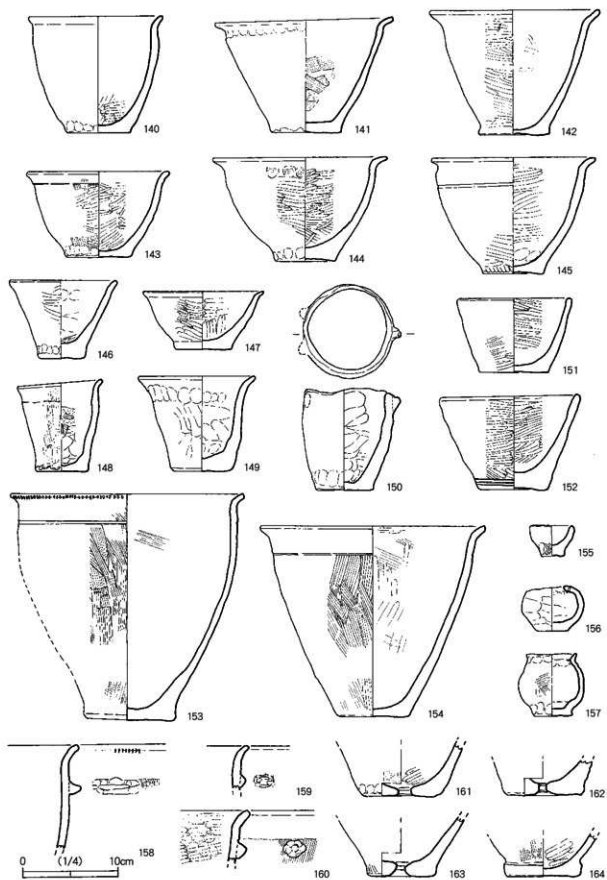
S K 238 (174・175) 174は口径が胴部径と同じほど大きく朝顔形に広がる口縁部で、内面に肥厚帯を有する壺である。頸部と肩部の段は曖昧で、文様帯には貝殻による有軸羽根状文を施す。胴部は偏球形。頸部内面には断面三角突帯を貼り付ける。175は甕。内湾して立ち上がる胴部に短く如意形の口縁部で、口縁下に1条の沈線を持つ。

S K 223 (176・177) 176の壺は口径が胴部径に近く、朝顔形に開いた口縁部を持ち、頸部にはハケ目を押圧した沈線が5条ある。肩部の文様帯は上下の沈線で区画され、その中には貝殻施文の羽状文と沈線が施される。胴部は偏球形で、底部にも1条の沈線がある。頸部内面には断面三角突帯を貼り付ける。177は胴部最大径が中央より上位にあり、くの字にまがった口縁部を持つ甕である。口縁端部には刻み目を有し、口縁下には2条の沈線を施す。

S K 226 (178) 178の壺は、大きく開く口縁部で、口縁端部に1条、頸部に3条、口縁内面に1条の沈線を有する。厚手の底部で、偏球形の胴部は最大径が上位にあり、肩部文様帯は段によってつくられる。施文は摩滅しているが、羽状文が確認できる。

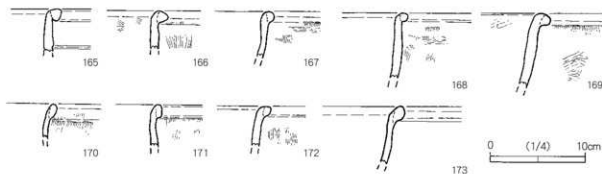
S K 230 (179～182) 179は朝顔形の壺口縁部で、貝殻施文による重弧文が内面に施される。180の壺は、最大径が胴部中央にあり、頸部から口縁部へは短く外反している。外面ミガキ調整。181は短く直線的に曲がる口縁部の甕である。182は小型の甕で、直線的にたちあがった体部から口縁部は短く折れる。

S K 225 (183～185) 183は朝顔形に外反する壺口縁部。頸部にハケ目による押圧沈線が3条めぐ。184は長胴形の壺で、胴部があまり張らない。口縁部欠損。185は壺で、口縁部を欠損するが、胴部と同等の径を有するものとみられる。胴部最大径は中央より上位にあり、文様帯は段によって作り



140~164-SD314

第44图 满出土土器实测图(11)



165~173-SD314

第45図 溝出土土器実測図02

出される。貝殻による羽状文、沈線が施される。頸部は長めで、内面には口縁部へと屈曲する部分に断面三角突帯を貼り付ける。

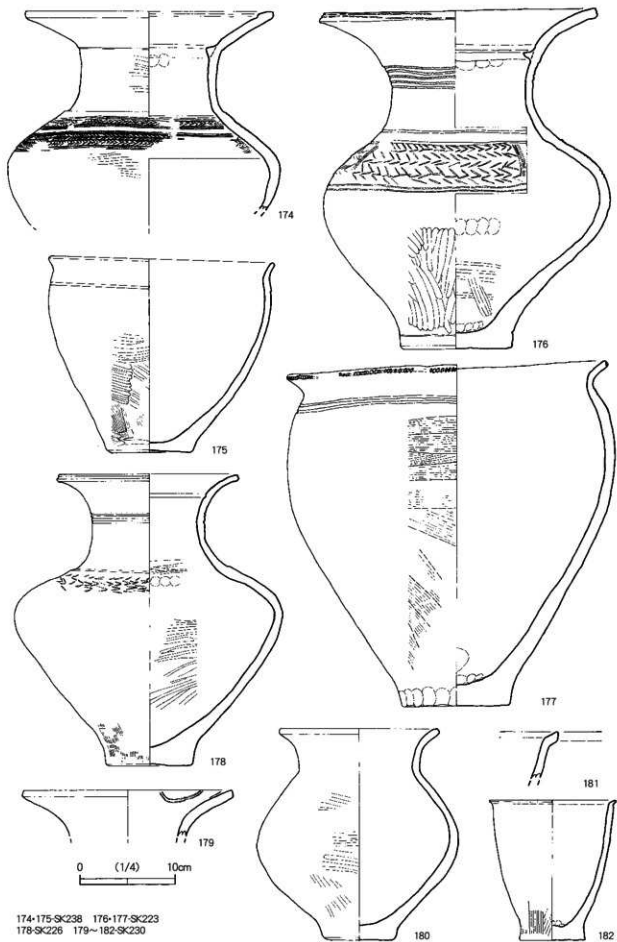
S K 235 (186・187) 186は鉢とみられる底部で、くびれて体部が立ち上がる。底面は上げ底になっている。187は胴部が張り、頸部がその半分以下にくびれる壺である。文様帯は上下とも段によって作り出され、その中には、貝殻による三角文、羽状文、重弧文、沈線によって加飾される。

S K 206 (188・190・191・193) 188は口縁が緩く外反する如意形の甕である。口縁端部に刻みを有する。190・191・193は大型の無文壺である。このうち190、191は同一個体とみられる。190は口縁部がゆるく外反し、口縁下に段を有する。頸部から胴部にかけてゆるく張り出し、最大径は中央から下位にあるとみられる。193はあまり張らない胴部から長い頸部を経て、短く外反する口縁部にいたる。口縁下と肩部には段を有している。

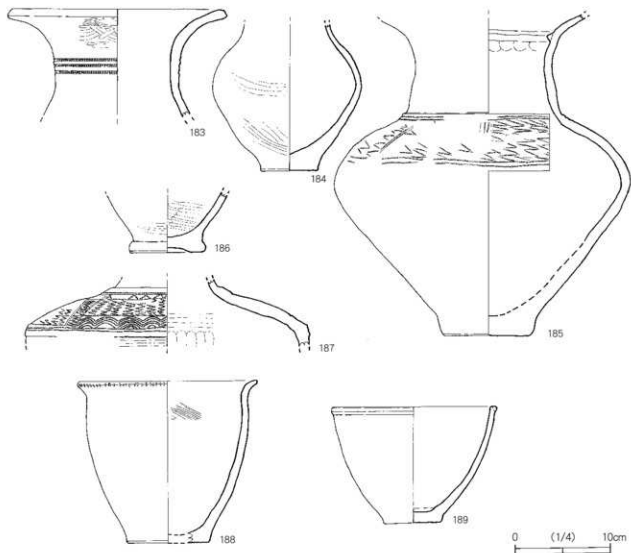
S K 208 (189・192) 189は平底の底部に緩く内湾して立ち上がり、口縁部は外面に粘土紐を肥厚させている鉢である。口縁部の形態から擬朝鮮系無文土器とみられる。192は口縁部、底部を欠損するが大型の無文壺である。頸部はハケ目押圧によって段を作り出している。長胴で、最大径は上位に位置する。



第46図 編みかご状の痕跡のある土器



第47图 土坑出土土器实测图(1)

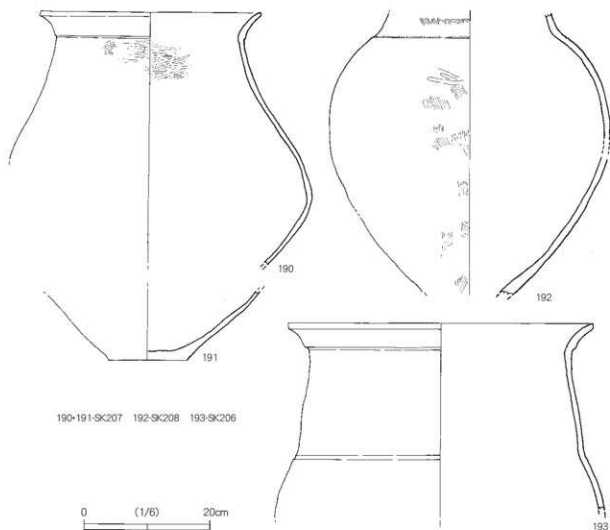


183~185-SK225 186-187-SK235
188-SK206 189-SK208

第48図 土坑出土土器実測図(2)

③地区土坑出土土器 (第50~57図、図版33~38)

S K 3052 (194~200) 194~198は大きく朝顔形に開く口縁部で、口径が胴部径に近い壺である。胴部は194~198は偏球形で、195・196は胴部径に対して器高が高く、196は算盤玉に近いプロポーションである。194~198は頸部内面に断面三角突帯を貼りつけ、197、198は口縁肥厚帯を有する。頸部、肩部の段は不明瞭であるものが多い。194は肩部に突帯を設け、文様帯に貝殻による羽状文を施文する。195は胴部に三角突帯を貼り付け、文様帯に貝殻による羽状文を施文する。196は文様帯の上下に突帯を貼りつけ、貝殻による羽状文などを施文する。197は口縁肥厚帯に鋸歯文を施す。198は頸部に4条沈線、文様帯には貝殻による羽状文、胴部には断面台形で2条の沈線をもつ突帯を貼り付ける。底部には3条の沈線がある。199は壺の文様帯片である。木の葉文、重弧文を施文する。なお197・199は同一個体の可能性がある。200は器高45.4cmをはかる大型の無文壺。胴部最大径が上位にあって大きく張り出す。頸部のくびれは浅く、口縁部は短く外反する。口縁下と肩部には段を有する。頸部には化粧土とみられる赤橙色土が残存するが、全体的に塗布していたかどうかは摩滅して明らかでない。

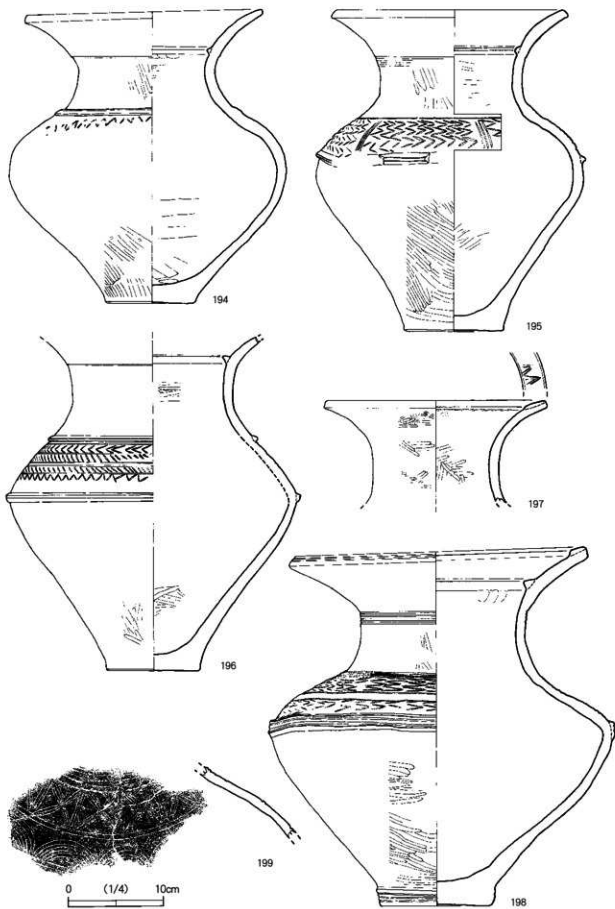


第49図 土坑出土土器実測図(3)

S K 3058 (201~203) 201~203は胴部最大径が上位にあり、径に対して器高が高い長胴のプロポーションを持つ壺である。201は肩部の段は不明瞭で、文様帯は貝殻による沈線と羽状文を施す。202は肩部の段があり、頸部に2条の沈線が残る。文様帯は貝殻による施文で、沈線によって2段に分けられ、上段は羽状文、下段はハの字の載頭山形文で構成される。203は頸部内面に断面三角突帯を貼り付ける。外面には頸部と肩部に段差を有し、文様帯部分は摩滅し、沈線が1条のみである。

S K 3120 (204~206) 204は胴部最大径が上位にあり、短く開口する壺である。口縁端部に1条沈線、頸部、肩部にそれぞれ4条、3条のハケ目による沈線がある。205は球形の胴部に短く外反する口縁部をもつ壺である。206は口径に対して器高が低い費で、口縁部は如意形に短く外反する。1条の沈線を有する。

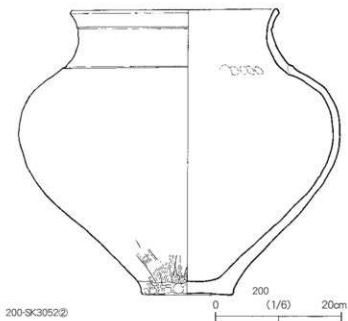
S K 3012 (207・208) 207は壺の肩部文様帯片である。段によって作り出され、貝殻による沈線、鋸歯文、羽状文を施す。208は朝顔形に外反する口縁部片である。外面には頸部に断面三角突帯を貼り付け、内面には口縁肥厚帯をつくり断面三角突帯を有する。口縁端部にはハケ目による沈線が2条認められる。



194~199-SK3052①

第50图 土坑出土土器实测图(4)

S K 3065 (209~214) 壺のみが出土した。これらの肩部には段はないか、またはあっても不明瞭である。また頸部の段も認められない。209は胴部最大径が中位にあり、胴部径に対して器高が低い形態である。3条の貝殻による沈線の下には通例の文様帯はなく、一単位の鋸歯文のみである。210~214の壺は、胴部が偏球形で最大径が上位にあるもの(210・211・213・214)と、球形のもの(212)があるが、いずれも頸部が長く大きく外反する口縁部には内面に断面三角突帯を貼り付ける。210の肩部文様帯は沈線と羽状文を施す。



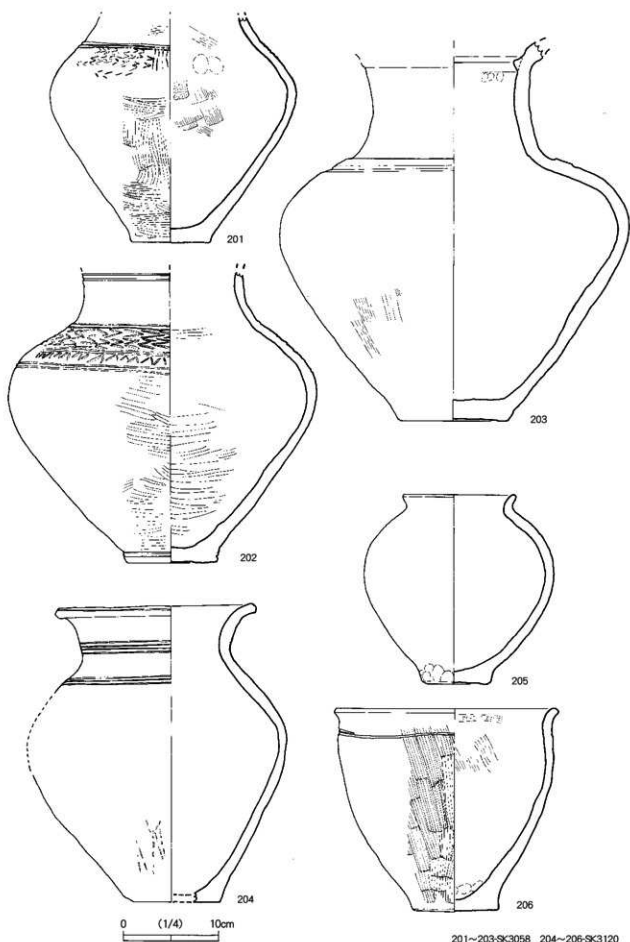
第51図 土坑出土土器実測図(5)

211は口縁端部に2条、頸部に6条のハケ目押圧沈線を持つ。文様帯には貝殻施文の沈線、羽状文、重弧文によって構成される。底部にも2条の沈線あり。212の文様帯は貝殻による沈線と羽状文を施す。213は頸部に5条のハケ目押圧沈線を持ち、文様帯には貝殻による沈線と羽状文を施す。胴部突帯は沈線により作りだしており、2本の沈線を有する。214の肩部段は曖昧で、文様帯は貝殻による羽状文、沈線、鋸歯文によって構成される。

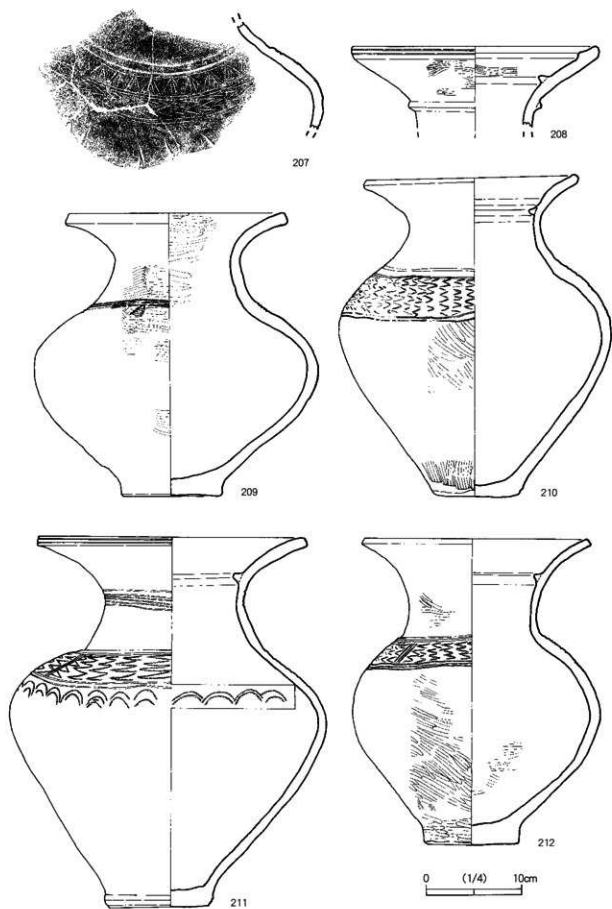
S K 3059 (215~217) 215は胴部最大径が上位にあり、如意形の口縁部を有する甕である。口縁端部には刻み目を施し、口縁下にはハケ目の押圧による沈線が4条ある。216は厚手の底部に外反して立ちあがる鉢である。217は口頸部を欠損した壺である。胴部の貼り付け突帯には3条のハケ目押圧による沈線が3条ある。文様帯には貝殻による羽状文の一部が認められる。

S K 3213 (218~220) 218は口頸部を欠損する壺である。肩部の段は曖昧で、文様帯は貝殻による沈線、羽状文が施される。胴部にはもっとも張り出したところより上位に貼り付け突帯を持つ。219は小型の壺で、胴部突帯の位置は218に似る。頸部に4条の沈線、肩部に有軸羽状文、沈線で構成され、底部には2条の沈線を持つ。220は小型の甕である。体部は外傾して立ちあがり、口縁部はそこから短く外方に折れる。口縁下には2条の沈線をもつ。

S K 3102 (221~225) 221~225はいずれも壺である。221は大型の壺口縁部で、くの字に曲がる。内面の肥厚帯は上端をつまみあげるようにし、端部には2条のハケ目による沈線を施す。頸部にはハケ目押圧による段ができています。222は朝顔形にひろく口縁部で、端部にはハケ目による沈線が2条ある。内面には断面三角突帯を貼り付け巡らす、一部それが途切れて注ぎ口状を呈する。223は肩部文様帯から胴部の破片である。最大径は上位にあり、薄い突帯を持つ。突帯(沈線)と文様帯(沈線、羽状文)は貝殻によって施される。224は長胴で、口縁径が胴部径の1/2になる壺である。口縁部は短く外反する。225は肩部文様帯片である。文様は木の葉文の一葉を単独で描き、それを連続して巡らしている。

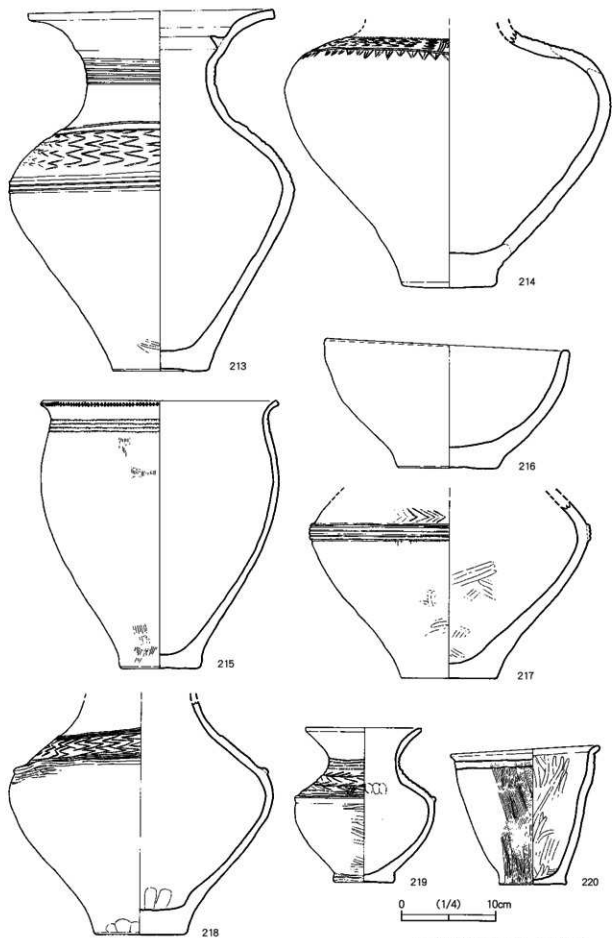


第52图 土坑出土土器实测图(6)



207-208-SK3012 209~212-SK3065①

第53图 土坑出土土器实测图(7)



213-214-SK3065② 215~217-SK3059
218~220-SK3213

第54图 土坑出土土器实测图(8)

S K 3022 (226~229) 226は壺口縁部片で、頸部にハケ目による押圧沈線が3条、口縁端部に刻み目、内面に沈線がある。227は壺肩部で、文様帯の上端は段で、下端は沈線のある薄い突帯で区切られ、内部は貝殻による沈線、羽状文によって構成される。228はハケ目押圧による段を有する甕で、緩く外反する口縁部は端部に沈線を持つ。229は1条の沈線を有する甕で、如意形口縁の端部に刻み目を施す。

S K 3057 (230~232) 230は甕の口縁部片で、端部をまるくおさめる。口縁下には2条の沈線を施す。231は小さい底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁下で最大径となり、口縁は短く如意形に曲がる甕である。体部が最大径である付近に貼り付け突帯があり、この突帯と口縁端部に刻み目を施す。端部にはハケ目による沈線がある。また口縁内部には粘土粒を相対する二方に貼り付けている。底部には壺にみられるような3条の沈線がある。内外面ハケ目調整のちみガキ調整。232は長胴で最大径が上位にある甕で、頸部は短く口縁部は短く外反する。頸部、肩部には沈線を有する。

S K 3121 (233) 233は平底で体部最大径は口縁下にあり、口縁部は如意形に外反する。口縁端部には刻み目を施し、口縁下には沈線を有する。

⑤地区土坑出土土器 (第57図、図版39)

S K 502 (234) 長胴で胴部最大径は中位にある壺で、口縁部を欠損する。肩部は緩やかで段は不明瞭である。文様帯は沈線、羽状文で構成される。

S K 511 (235・236) 235は偏球形の胴部で最大径が上位にあり、くびれた頸部から大きく朝顔形に開く口縁部をもつ壺である。口径は胴径とほぼ同じである。頸部の段はハケ目の押圧により、肩部の段は曖昧である。文様帯には貝殻による沈線、羽状文を施す。236は球形の胴部で最大径は上位にあり、口縁部はあまり外方に広がらない。

S K 512 (237) 237は胴部最大径が上位にあり、口縁部は短く開口する壺である。頸部と肩部に沈線が1条めぐる。摩滅により文様は不明。

S K 513 (238~240) 238は山陰系の二重口縁甕である。体部外面はハケ目調整。内面は頸部下からケズリ調整である。239は低脚の高坏である。坏部は口縁端部を外方にまるくおさめ、深さは浅い。低脚の脚部は小さく、底径は口径の1/2程度である。裾端部はわずかに外へ張り出し、まるくおさめる。240は高坏の脚部。裾部は外方に折れ曲がる。穿孔が4か所にある。

S K 506 (241) 241は器高42.2cmをはかる大型の甕である。口縁部が如意形で短く曲がり、体部最大径が口縁下にあるが口径をこえることはない。2条の沈線を有する。

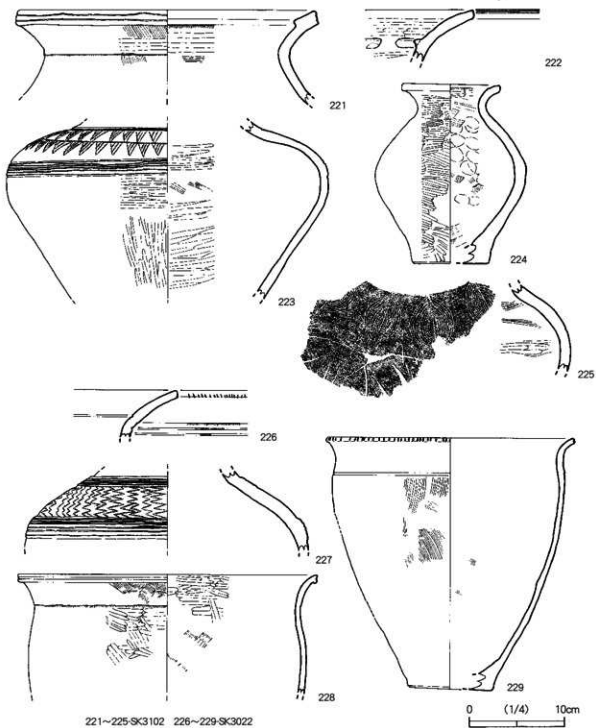
(5) 埋甕遺構 (S X 201・202) 出土遺物 (第58図、図版40)

242は埋甕に使用された土師質土器の大甕。時期は関連する近世遺構出土の近世陶磁器から、江戸時代後期とみられる。口径77.4cm、器高66cm。小さい底部から体部はおおきく内湾して立ち上がり、口縁部はやや内側に傾く。口縁部は肥厚させ、外面は凹線で、内面は段差をつくることで、体部と区別する。底部は外面指押さえ、内面ハケ目調整で、これより上位はタタキ調整のちみガキ調整を行う。

(6) 包含層出土遺物 (第59図、図版40)

③地区東半には地山上に部分的に包含層が検出され、そこからは古代の土器が出土した。

243は都城系土師器の高坏口縁部。外傾した体部から水平に折れた口縁部を持つ。外面ナデ調整と

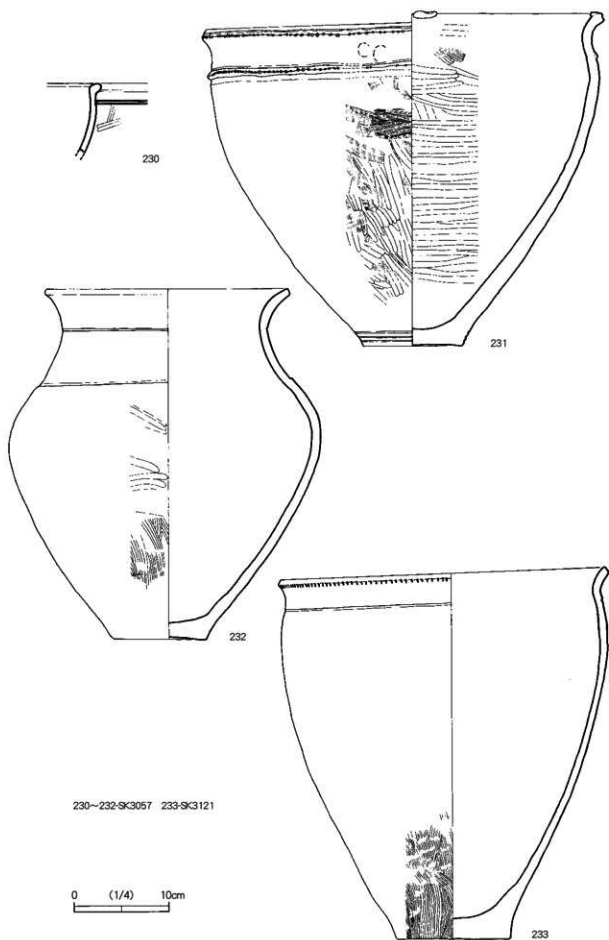


第55図 土坑出土土器実測図(9)

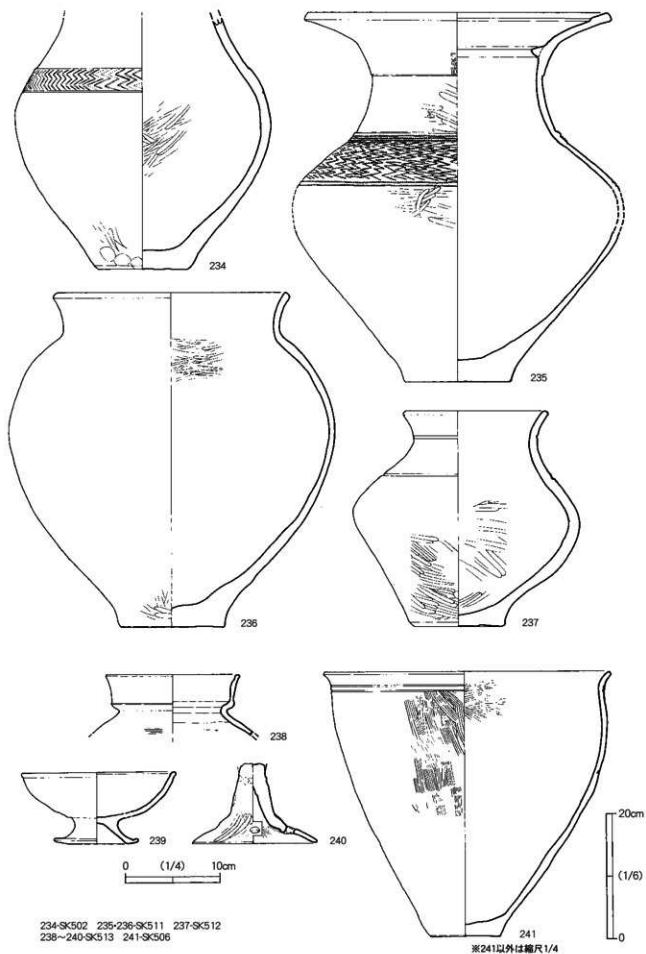
ミガキ調整、内面ミガキ調整。内面には斜放射状の暗文を施す。244はヘラ書き文字を有する須恵器片。底部とみられる破片で、内面は横ナデ調整、外面にはナデ調整や指押さえ痕がある。破片のほぼ中央に焼成前にヘラで書かれた「小寸」とみられる2文字が認められる。なお文字の解釈については、「寸」は「村」の簡略化したものとの指摘もあり、今後さらなる検討が必要であろう。

包含層からはこれ以外に緑釉陶器片も出土した。

(7) 出土土製品 (第60図、図版40)



第56图 土坑出土土器実測図(10)



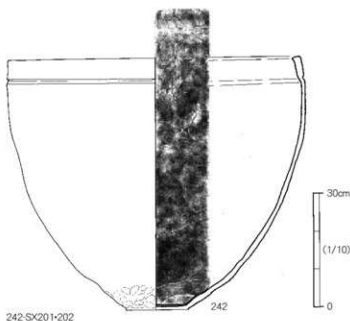
234-SK502 235-236-SK511 237-SK512
238~240-SK513 241-SK506

※241以外は縮尺1/4

第57図 土坑出土土器実測図01

出土した弥生時代の土製品（陶埴は(8)に掲載）について、まとめて報告する。

245は土弾である。径2.3cmで、表面には手捏ねによる指押さえ痕が残る。248～250は土鍾。細長い管状のもの(246・249)から、球形のもの(247)、俵形のもの(248・250)があり、いずれも表面に指ナゲ、指押さえの調整痕が認められる。紐通しの孔は土鍾の幅が厚いほど径が大きい傾向がある。251～256は有孔土製円盤である。このうち251～253・255は土器片を再加工したもので、中央の孔は焼成後穿孔している。



第58図 埋壁遺構出土土器実測図

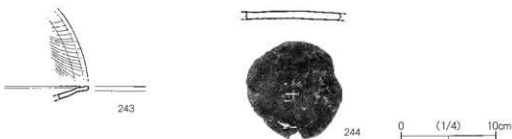
それに対して254・256は当初から製品として製作されたもので、254はミガキ調整を施し、256は断面台形を呈す。用途は土製の紡錘車であろう。257～269は土製円盤である。土器片の縁辺を打ち欠いて、円形又は楕円形に整形している。257・258・263・265・266は相対する二か所に挟りがあることから、使用に際して紐等を巻いた可能性がある。大きさは長径3.3～8.4cmとバラエティーがある。

(8) 陶埴 (第61図、図版40)

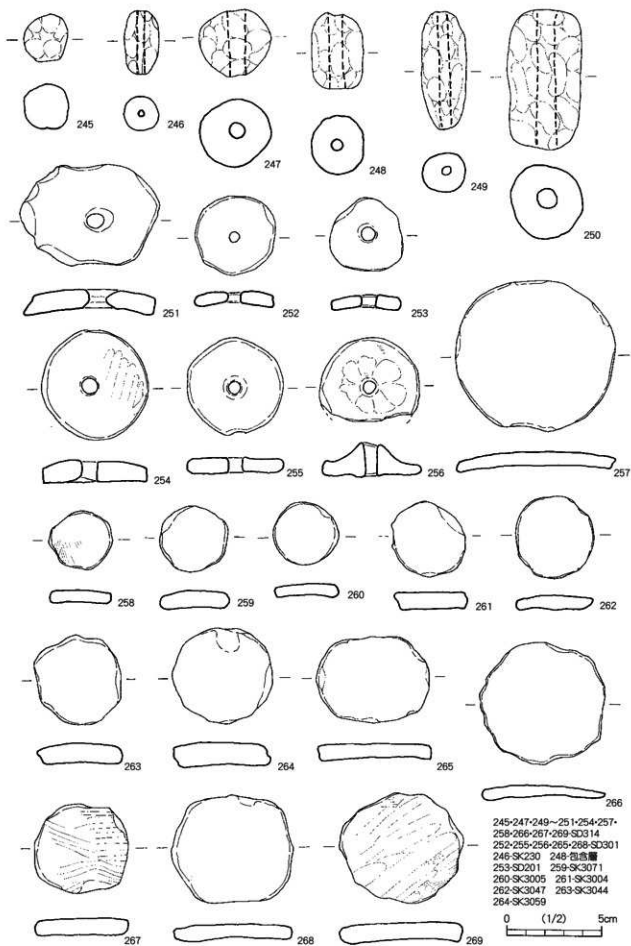
今年度の調査では270～272の3点が出土した。出土位置はSD301のうちセクション2(270)、セクション6(271)、およびSD314(272)からである。270は器高5.6cm、胴部最大幅4.4cmの倒卵形で、吹き口の一部分が欠損している。吹き口の長径は2.0cmである。前面には4つの孔があり、背面には吹き口近くに1つの孔が認められる。ただ類例では2孔である場合があるので、欠損した部分にもあった可能性がある。孔径は2～3mmである。271・272は大型陶埴の破片である。271は2つの孔があるが、これが前面か背面かは定かでない。孔径は3～5mmで、器壁の厚さは1.2cmである。272は倒卵形で、吹き口を欠損する。残存する孔は1つで、体部の中央よりやや下位に位置する。孔径7～10mm、器壁の厚さ1cmである。

(9) 石器・石製品 (第62～67図、図版41～46、第2表)

今回の調査では、武器または武器形として打製石鏃、磨製石鏃、石剣、石戈、環状石斧、収穫具と



第59図 包含層出土土器実測図



第60図 土製品実測図

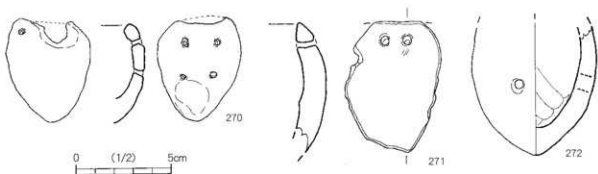
して石庖丁、石鎌、加工伐採用として各種の石斧があり、その他管玉、紡錘車、磨石・敲石、砥石、未製品が出土した。石器の出土位置、分量、石材については一覧表（第2表）のとおりである。

273～321は打製石鎌である。いずれも無茎式で、基部の形態から平基式と凹基式に分けられる。ただえぐりが浅いものは両者の区別がつきにくいものもある。平面の形態からは、正三角形に近いもの（273～284）、二等辺三角形に近いもの（285～321）とに分けられる。分量は1.5～2.5cmの長さのものが最も多く、321は全長4.0cm、重さ7.0gと最も大型である。石材は安山岩製が多い。322は細身の有茎式石鎌か。323は石錐。基部は幅広で、先端を欠損している。324～332は磨製石鎌である。いずれも泥岩製。324～332は平基式で、324～326は三角形を呈し、他はそれより細身である。333は有茎平基式で1cmの茎部がある。334～337は碧玉製管玉。338は石製紡錘車。

339～361は加工用の片刃（または両刃）石斧である。石材は赤色頁岩、泥岩、塩基性片岩の3種類からなる。340、341は小型柱状片刃石斧で、339・342～354・356・357・360は扁平片刃（または両刃）石斧である。形態は基部と刃部の幅が同じであるものがほとんどであるが、339は基部が狭い。355・358・359・361は両刃の小型石斧である。358の形状は蛤刃石斧に似る。361は最大幅に比して刃部は狭く、厚みも薄い。354・356は両刃気味の刃部を有するが全体に整形時の剥離痕があることから、未製品とみられる。なおその他の赤色頁岩製小型石斧には、側刃部に整形時の敲打痕や調整剥離痕が残るものの、刃部を作り出し全体に研磨を施しているため、製品と考えられる。このように赤色頁岩製には製品と未製品との区別が難しいものがあり、泥岩製の定型化した片刃石斧とは異なった状況を示す。

362～366は石包丁である。いずれも破片であるため形状は明らかではないが、364～366からすると刃部は両刃で、その湾曲から推定して幅の詰まった外湾刃半月形であろう。363は紐孔が3つあり、1つの未穿孔がある。他に比べ孔径が小さい。364は断面がレンズ状となるのが特徴的である。367～369は板状に石材を打割し縁辺に調整剥離をしており、その形態から半月形石包丁の未製品であろう。378は大型石庖丁の未製品とみられる。これらはいずれもSK3089から出土しており、未製品がまともに出土した土坑として注目される。石材は364が赤色頁岩で、他は泥岩である。

380～388は伐採石斧である大型蛤刃石斧である。破損品が多いが、完形品の383・387では400～480gの重量がある。388は刃部を欠くが出土中最大で、残長18.2cm、重量1.5kgをはかる。なお398はこれに類する大型石斧の未製品とみられる。389～392は環状石斧である。赤色頁岩の391以外は泥



270-271-SD301 272-SD314

第61図 陶墳実測図

岩である。390は他に比して板状で厚さが薄いため、他の製品を転用した可能性がある。

370～376は石鎌である。このうち374は打製で、他は磨製である。373は刃部に調整剥離が残っている。376は中央から両側に刃部を研ぎだして断面菱形であるので、磨製石剣の切っ先ともとれるが、上辺は刃をつぶして面取りを行い、弧を描く平面形であるので、石鎌とみられる。石剣の転用かもしれない。375は大型の石鎌であろう。379は砂岩製の砥石で、4面を使用面としている。粗砥とみられる。

393～395は赤色頁岩の打製石斧である。基部より刃部のほうがやや幅広く、394は両辺に浅い抉りがある。396と397は磨石・蔽石で、両者とも中央部に握りのためのくぼみがあり、縁辺には使用による敲打痕がある。

401、402は磨製石剣で、茎部は短い。断面は菱形である。泥岩製。

399、400は断面レンズ状で、刃部をシャープに研ぎ出している。両者とも切っ先の部分で、下端を欠損している。403は扁平な石材の両辺を両刃に研ぎだしている。下位の両辺には剥離が顕著に残るが、側辺部を研磨している部分もある。刃部より下位はえぐれてわずかに細くなることから、関をつくり茎部としている。片面は自然面であり、研磨が中途であるので未製品とみられる。茎部の中央には穿孔が1つある。399、400は断面レンズ状で、刃部をシャープに研ぎ出している。両者とも大きさや断面の形状から403と同様な武器の切っ先部分とみられる。この3点は石剣の大型品ともとれるが、403の茎部が柄とすると幅が7cmとなることから、握って使用することは難しいと考えられる製品である。そのため大型品であること、穿孔を有すること、基部下端が斜めに作り出されているなどの特徴から、戈として使用された可能性が指摘されている²¹⁾。また377は両辺両刃でわずかに内湾し、断面の形状や厚さが403に類似することから、同様に戈と考えられる。404は刃を研ぎだし、断面は菱形である。茎部には整形時の剥離痕が残り、茎部の片側と基部に近い部分の両側に抉りが認められる。形態から「石矛」³¹⁾とされるものであるが、403と同じく戈の可能性もある⁴¹⁾。石材は400、404が泥質片岩で、他は泥岩である。

注 1) 京都学園大学 教授 八木充氏よりご教示いただいた。

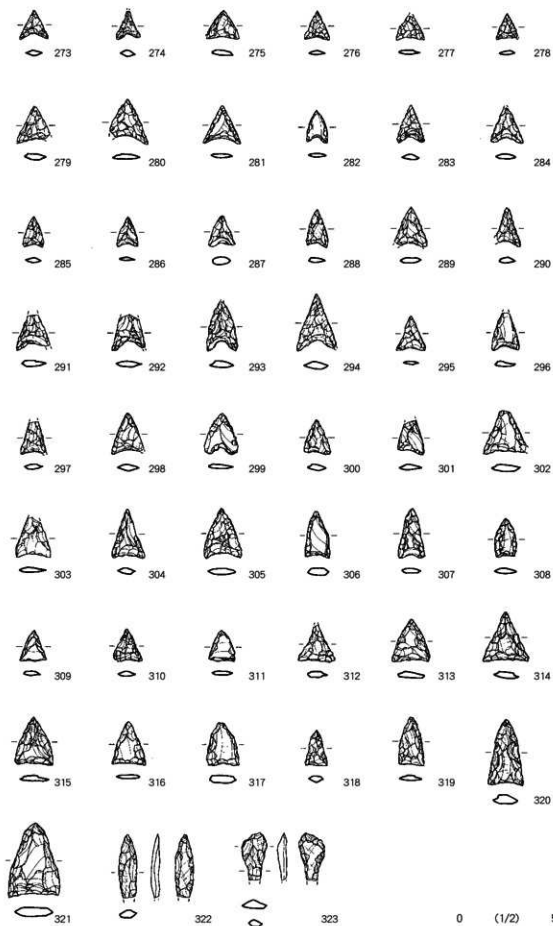
2) 寺前直人「武器」北條芳隆・榎田佳男編『考古資料大観 第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』2002。

3) 下條信行「石矛の提唱 ―木葉形磨製石製武器について―」『賀川光夫先生還暦記念論集』賀川光夫先生還暦記念論集編集委員会 1982。

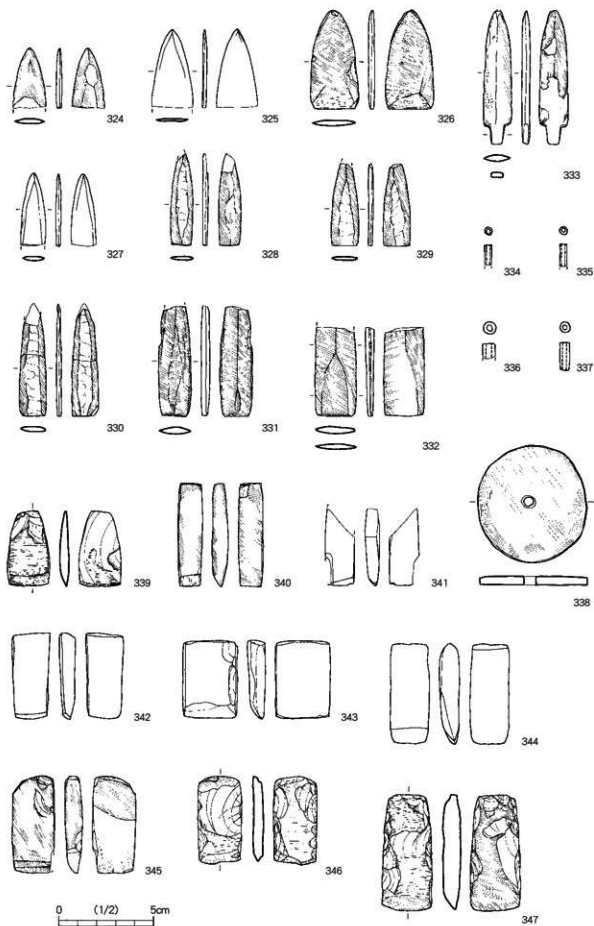
4) 文献1)では、石矛についても戈の可能性を指摘している。

第2表 石器一覽表

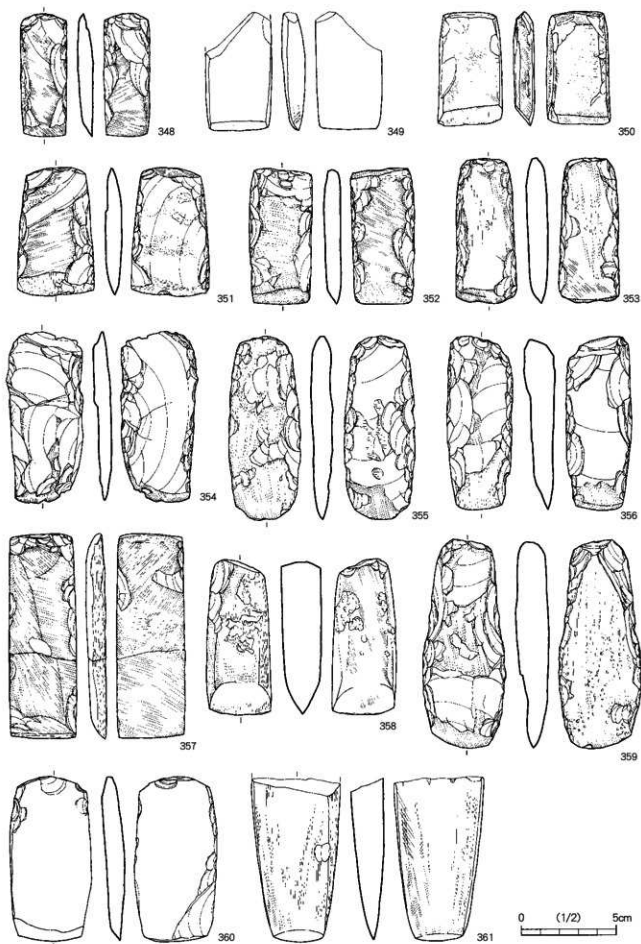
番号	押印	出土 遺構	法量 (mm)			重量 (g)	石材	備考	番号	押印	出土 遺構	法量 (mm)			重量 (g)	石材	備考
			最大長	最大幅	最大厚							最大長	最大幅	最大厚			
273	62	41	S K3006	15.7	15.4	3.9	1.5	安山岩	339	63	42	S K3101	40.2	22.4	5.3	8.0	赤色頁岩
274	62	41	S K3006	(15.2)	13.3	4.0	1.5	黑曜石	340	63	42	S D301	54.6	13.5	8.7	12.6	肥前
275	62	41	S K3006	15.4	17.6	3.4	1.8	安山岩	341	63	42	S K3044	(40.9)	16.2	8.0	8.0	肥前
276	62	41	S K3023	15.3	14.1	3.4	1.5	黑曜石	342	63	42	S D301	45.9	20.4	8.5	15.7	肥前
277	62	41	S K3033	(13.2)	14.9	3.1	1.5	安山岩	343	63	42	S D301	(41.4)	29.3	9.5	23.9	肥前
278	62	41	S D301	14.1	(11.5)	2.9	1.3	黑曜石	344	63	42	S D314	53.3	21.2	10.9	23.6	肥前
279	62	41	S K3167	19.5	(17.6)	4.0	1.9	安山岩	345	63	42	S D301	51.6	22.9	9.4	21.9	肥前
280	62	41	S D101	23.7	(20.6)	3.3	2.1	安山岩	346	63	42	S K3109	46.8	23.5	7.6	13.2	赤色頁岩
281	62	41	S D301	20.3	20.0	2.8	1.6	安山岩	347	63	42	S D314	61.3	27.0	10.7	28.4	赤色頁岩
282	62	41	S D301	17.3	11.4	2.3	1.6	黑曜石	348	64	43	S D314	65.1	25.0	9.2	24.7	赤色頁岩
283	62	41	S D301	20.5	15.0	3.8	1.8	安山岩	349	64	43	S D301	(62.5)	35.9	12.7	43.6	肥前
284	62	41	S K3005	(19.1)	17.3	3.5	1.7	安山岩	350	64	43	S D314	60.0	33.0	11.0	41.2	赤色頁岩
285	62	41	S D301	16.1	11.3	4.0	1.6	黑曜石	351	64	43	S D301	68.7	41.5	9.6	44.8	赤色頁岩
286	62	41	S K3023	16.1	11.6	2.8	1.3	安山岩	352	64	43	S D301	72.2	34.0	10.2	45.2	赤色頁岩
287	62	41	S K3108	16.4	14.3	4.5	1.8	安山岩	353	64	43	S D301	76.8	32.7	11.9	56.4	赤色頁岩
288	62	41	S K3127	20.0	11.7	3.4	1.6	安山岩	354	64	43	S D314	90.4	40.9	15.7	56.5	赤色頁岩
289	62	41	S D301	21.1	(17.4)	3.8	2.0	安山岩	355	64	43	S K3167	97.3	38.6	12.2	76.4	壱岐性片岩
290	62	41	S K3023	20.6	(12.9)	3.9	1.6	安山岩	356	64	43	S D101	92.2	35.3	17.4	75.9	赤色頁岩
291	62	41	S K3023	(19.1)	(18.1)	3.8	2.1	安山岩	357	64	43	S K3171	108.5	36.6	10.6	79.4	肥前
292	62	41	S D301	(19.7)	(17.9)	3.4	2.1	安山岩	358	64	43	S D301	82.3	34.5	22.3	124.4	壱岐性片岩
293	62	41	S D314	(26.5)	16.7	4.2	2.5	安山岩	359	64	43	S K3142	110.2	43.8	18.9	137.1	壱岐性片岩
294	62	41	S D301	30.6	(21.0)	4.6	2.5	黑曜石	360	64	43	S D314	86.9	44.0	12.8	73.7	肥前片岩
295	62	41	S D314	18.5	15.6	2.8	1.6	安山岩	361	64	43	S D314	(96.7)	48.0	17.7	114.2	安山岩
296	62	41	S D301	(20.2)	14.8	3.6	1.8	安山岩	362	65	44	S D314	(52.0)	(32.0)	5.5	15.6	肥前
297	62	41	S D301	(17.6)	(13.8)	3.5	1.8	安山岩	363	65	44	S K3066	(56.0)	(53.0)	5.0	30.0	肥前
298	62	41	S D301	22.3	(17.2)	3.7	2.1	安山岩	364	65	44	S D301	(54.0)	(74.0)	13.0	71.0	赤色頁岩
299	62	41	S K3022	21.7	18.1	3.0	1.8	黑曜石	365	65	44	S D301	(61.0)	(62.0)	5.0	35.5	肥前
300	62	41	S K3023	18.4	14.6	4.0	1.8	安山岩	366	65	44	S D314	(115.0)	92.0	5.0	92.9	肥前
301	62	41	S K3023	(18.3)	14.2	3.4	1.8	安山岩	367	65	44	S K3089	189.0	72.0	96.0	180.0	肥前
302	62	41	S D101	(23.4)	(22.4)	4.9	2.8	安山岩	368	65	44	S K3089	200.0	80.0	8.5	228.3	肥前
303	62	41	S K3073	(21.1)	18.6	3.6	2.2	安山岩	369	65	44	S K3089	239.0	76.0	8.0	250.2	肥前
304	62	41	S K3023	26.1	17.4	4.3	2.1	安山岩	370	65	44	S D314	36.6	79.2	9.7	41.7	肥前
305	62	41	S K3066	26.8	20.4	4.2	2.6	黑曜石	371	65	44	S D301	(49.6)	95.5	10.9	84.7	肥前
306	62	41	S D301	25.2	13.6	4.4	2.6	安山岩	372	65	44	S D314	(49.2)	103.3	9.4	53.2	肥前
307	62	41	S D301	26.7	14.3	4.0	2.1	安山岩	373	65	44	S D314	(49.8)	124.3	13.8	111.3	赤色頁岩
308	62	41	S K3033	21.0	12.0	3.9	1.9	安山岩	374	65	44	表探	(57.7)	139.2	10.3	91.3	肥前
309	62	41	S K3101	16.8	14.7	3.0	1.5	安山岩	375	65	44	S D314	(75.9)	143.9	9.4	180.7	肥前
310	62	41	S D301	17.5	15.6	3.5	1.7	黑曜石	376	65	44	S K3014	(73.0)	(44.0)	14.0	52.2	肥前
311	62	41	S D301	16.4	13.9	3.6	1.4	黑曜石	377	65	44	S D101	96.0	165.7	9.2	214.5	肥前
312	62	41	S K3044	(19.5)	19.4	4.1	1.9	安山岩	378	65	44	S K3089	(117.0)	96.0	11.0	241.7	肥前
313	62	41	S K3023	22.6	20.1	4.4	2.7	安山岩	379	65	44	S K3124	(118.0)	78.0	52.0	830.0	砂岩
314	62	41	S D314	25.0	26.0	4.0	2.7	安山岩	380	66	45	S D301	(98.3)	66.5	49.1	380.0	肥前
315	62	41	S D301	26.6	25.0	4.9	2.7	安山岩	381	66	45	S D101	(83.5)	66.3	42.4	292.6	安山岩
316	62	41	S K3135	23.7	17.8	3.1	2.0	安山岩	382	66	45	S D314	(113.5)	55.0	38.7	420.0	壱岐性片岩
317	62	41	S K3065	23.2	17.6	5.6	3.3	安山岩	383	66	45	S D301	124.8	96.7	29.9	400.0	壱岐性片岩
318	62	41	S D301	19.0	11.7	4.4	1.4	黑曜石	384	66	45	表探	(114.9)	55.0	39.9	450.0	壱岐性片岩
319	62	41	S D101	25.9	13.7	3.2	2.0	安山岩	385	66	45	表探	(78.0)	61.4	38.1	253.1	壱岐性片岩
320	62	41	S D301	35.1	18.7	5.8	4.0	安山岩	386	66	45	S K3022	134.4	70.1	52.0	740.0	肥前
321	62	41	S K3033	39.5	27.4	6.0	7.0	安山岩	387	66	45	S K3154	135.4	55.8	37.4	480.0	四磨岩
322	62	41	S K3066	33.0	10.0	5.0	2.4	安山岩	388	66	45	S K3066	(182.1)	93.6	50.7	1500.0	砂岩
323	62	41	S D301	(25.0)	13.0	6.0	2.6	安山岩	389	66	45	S D314	(90.4)	54.5	24.3	127.9	肥前
324	62	42	S D301	32.1	18.0	3.3	3.1	肥前	390	66	45	S D314	(125.0)	89.7	9.5	125.3	肥前
325	63	42	S D301	41.9	21.8	2.3	3.5	肥前	391	66	45	S D314	(59.1)	51.3	21.9	83.4	赤色頁岩
326	63	42	S K3023	52.5	25.6	3.7	7.6	赤色頁岩	392	66	45	S D314	(88.0)	43.0	15.0	84.4	肥前
327	63	42	S K3033	38.3	13.6	3.1	2.7	肥前	393	67	46	S D301	103.0	66.0	11.0	116.0	赤色頁岩
328	63	42	S D301	(48.6)	12.1	3.1	3.2	肥前	394	67	46	S K3100	105.0	62.0	18.0	148.8	赤色頁岩
329	63	42	S D301	(43.6)	14.7	2.9	3.0	肥前	395	67	46	S D314	(89.0)	60.0	15.0	107.7	赤色頁岩
330	63	42	S D301	(59.6)	14.4	3.3	4.3	肥前	396	67	46	S D301	123.0	103.0	58.0	1140.0	花崗岩
331	63	42	S D314	(58.4)	17.8	5.0	7.7	肥前	397	67	46	S B503	117.0	58.0	34.0	410.0	四磨岩
332	63	42	包含層	(47.0)	21.7	4.5	8.6	肥前	398	67	46	S K3152	255.4	73.0	44.2	1270.0	肥前片岩
333	63	42	S K3044	70.5	15.6	4.4	7.0	肥前	399	67	46	S D301	(129.5)	62.5	13.7	131.5	肥前
334	63	42	包含層	11.0	4.3	4.1	1.4	碧玉	400	67	46	S D101	(121.1)	58.3	13.8	130.2	肥前片岩
335	63	42	S P 3309	11.8	4.3	4.2	1.2	碧玉	401	67	46	S K3185	(52.0)	41.0	8.0	30.3	肥前
336	63	42	包含層	(8.1)	7.4	6.8	1.5	碧玉	402	67	46	S D301	(42.0)	43.0	9.0	22.3	肥前
337	63	42	S K3022	15.0	5.5	5.6	1.7	碧玉	403	67	46	S D203	(200.1)	94.5	13.7	410.0	肥前
338	63	42	S D314	62.0	58.0	4.0	16.5	肥前	404	67	46	表探	208.0	56.0	14.0	241.9	肥前片岩



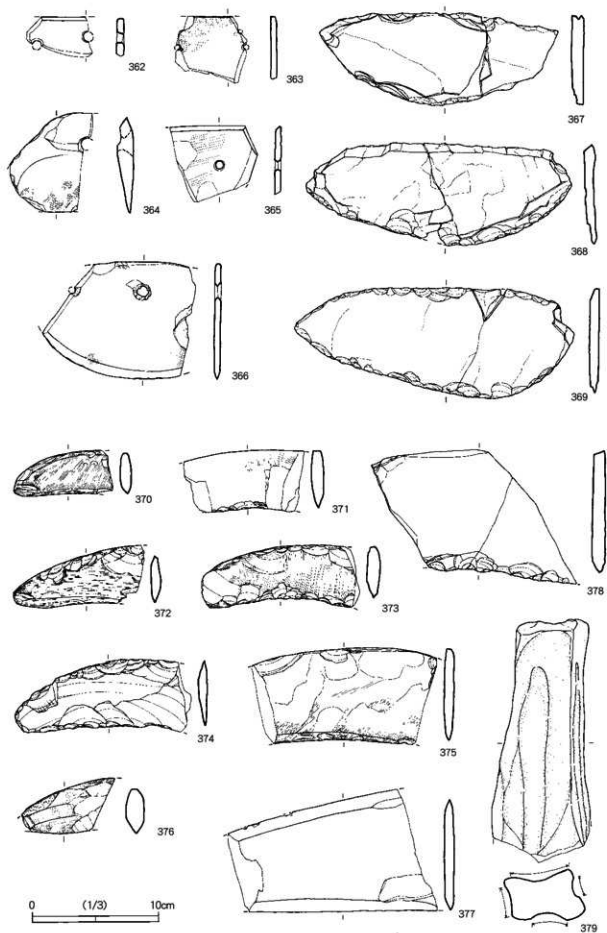
第62図 石器・石製品実測図(1)



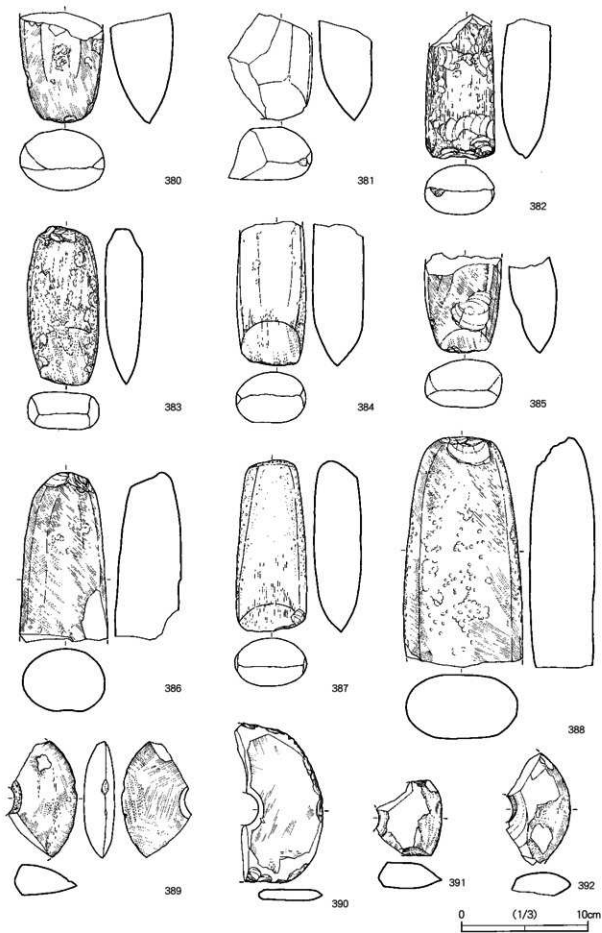
第63図 石器・石製品実測図(2)



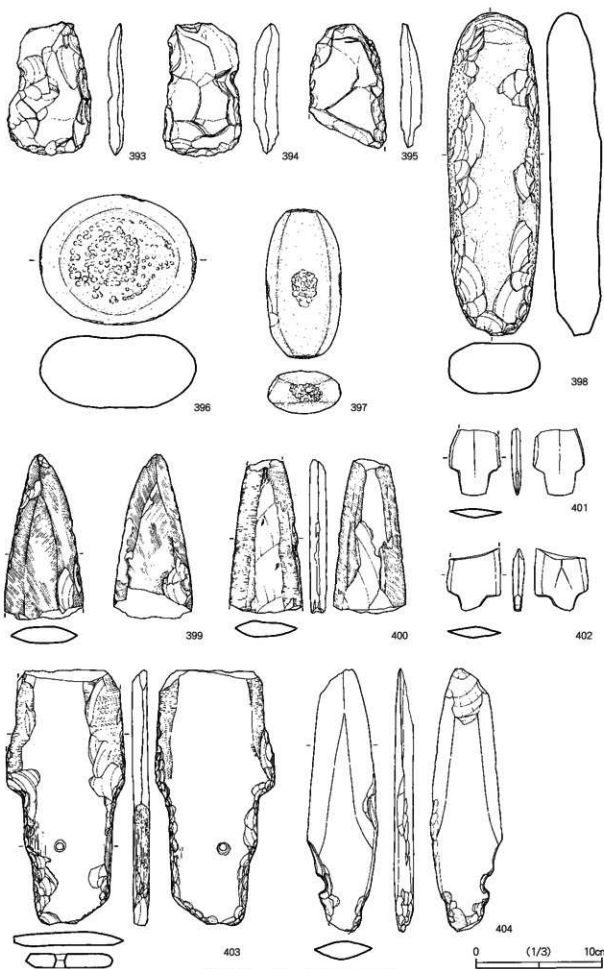
第64図 石器・石製品実測図(3)



第65図 石器・石製品実測図(4)



第66図 石器・石製品実測図(5)



第67图 石器・石製品実測図(6)

IV まとめ

ほ場整備事業に伴う吉永遺跡発掘調査も今年度で第4次を数える。今回の調査区であるV地区は、第1次調査区（Ⅱ地区：1997年度調査）および第2次調査区（Ⅲ－西地区：1998年度豊浦町教育委員会調査）の西側に隣接、第3次調査区（Ⅳ地区：2001年度調査）の東側に位置する。大門古墳の所在する丘陵麓の洪積台地上、一連の吉永遺跡のほぼ中央にあたる15,000㎡という広大な面積が対象となった。吉永遺跡の発掘調査は来年度も実施される予定であるが、これまでの成果も含め、今回の調査を総括したい。

遺跡の時期

弥生時代から近世に至る各時代の遺構・遺物が発見されており、長きに渡ってこの地が繁栄した様子が窺える。特に、弥生時代前期後半～前期末の遺構数・遺物量は他を圧倒している。綾羅木Ⅱ～Ⅲ式期に相当し、綾羅木Ⅱ式を中心とする土器が出土したⅣ地区と時期的に一部重複するが、やや下る時期まで集落が営まれていたと言える。当時の拠点集落がこの地に展開していた可能性が高まった。

弥生時代の吉永遺跡

1) 環境 (第68図)

第3次調査では弥生時代前期後半の環境と思われる溝SD01を検出したが、今回の調査でも同様の溝を3条（SD102、SD201、SD301）発見した。部分的な検出であり全容は把握できないが、断面形状や規模から環境と考え、以下の論を進める。

SD102は、最も西寄りに位置する環境である。調査区が狭長であったため検出長は2mにすぎないが、弧を描きながら南西に延びていると仮定すれば、その方向はSD01の南東端にほぼ一致する。また第3次調査の報告ではSD01の内径を100m余りと試算しているが、SD102との間隔は直線距離で約120mであり、試算との整合性も高い。これらを考え合わせると、SD102はSD01と同一の環境である可能性が高まっていく。ただSD102の出土遺物は流入と思われる少量の弥生土器片のみで、詳細な時期決定が困難であることに加え未調査の部分も多い。ここでは同一遺構である可能性を指摘するに留めておく。

SD301は綾羅木ⅢA式期の環境である。土坑群を区画する環境と位置づけていたが、完形品に近い遺物が多量に出



第68図 溝位置関係図

土した状況を鑑みると、特別な意味合いを持つことは否定できない。想像を逞しくすれば、SD301は祭祀区域を区画しており、祭儀の後に土器を遺棄した可能性が考えられる。陶埴やミニチュア土器、石剣などの出土はそれを裏付けるとなろう。同様の理由からSD314も祭祀関連のものと考えられるが、出土土器はSD301のそれよりもやや遡る綾羅木Ⅱ式のものが多く、祭祀区域は次第に移行したという変遷を想定できる。

SD201の性格についても考察する必要があるが、出土遺物の大半は流入であり、最下層の遺物も破片のみであるため明確な時期は決定できていない。溝の北側は来年度調査される予定であり、その成果を待って再検討したい。

2) 集落

今回の調査でも弥生時代前期の住居跡は確認できなかった。調査区全域から出土した遺物の量を考えると相当数が居住していたはずであり、居住区の確定は大きな課題として残る。削平され消滅した、掘立柱建物などの平地式住居に住んでいた、未調査区域に埋存しているなどの可能性が考えられるが、前述した祭祀区域説を採用すればSD301の西側には住居を設けてはいないことになり、未調査区域埋存説の信憑性が高まる。その場合、祭祀区域を画すという意味からも、小河川を挟んだ⑤地区南側の台地上に居住区があったと考える方が適切であろう。

3) 遺物

今回の調査ではコンテナ換算で950箱もの膨大な量の遺物が出土した。前述したように綾羅木Ⅱ～Ⅲ式の範疇に収まるものである。壺口縁部の発達や口縁内部の貼付突帯、甕胴部の膨張や沈線の複条化など、Ⅱ式からⅢ式への変遷が明確に表れている。傾向として、新しい要素をもつものは土坑出土土器に多く見られる。

壺の文様については羽状文が主なモチーフであるが、Ⅳ地区では発見されなかった山形重弧文が今年には複数見つかった。実測図を掲載した3点以外にも数点確認しているが、その比率は中ノ浜遺跡に比べはるかに低い。

擬朝鮮系無文土器のうち88は完形に復元できたものである。口縁部の形状は無文土器本来のものに酷似するが、プロポーションや調整に弥生土器の影響が看取できる。その他の破片についても、口縁部断面が三角や扁平になるものなどが多く、Ⅳ地区出土のものより时期的に下ると言えよう。

小粘土塊を耳状あるいはイボ状に貼付した甕・鉢も出土した。類例は綾羅木郷遺跡出土土器にも見られるが、貼付位置については綾羅木郷遺跡のものが口縁端部付近であるのに対し、今回発見したのについては低位（沈線付近）であるという違いがある。

弥生時代終末～古墳時代初頭の吉永遺跡

この時期の竪穴住居跡を3軒検出した。同時期の住居跡は第2次調査（Ⅲ～東地区）、高野遺跡（北地区：1995～1997年度調査）でも多数発見されており、規模的にも共通性を見出せる。ただ両遺跡では屋外周溝を伴う住居跡が見つかったが、今回の調査ではそのような例はなかった。

検出した竪穴住居跡のうち、2軒は焼失家屋と考えられる。特にSB502は、焰上崩壊した状況を如実に物語っている。炭化した建築部材が床面直上で検出されたが、それを覆うように大量の焼土塊が埋積しており、草葺きの屋根に土を盛っていた、あるいは土葺き屋根であった可能性を示唆する。

意図的に火を放ったと推測するが、遺物量は多くなく、また祭祀関連のものが見あたらないことから、片付けの意味での放火と考えられる。S B 503も祭祀関連の土器が出土しないことから片付けのための放火を想定できるが、遺物の量が多い割に炭や焼土塊が少ないという相違点がある。廃材を処分する際に土器を投棄したものであろう。

今回発見された住居跡はⅢ－東地区から直線距離にして約400mの距離にあり、同一居住区のものとは考えにくい。実際、中間に位置するⅢ－西地区では同時期の住居跡がほとんど見つかっておらず、別の集団が居住していたと考える。

古代の吉永遺跡

古代の遺構として、大型掘立柱建物跡 S B 303・304がある。時期が確定できたものはこの2棟であるが、周辺の建物跡にも棟方向に企画性があることから、同時期の建物跡であることは確実である。S B 304を中心とするU型の配置、倉庫と思われる総柱建物跡の存在など官衙を彷彿させるが、豊浦郡衙の所在地は下関市秋根町とする説が有力である。文字関係の遺物を始めとする有効資料には欠けるが、里（郷）の役所などの施設であった可能性も否定できない。同時期の建物跡として第1次調査（I地区）S B－8および同時期と考えられるS B－18が挙げられるが、棟方向は異なっており、関連性は低いと思われる。

中世の吉永遺跡

中世の遺構は掘立柱建物跡のみであるが、それらは全て⑤地区で検出されている。13～14世紀の建物跡と考えられ、棟方向はN50～60°Wもしくはそれと垂直なN30～40°Eの範囲に収まるもの、ほぼ南北に向くものの2種類に分けられる。時期不確定・時期不明の建物跡にも同様の棟方向をもつものがあり、柱穴の規模も類似することからほぼ同時期のものと考えられよう。この棟方向はIV地区の中世掘立柱建物にもほぼ共通している。なお、中世村落のあり方を示す好例に、近隣の船頭遺跡（1994年度調査）があるが、複数の建物を溝で囲郭する構成は⑤地区では見られない。また建物規模も小さいため、一般農民の居宅あるいは納屋であったと考えられる。

近世の吉永遺跡

近世の遺構としては埋喪遺構2基を検出したのみである。この遺構がある②地区は、当時の赤間関街道の沿線にあたるが、地下上申絵図によれば付近に家屋は描かれておらず、同時期の遺構が周辺に存在する可能性は低い。

参考文献

- 下関市教育委員会 『綾羅木郷遺跡発掘調査報告書第1集（本文篇）』 1981
- 下関市教育委員会 『秋根遺跡』 1977
- 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会 『船頭遺跡II』 1995
- 山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 『吉永遺跡』 1998
- 山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 『吉永遺跡（Ⅲ－東地区）』 1999
- 豊浦町教育委員会 『吉永遺跡（Ⅲ－西地区）』 1999
- 山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 『高野遺跡（北地区）』 1999
- 豊浦町教育委員会 『高野遺跡（南地区）』 1999
- 山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 『吉永遺跡（IV地区）』 2002

圖 版



調査区遠景（南東から）

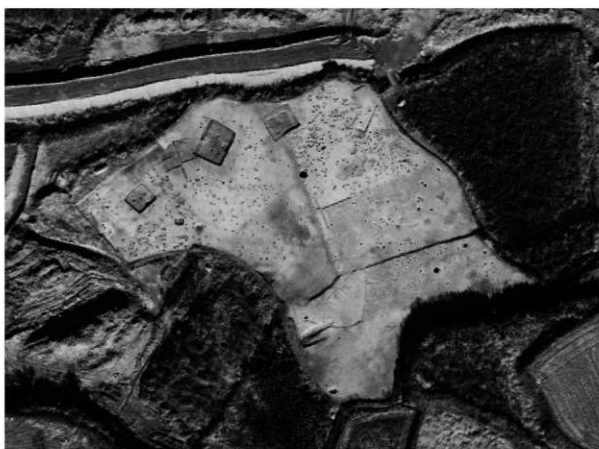
図版 2



中ノ浜遺跡・高野遺跡を臨む



①・②・③地区全景 (南西から)



⑤地区全景 (南西から)

調査区の様子(1)



③地区掘立柱建物跡群 (南西から)



⑤地区竪穴住居跡群 (南西から)

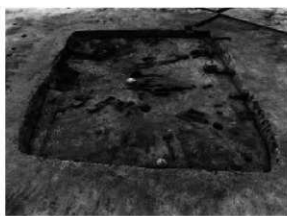
調査区の様子(2)



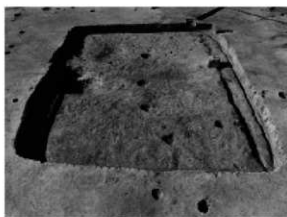
SB501 (南から)



SB502 遺物出土状況(1) (東から)



SB502 遺物出土状況(2) (東から)



SB502 完掘状況 (東から)



SB503 遺物出土状況 (南東から)

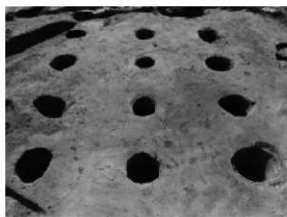
竪穴住居跡



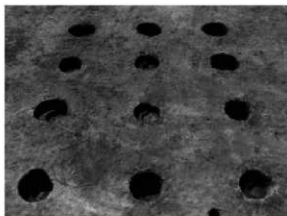
SB304 完掘状況 (西から)



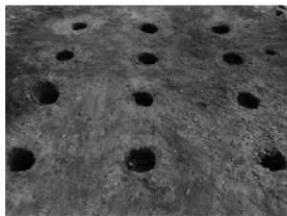
SB303 完掘状況 (南から)



SB302 完掘状況 (北から)



SB306 完掘状況 (北から)



SB307 完掘状況 (北から)

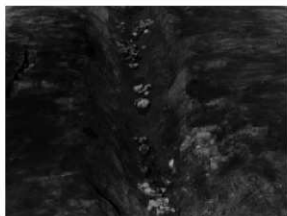
掘立柱建物跡



SD301 セクション5 遺物出土状況 (南から)



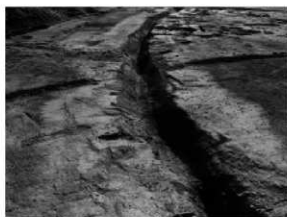
SD301 セクション2 遺物出土状況 (北から)



SD301 セクション1 遺物出土状況 (南から)



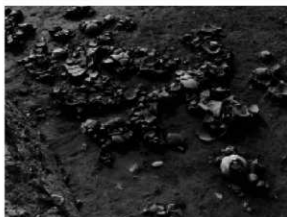
SD301 セクション6 遺物出土状況 (西から)



SD301 完掘状況 (北東から)



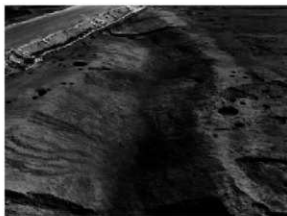
SD314 セクション 遺物出土状況 (西から)



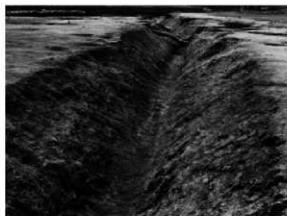
SD314 セクション 遺物出土状況 (北西から)



SD314 セクション 遺物出土状況 (東から)



SD314 完掘状況 (西から)



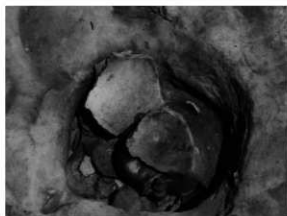
SD201 完掘状況 (北から)



SK3052 遺物出土状況 (上層：南から)



SK3052 遺物出土状況 (中層：南から)



SK3057 遺物出土状況 (南から)



SK226 遺物出土状況 (南から)



SK223 遺物出土状況 (西から)



SK228 遺物出土状況（上層：西から）



SK238 遺物出土状況（下層：南から）



SK506 遺物出土状況（南から）



SK3065 遺物出土状況（北から）



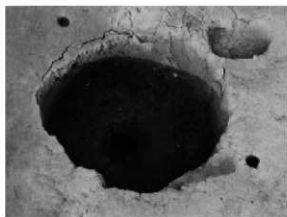
SK3213 遺物出土状況（南から）



SK3120 遺物出土状況（南から）



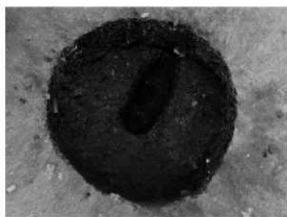
SK3012 遺物出土状況（西から）



SK511 完掘状況（南から）



SK3162 完掘状況（東から）



SK3166 完掘状況（南から）



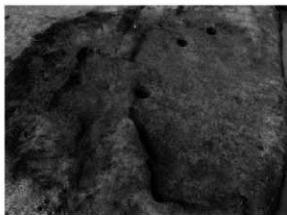
SK3058 遺物出土状況（東から）



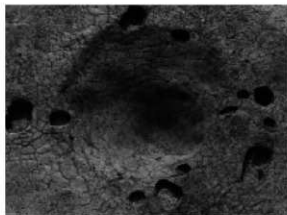
SK3102 遺物出土状況（南東から）



SK3121 遺物出土状況（西から）



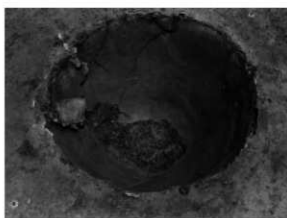
SK3022 完掘状況（南西から）



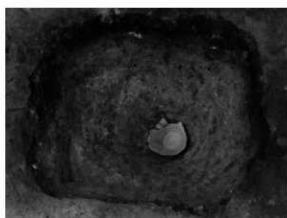
SK502 完掘状況（北東から）



SK3066 遺物出土状況（東から）



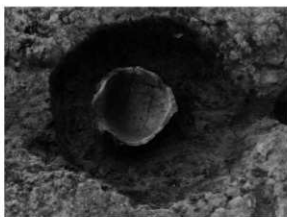
SX201 遺物出土状況（南から）



SX202 遺物出土状況（東から）



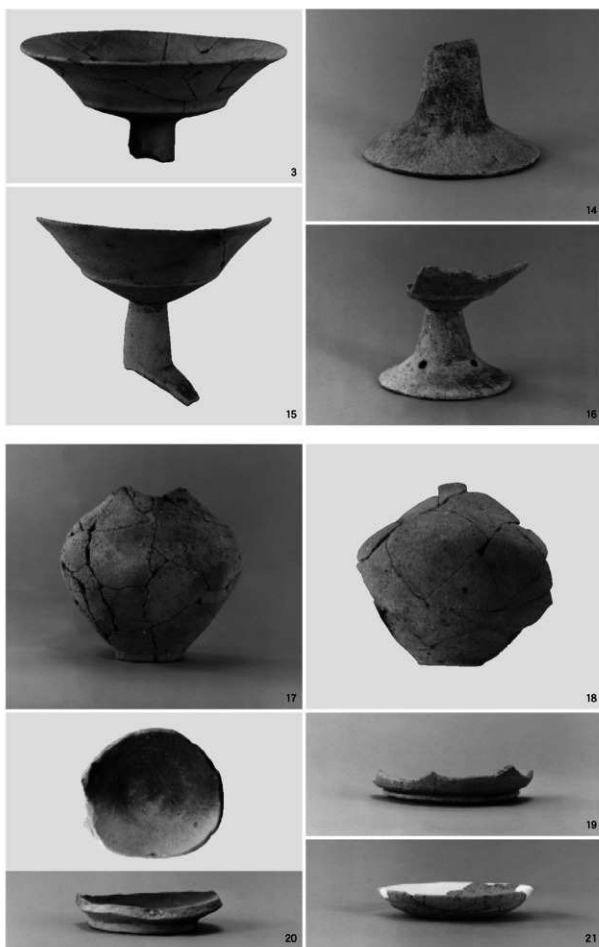
SK3115（南から）



SP3202 遺物出土状況（東から）



竖穴住居跡出土遺物(1)



竖穴住居跡出土遺物(2)、柱穴出土遺物



溝出土遺物(1)

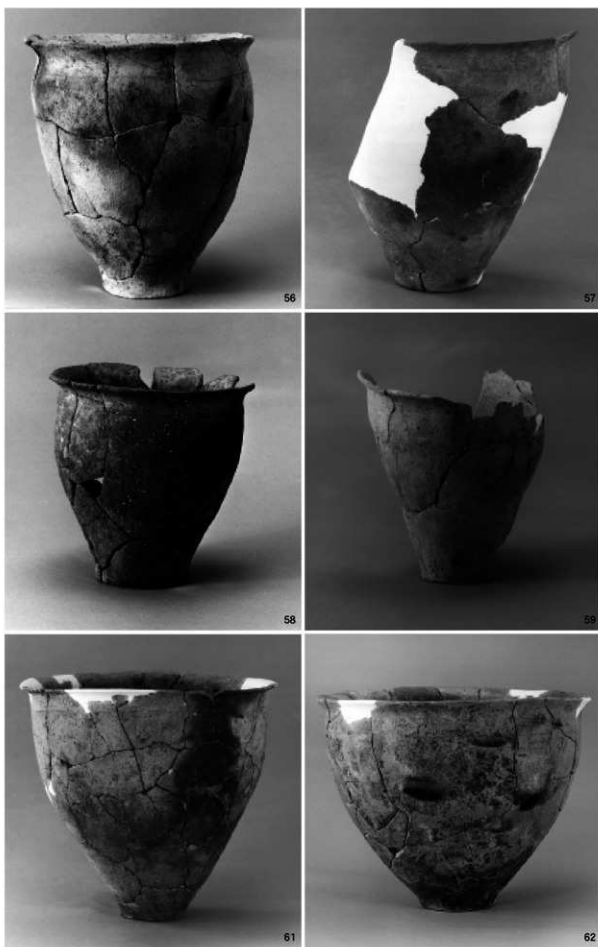


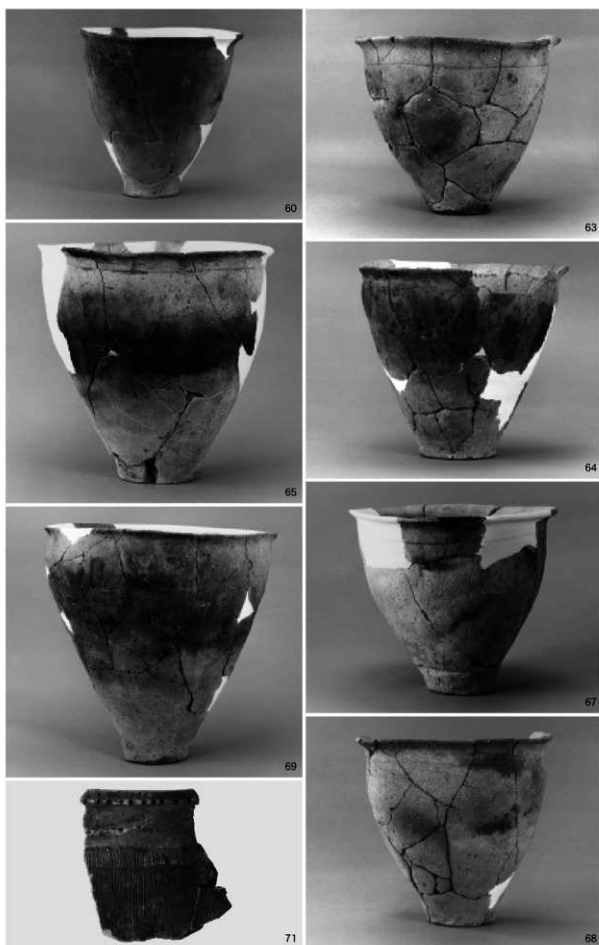
清出土遺物(2)



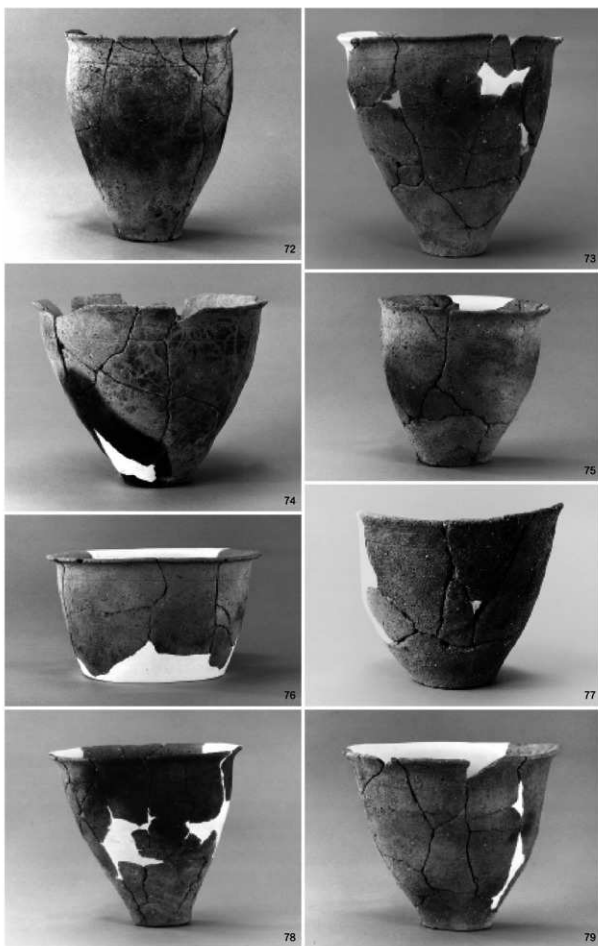


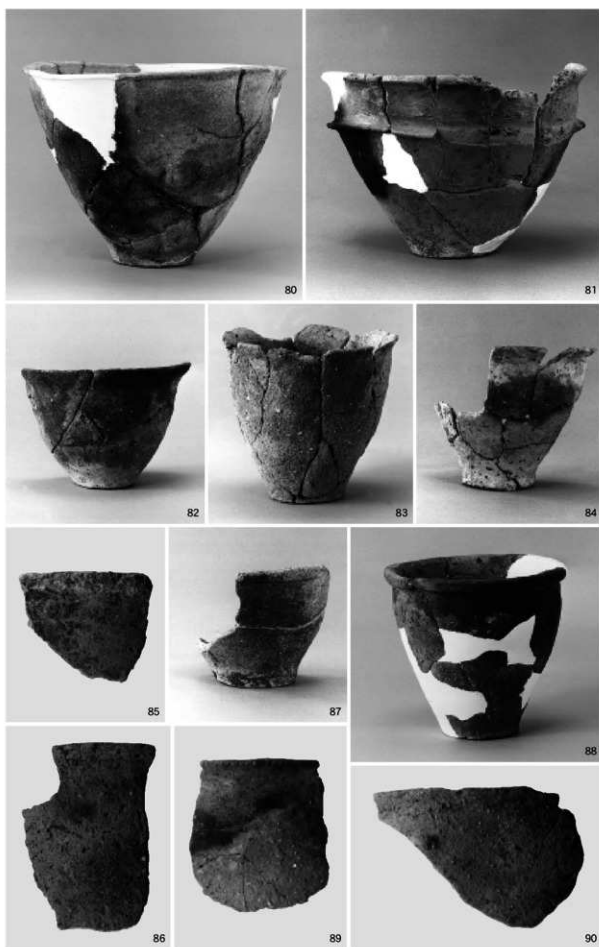
清出土遺物(4)





清出土遺物(6)

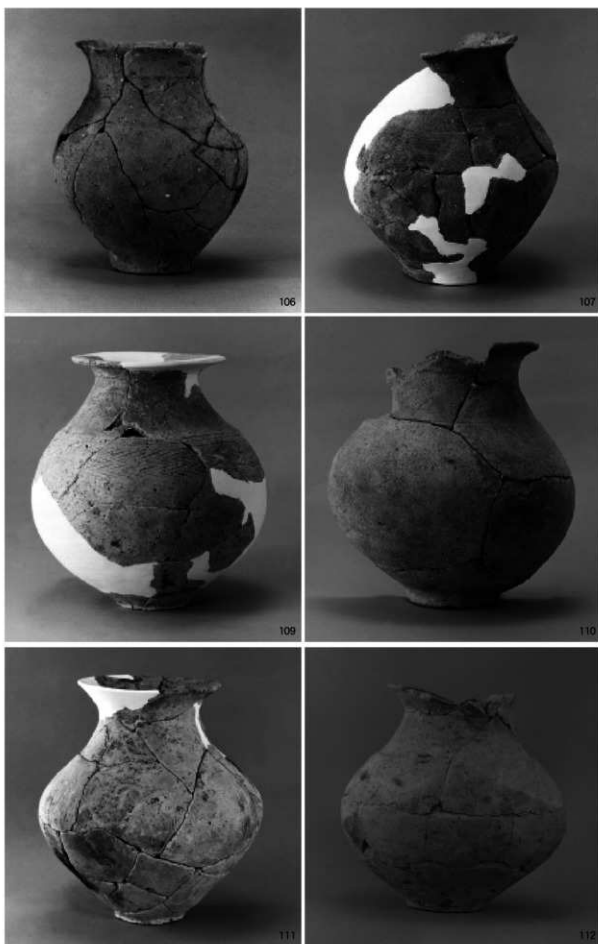




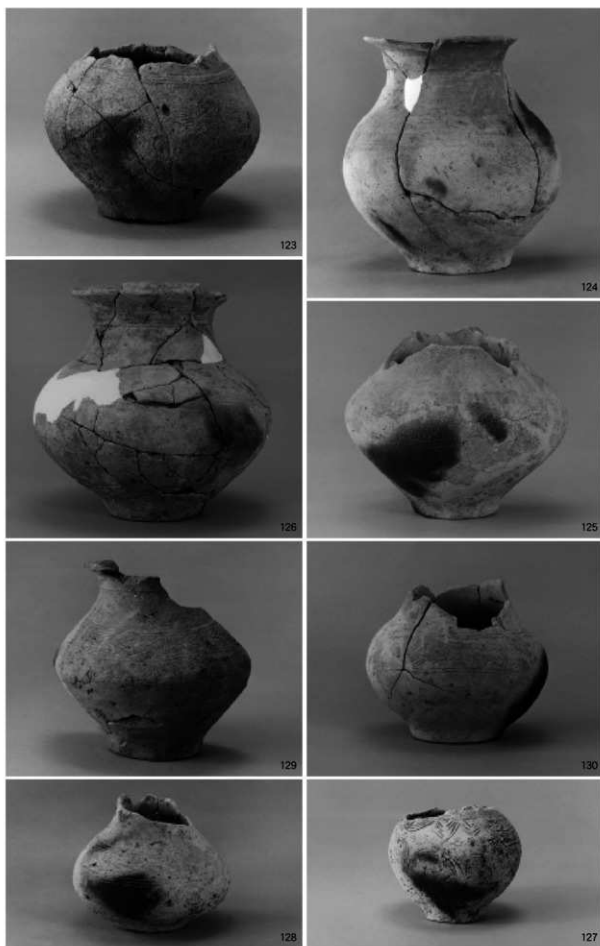
清出土遺物(8)



清出土遺物(9)



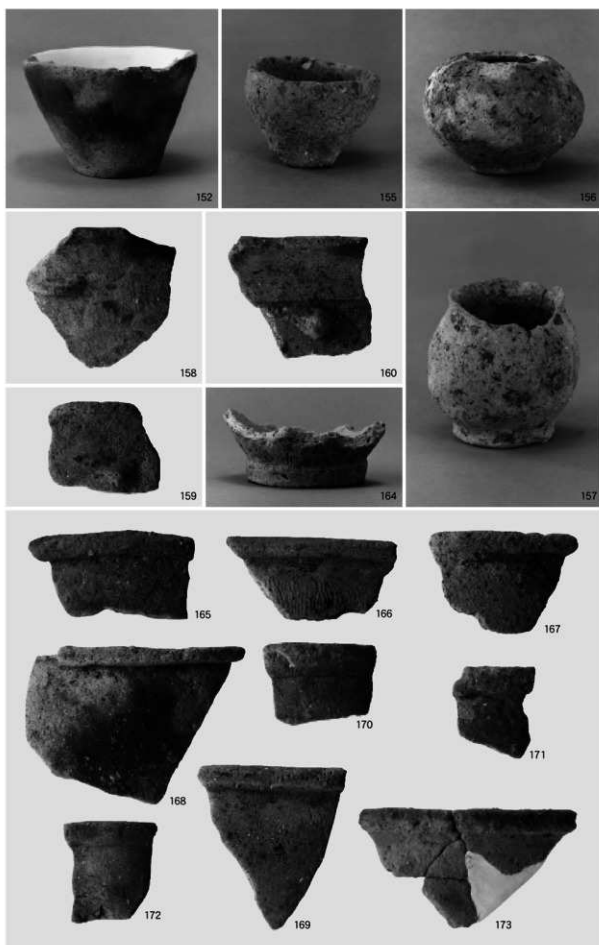








清出土遺物14



图版 31

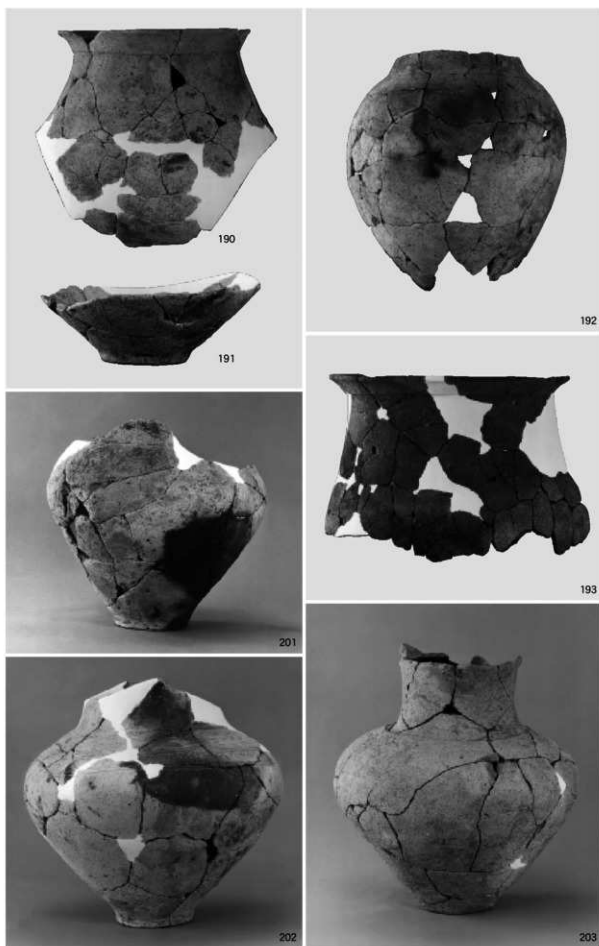


土坑出土遺物(1)

图版 32



土坑出土遺物(2)

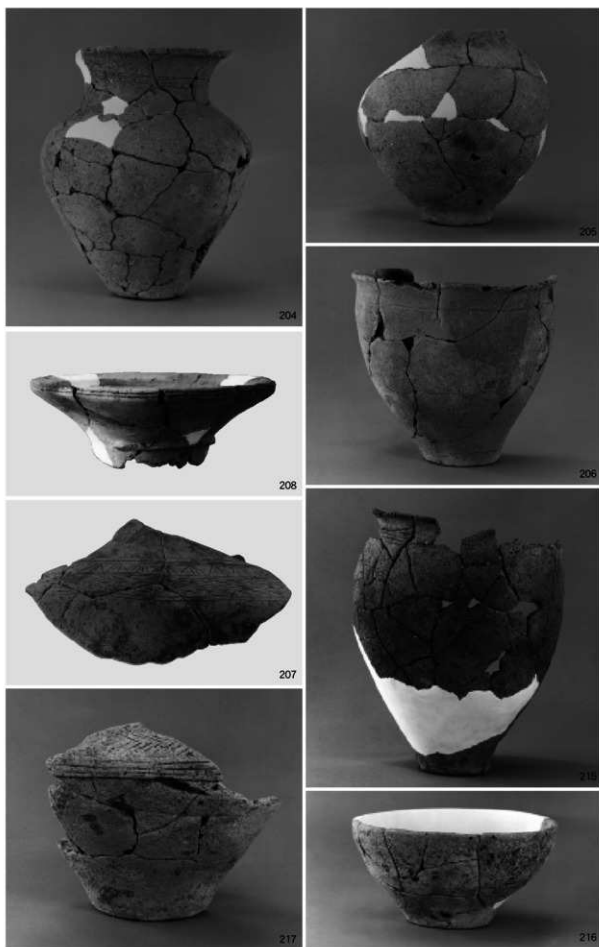


土坑出土遺物(3)

图版 34

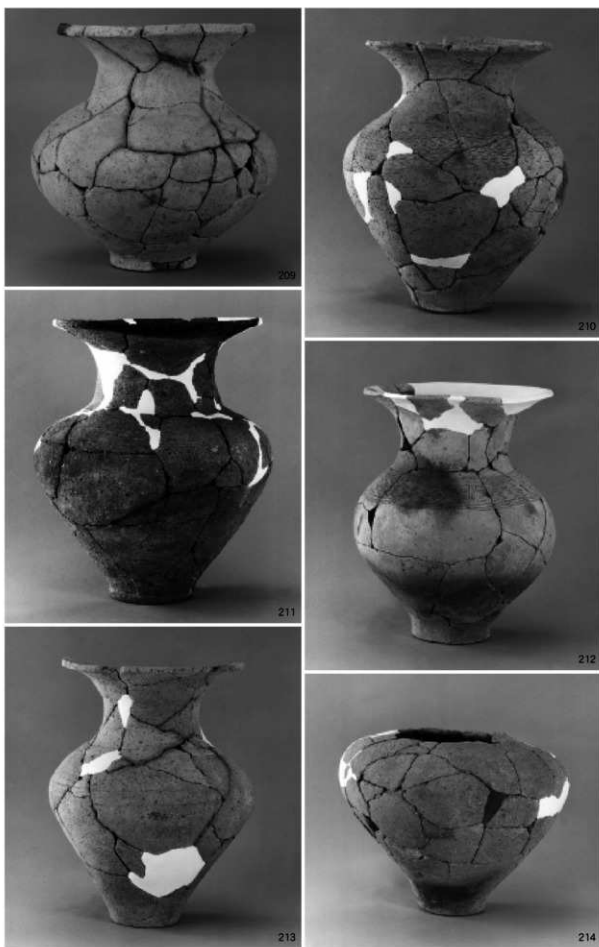


土坑出土遺物(4)

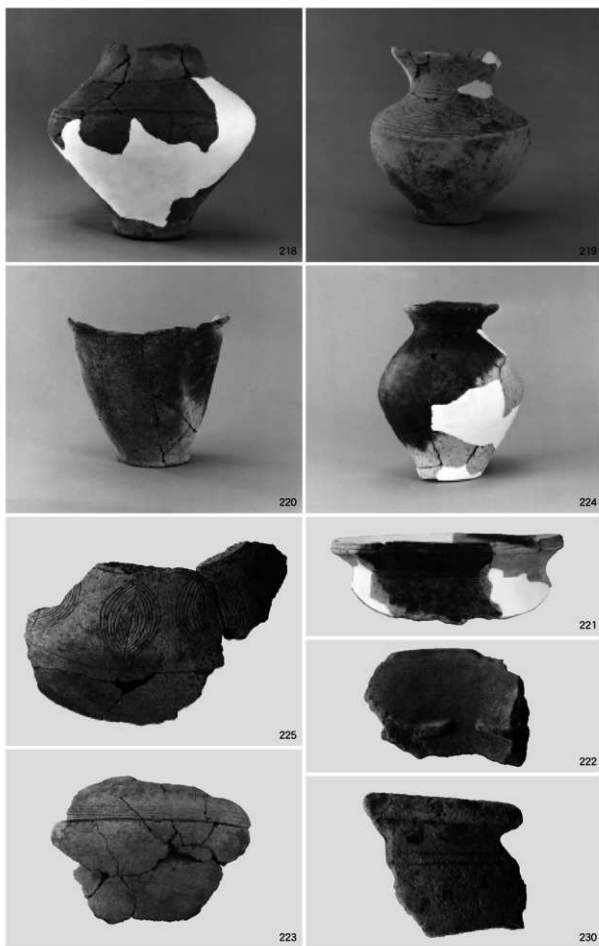


土坑出土遺物(5)

图版 36

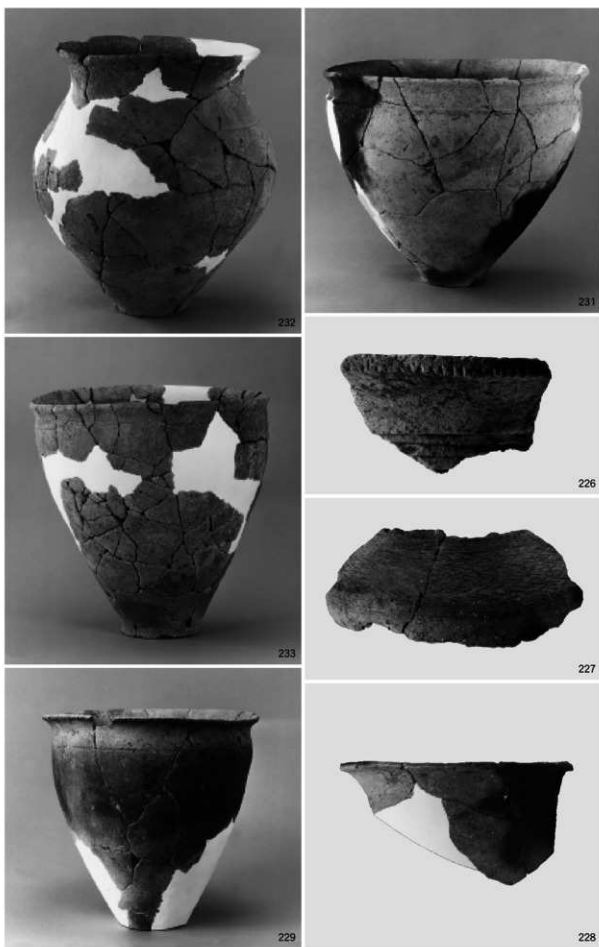


土坑出土遺物(6)



土坑出土遺物(7)

图版 38

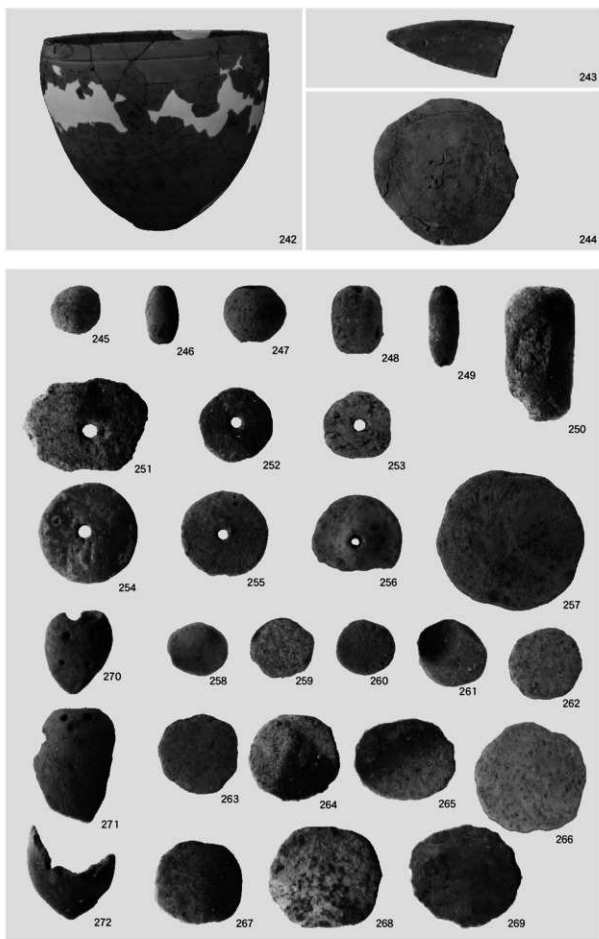


土坑出土遺物(8)

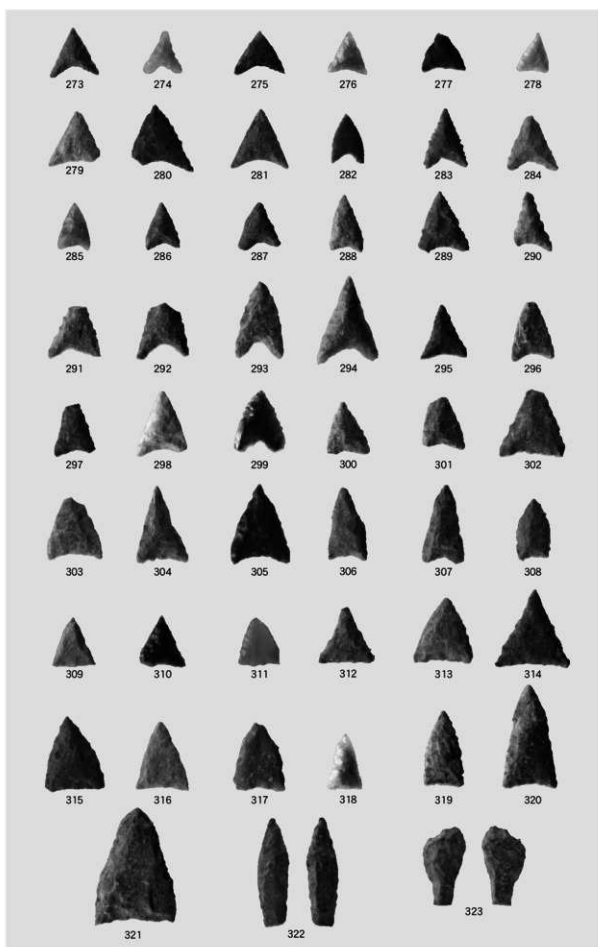


土坑出土遺物(9)

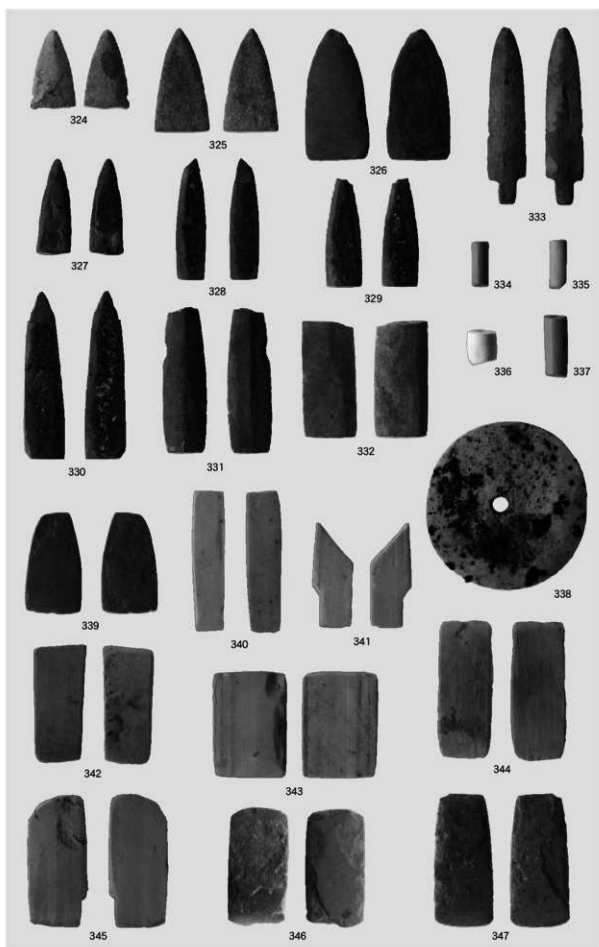
圖版 40

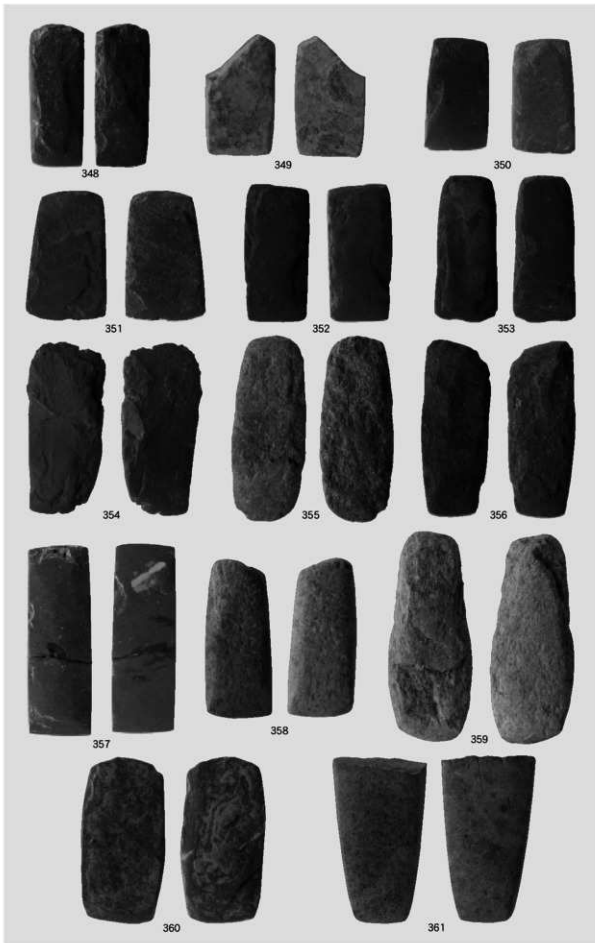


埋藏遺構出土遺物、包含層出土遺物、土製品

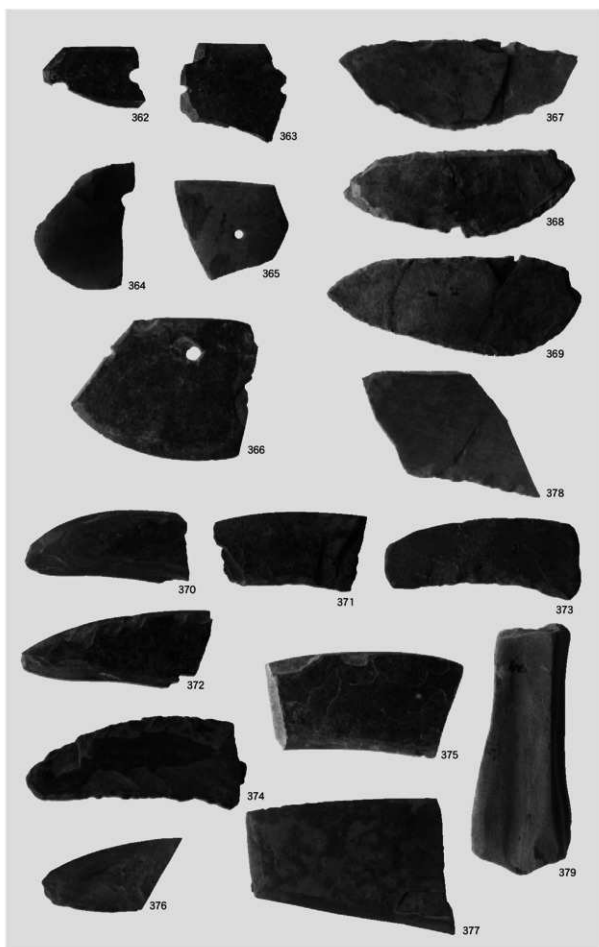


石器·石製品(1)

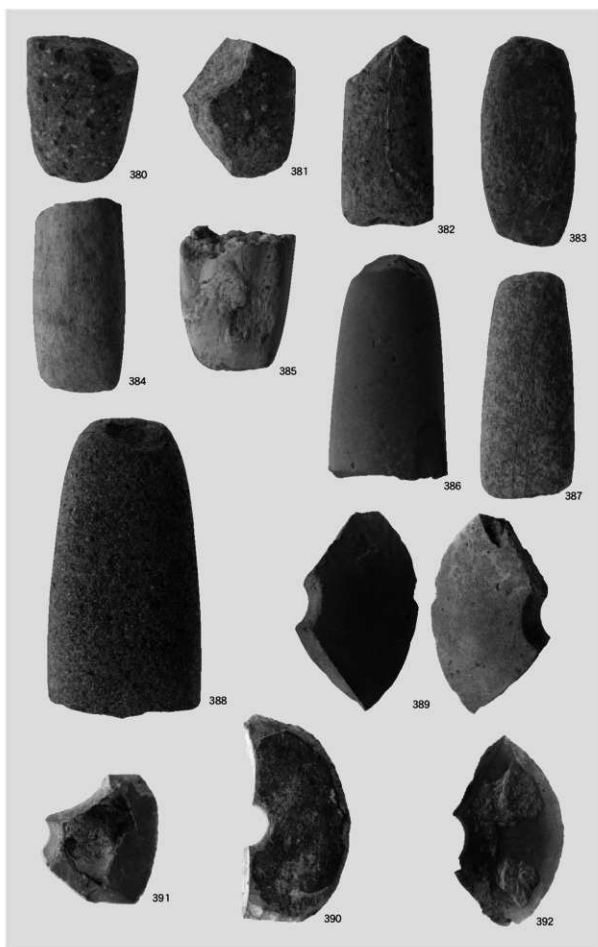




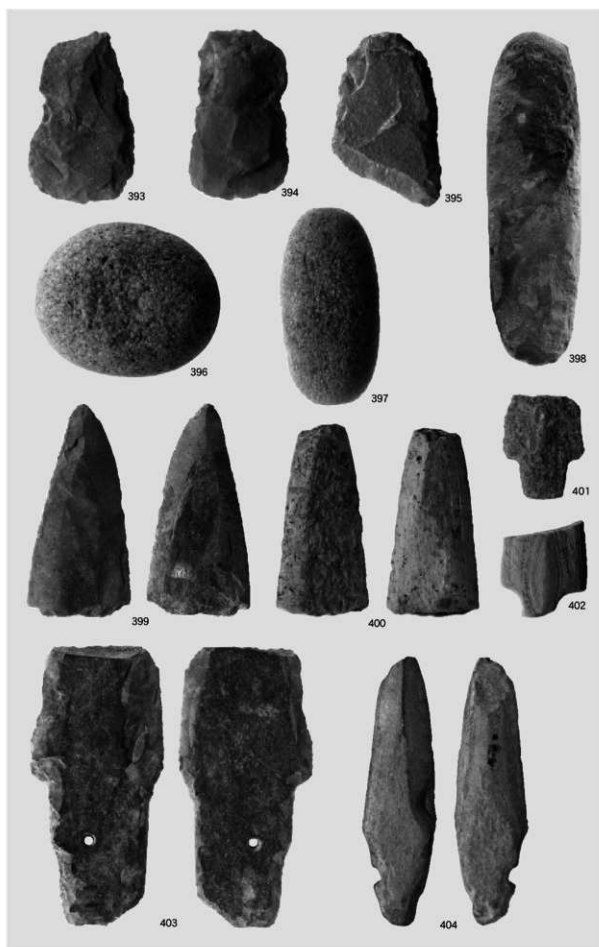
石器・石製品(3)



石器・石製品(4)



石器・石製品(5)



報告書抄録

ふりがな	よしながいせき (Vちく)
書名	吉永遺跡 (V地区)
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第38集
編集著者名	向上昭彦 藤田英憲 堀田浩一 松浦孝和 上土井宏典 谷口哲一
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL.083-923-1060
発行年月日	西暦2003年3月28日 (平成15年3月28日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東緯 〃 〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしなが いせき 吉永遺跡 (V地区)	よしなが いせき 豊浦郡豊浦町 大字吉永	35443		34° 7' 30"	130° 55' 16"	20020422 }	15,000	ほ場整備
						20021212		

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉永遺跡 (V地区)	集落跡	弥生時代 } 近世	竪穴住居跡 3軒 掘立柱建物跡35棟 溝 28条 土坑 267基 柱穴 約3000個 埋甕遺構 2基	弥生土器 須恵器 土師器 土製品 (土弾、土錘、紡 錘車、円盤・陶 埴) 石器・石製品 (鎌、庖丁、斧、 鎌、剣、敲石、 砥石、管玉、有 孔円盤など)	

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第38集

吉 永 遺 跡

(V地区)

2003年3月

編集・発行 財団法人山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター

印 刷 アロー印刷株式会社
(下関市卸新町10番地の3)